

直刀原遺跡

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（西部山麓地区）
道路建設に関する埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1991年3月

長野県下伊那地方事務所
飯田市教育委員会

直刀原遺跡

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（西部山麓地区）
道路建設に関する埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1991年3月

長野県下伊那地方事務所
飯田市教育委員会

序

社会の変化に伴って、飯田市内に於いても様々な開発事業が行なわれています。それらに関連し、飯田市教育委員会では、埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存として後世に伝える事業を実施しています。

本報告書は、西部山麓線の新設に伴う遺跡発掘の報告書で、4冊めに当たります。西部山麓線の通過地帯は、前3冊の報告にも有りますが、中央アルプス南端の山裾で、飯田市街から見ると一段高く住むには条件が悪いと思われますが、縄文時代から弥生時代の住居址が発見されております。この事実から埋蔵文化財の分布は、現在私達が住んでいる場所すべてに在るといつても過言ではないと思います。

西部山麓線は伊賀良・山本地区上段地帯の開発・活性化を目的とした道路であります。古代人の残した貴重な文化遺産の消滅という事実も心に止めておきたいものだと思います。本報告書は消滅する文化財を後世に残す唯一の記録です。

古代人の生活・文化が私達に語りかけてくるのが、発掘報告書であり又発掘された土器・石器だと思います。

この報告書にあります歴史の事実は、私達の遠い先祖の生活史であり、原点といつても過言ではないと思います。

本報告書から私達の心の奥に潜む、過去の何かが目覚めて来るかもしれません。皆様のはるか古代を考える一助になれば幸いです。

終りに、調査実施にあたり様々なご協力をいただいた、関係各位に心から感謝申しあげます。

平成3年3月

飯田市教育委員会

教育長 福島 稔

例　言

- 1 本書は、農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業西部山麓3期地区道路建設に伴う、飯田市北方「直刀原遺跡」発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は長野県下伊那地方事務所からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
- 3 遺跡名「直刀原遺跡」に、略号「CTH」を与え現地作業から、整理図面・遺物等にすべてこの略号を用い記録保存した。
- 4 本書は佐々木嘉和・小林正春が執筆・編集を行い、小林が総括した。
- 5 本書に掲載した図面類の整理・遺物実測は佐々木が行った。なお、整理作業実施にあたり、整理作業員が補佐した。
- 6 本書に掲載した遺構図の中に記した数字は、それぞれの穴の深さ（傾斜面の為、穴の壁最低部）をcmで表している。
- 7 エレベーションの水平線に付した数字は、標高をmで表したものである。
- 8 本書に掲載した石器実測図の表現として、使用痕及び擦痕を実線で、刃つぶし及び敲打痕を破線で表した。
- 9 本書に掲載した遺物写真図版の撮影は、株式会社ジャステックが行なった。
- 10 本書に関連する出土品及び諸記録は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市上川路飯田市考古資料館に保管している。

目 次

序

例言

I 経過

1 調査に至るまで	1
2 調査の経過	1
3 調査組織	1

II 遺跡の立地と環境

1 自然環境	5
2 歴史環境	5

III 調査結果

1 繩文時代

1) 住居址

① 1号住居址	9
② 2号住居址	10

2) 坪 穴

① 坪穴 1	11
--------------	----

3) 土 坑

土坑 1 • 土坑 2 • 土坑 3 • 土坑 4 • 土坑 5 • 土坑 6 • 土坑 7 • 土坑 8 • 土坑 9 • 土坑 10	
土坑 11 • 土坑 12 • 土坑 13 • 土坑 14 • 土坑 15 • 土坑 16 • 土坑 17 • 土坑 18 • 土坑 19 • 土坑 20	
土坑 21 • 土坑 22 • 土坑 23 • 土坑 24 • 土坑 25 • 土坑 26 • 土坑 27 • 土坑 28 • 土坑 29 • 土坑 30	
土坑 31 • 土坑 32 • 土坑 33 • 土坑 34 • 土坑 35 • 土坑 36 • 土坑 37 • 土坑 38 • 土坑 39 • 土坑 40	
土坑 41 • 土坑 42 • 土坑 43 • 土坑 44 • 土坑 45 • 土坑 46 • 土坑 47 • 土坑 48 • 土坑 49 • 土坑 50	
土坑 51 • 土坑 52 • 土坑 53 • 土坑 54 • 土坑 55 • 土坑 56 • 土坑 57 • 土坑 58 • 土坑 60 • 土坑 61	
土坑 62 • 土坑 63 • 土坑 64 • 土坑 65 • 土坑 66 • 土坑 67 • 土坑 68 • 土坑 69 • 土坑 70 • 土坑 71	
土坑 72 • 土坑 73 • 土坑 74 • 土坑 75 • 土坑 76 • 土坑 77 • 土坑 78 • 土坑 79 • 土坑 80 • 土坑 81	
土坑 82 • 土坑 83 • 土坑 84 • 土坑 85	

4) 集 石

① 集石 1	35
② 集石 2	35

5) 穴 等

6) 造構外出土遺物	37
------------------	----

①早期	38
②前期～中期初頭	38
③中期	38
④後・晚期	39
⑤石器	39
2 弥生時代以降	
1) 溝 址	
①溝址 1	40
②溝址 2	40
③溝址 3	40
2) 遺構外出土物	40
IV まとめ	41

挿図目次

挿図 1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図	2
挿図 2 調査位置及び周辺図	3
挿図 3 調査区位置図	4
挿図 4 調査遺構全体図	6
挿図 5 B区土層断面図	7
挿図 6 1号住居址	9
挿図 7 2号住居址	10
挿図 8 土坑53～58・土坑60～65、Pit12～15	29
挿図 9 土坑17～37、集石1・2、Pit10・11	30
挿図10 土坑1～16、Pit8・9	31
挿図11 土坑66～85、Pit16～19	32
挿図12 Pit 1～3	33
挿図13 溝址1、堅穴1	33
挿図14 土坑38～52、溝址2・3	34
挿図15 Pit 7	35
挿図16 土坑17	35
挿図17 Pit 4～6	36

図版目次

第1図	1・2号住居址出土土器	47
第2図	2号住居址出土土器・石器	48
第3図	2号住居址出土石器	49
第4図	竪穴1・土坑1出土土器・石器	50
第5図	土坑5・6・7・9・10出土土器・石器	51
第6図	土坑11出土土器・石器	52
第7図	土坑12・13・14・15・17出土土器・石器	53
第8図	土坑18・19・22出土土器・石器	54
第9図	土坑22・23出土土器・石器	55
第10図	土坑23・24・26・27出土土器・石器	56
第11図	土坑28・29・30出土土器・石器	57
第12図	土坑31・33出土石器	58
第13図	土坑33・35・36出土土器・石器	59
第14図	土坑37・39・40出土土器・石器	60
第15図	土坑41・42・43・44・45・46・47・48・49・50・51・52出土土器・石器	61
第16図	土坑53・54・55・56・57・58・60出土土器・石器	62
第17図	土坑60・61・62出土土器・石器	63
第18図	土坑62・63・64・65・67・68・69出土土器・石器	64
第19図	土坑70・71・72・73・74・75出土土器・石器	65
第20図	土坑76・77・79出土土器・石器	66
第21図	土坑79・80・81・84・85、集石1・2出土土器・石器	67
第22図	Pit 4・5・7・11・12・13出土土器・石器	68
第23図	Pit 16・17・18・19・遺構外(早期・前期)出土土器・石器	69
第24図	遺構外(前期終末～中期中葉)出土土器	70
第25図	遺構外(中期中葉)出土土器	71
第26図	遺構外(中期中葉)出土土器	72
第27図	遺構外(中期中葉)出土土器	73
第28図	遺構外(中期中葉)出土土器	74
第29図	遺構外(後期・晚期)出土土器・石器	75
第30図	遺構外出土石器	76
第31図	遺構外出土石器	77

第32図 遺構外出土石器	78
第33図 遺構外出土石器	79
第34図 遺構外出土石器	80
第35図 遺構外出土石器	81
第36図 遺構外出土石器	82
第37図 遺構外（弥生時代後期～古墳時代前期）、溝址2・3出土土器・石器	83
第38図 小型石器（遺構出土）	84
第39図 小型石器（遺構外出土）	85
第40図 小型石器（遺構外出土）	86

写真図版目次

- 図版1 調査前
- 図版2 遺構全体
- 図版3 遺構全体
- 図版4 遺構全体、1号住居址全体
- 図版5 2号住居址
- 図版6 積穴1全体、土坑1～7、ロームマウンド
- 図版7 土坑1・11・17
- 図版8 土坑17・18・22
- 図版9 土坑23・26・28・33・52
- 図版10 土坑62・70・79・80
- 図版11 集石1、溝址1・2・3
- 図版12 2号住居址出土遺物
- 図版13 積穴1、土坑1・5・6・9・11出土遺物
- 図版14 土坑13・14・17・22・23出土遺物
- 図版15 土坑26・30・39・49・52・60・61出土遺物
- 図版16 土坑70・73・79・81出土遺物
- 図版17 土坑27・29・33・35・39・80・85出土遺物
- 図版18 土坑3・24・30・39・40・51・52・56・62・71・74・77・79、集石出土遺物
- 図版19 遺構外出土遺物
- 図版20 遺構外出土遺物
- 図版21 遺構外出土遺物
- 図版22 遺構外出土遺物
- 図版23 遺構外出土遺物
- 図版24 遺構外・溝址2出土遺物
- 図版25 調査スナップ

I 経過

1. 調査に至るまで

飯田市西部の中央アルプス山麓ぎわは、果樹園が主体の農業地帯である。近年の農業経営上、車を使っての農作業が不可欠の状況となっているが、この地帯の道路は不十分なもので、南北方向に走る主要な道路は国道153号のみであり、各地区間の交通には様々な支障をきたしていた。

そこで西部の山本地区・伊賀良地区・上飯田地区等を結ぶ道路としての農道整備が計画された。

計画立案は長野県（下伊那地方事務所）、飯田市農政部局においてなされ、具体的に建設へと至った。

その結果飯田市西部の山本・伊賀良地区の活性化を目途とした農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業の西部山麓地区の建設工事は、伊賀良地区南西端からⅠ期工事として着手された。

それにかかる埋蔵文化財の調査は、昭和60・61年度において、飯田垣外・火振原・梅ヶ久保の3遺跡について行なわれ、平成元年度にⅡ期工区の細田北遺跡が行なわれた。

引き続き、下伊那地方事務所と飯田市教育委員会の協議を基に、発掘調査実施についての委受託契約を締結した。その契約により現地での発掘調査に着手した。

2. 調査の経過

平成2年8月24日に現地に資材運搬を行い、27日㈪発掘調査を開始した。

道路敷地は山麓に発達した広大な扇状地上部の緩斜面を、東に向かって下っており、斜面がやや急になる所で年度当初に調査した、大原遺跡に続く。調査区の高低差は約10mである。

扇状地上部の緩斜面であり、遺構の存在が予測できるので、全面調査を行った。重機により表土を剥ぎ調査を開始した。グリットはセンターを中心に配置した。

茶褐色土中に遺物の混入が多く、遺構の検出までに時間がかかった。

黄色土面（ローム層）で遺構の検出作業を行い、縄文時代～中世の遺構を確認した。統いて各遺構の掘り下げ調査・写真撮影・実測作業等を行ない、10月25日に発掘作業を終了した。

引き続いて飯田市考古資料館において、現地で記録した図面・写真の整理及び出土遺物の水洗・注記・復元作業の後、遺物の実測・写真撮影等の諸整理作業を行ない、本報告書を作成した。

3. 調査組織

1) 調査団

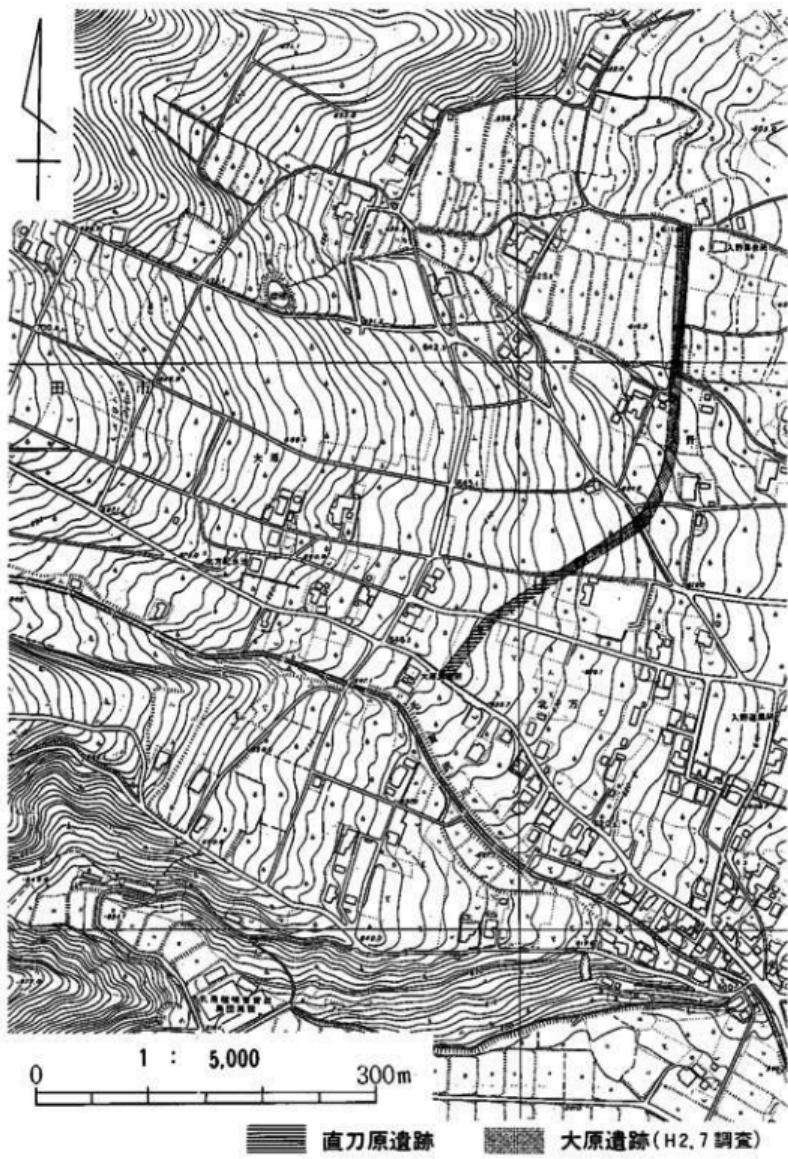
調査担当者 小林 正春

調査員 佐々木嘉和 佐合 英治 吉川 豊 馬場 保之 渋谷恵美子



1. 直刀原遺跡 2. 大原遺跡 3. 飯田垣外遺跡 4. 火振原遺跡 5. 梅ヶ久保遺跡
 6. 細田北遺跡
 A. 西の原遺跡 B. 立野遺跡 C. 与志原遺跡 D. 上の平東部遺跡 E. 寺山遺跡
 F. 六反田遺跡 G. 大東遺跡 H. 酒屋前遺跡 I. 泥沢井戸遺跡
 J. 小垣外(辻垣外)遺跡 K. 三蓋瀬遺跡 L. 上の金谷遺跡 M. 中島平遺跡
 N. 宮ノ先遺跡 O. 鳥居平遺跡 P. 殿原遺跡 Q. 小垣外・八幡面遺跡

挿図1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図



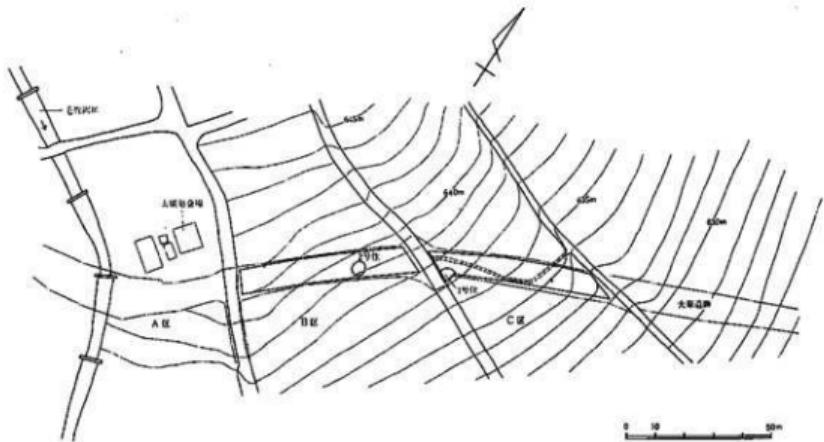
挿図2 調査位置及び周辺地図

作業員	木下 傳	木下 当一	高橋收二郎	細田 七郎	松下 真幸
	伊藤 和恵	森 信子			
整理作業員	池田 幸子	伊原 恵子	大藏 祥子	金井 照子	金子 裕子
	唐沢古千代	唐沢さかえ	川上みはる	木下 早苗	木下 玲子
	梯原 勝子	小池千津子	小平不二子	小林 千枝	佐々木真奈美
	田中 恵子	筒井千恵子	丹羽 由美	荻原 弘枝	林 勢紀子
	原沢あゆみ	樋本 宣子	平栗 陽子	福沢 育子	福沢 幸子
	牧内喜久子	牧内とし子	牧内 八代	松本 恵子	三浦 厚子
	南井 規子	宮内真理子	森 信子	森藤美知子	吉川 悅子
	吉川紀美子	吉沢まつ美	若林志満子	渋谷千恵子	

2) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

竹村 隆彦	(社会教育課長)
中井 洋一	(社会教育課文化係)
小林 正春	(同上 文化係)
吉川 豊	(同 上)
馬場 保之	(同 上)
篠田 恵	(同 上)



挿図3 調査区位置図

II 遺跡の環境

1 自然環境

飯田市伊賀良地区は飯田市街地の南西4～2kmに位置し、北西半分は中央アルプス南端の山麓に発達した扇状地上、東南半分は扇状地を載せている段丘上にあり、両者が連続した地形上に立地している。

直刀原遺跡は、飯田市北方入野に位置する遺跡である。字入野は山麓の扇状地上部の、広大な東向きの斜面にある。北側斜面の下部で字新井に続き、南西側は広い谷を挟んで平成元年度調査の梅ヶ久保である。北西側は山が迫り、南東側は斜面が緩くなり野池・山口に続く。調査地点は入野の西方に位置し標高640mで、東に比高差約10m下り、年度当初調査した大原遺跡に続く。

調査区延長は130mである

現在この遺跡範囲は果樹園と飼料畑であり、保存状態は比較的良好であった。この広大な入野の北から東に向いた、斜面にも隠れた微地形があり、住人の話では斜面途中に湧水があるという。基盤の土は黄色のローム層で一部に礫が混入している。

この斜面は飯田市街地から見ると、最後まで雪の残るところで現在の住環境からすれば劣悪と思われるが、ここに生活の拠を定めた古代の人々の労苦も偲ばれる、遺跡といえる。

2 歴史環境

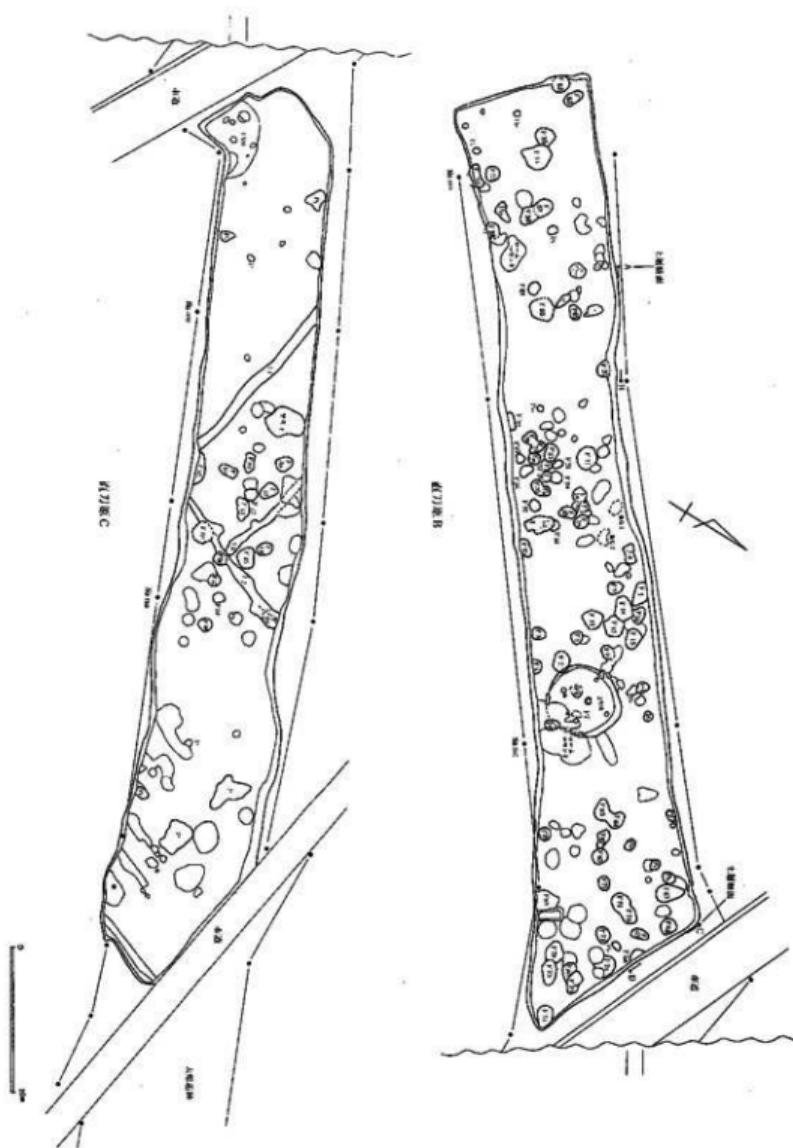
伊賀良地区の遺跡を概観すると、山地を除いてほぼ全面的に包蔵地といって良く100余遺跡を数える。調査がなされた遺跡は、当広域農道に伴う発掘調査で飯田垣外・火振原・梅ヶ久保遺跡（注1）、細田北遺跡（注2）、大原遺跡（注3）、学術調査による西の原遺跡（注4）、立野遺跡（注5）、中央自動車道にかかる発掘調査で与志原・上の平東部・寺山・六反田・大東・酒屋前・滝沢井尻・小垣外（辻垣外）・三臺淵・上の金谷各遺跡（注6）、諸開発にともない中島平（注7）・宮の先（注8）・酒屋前（注9）・鳥屋平（注10）・殿原（注11）・八幡面・小垣外（注12）・下原（注13）等の各遺跡である。

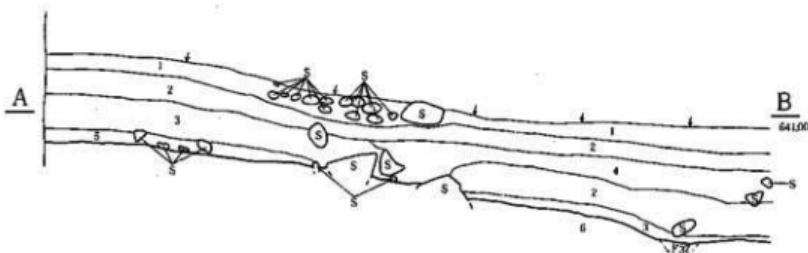
縄文時代から中世まで各期の好資料・遺構が発見され飯田下伊那地区を代表する埋蔵文化財包蔵地密集地域といえる。

特に本農道の先線に位置する立野遺跡は戦後まもなく數度の調査がなされ（注5）、縄文時代早期押型文土器の標式遺跡である。しかし遺跡は耕地整理・土取り等により消滅状態に近くなっている。

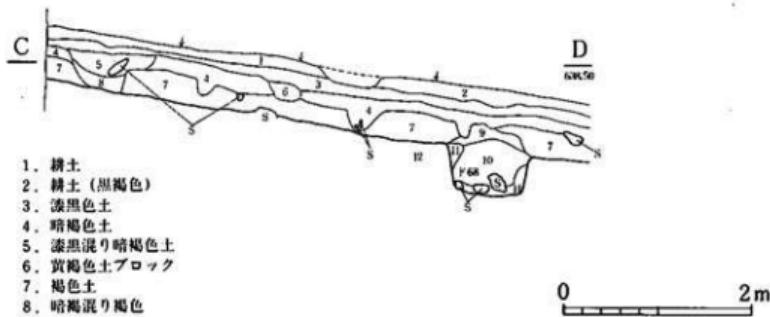
中央自動車道に伴う、各遺跡の調査では各期の住居址等の遺構が調査され、扇状地中央部付近の遺跡状態が明確にされた。

插図4 調査遺構全体図





1. 耕土
2. 漆黒土
3. 暗褐色土
4. 黒土
5. 褐色土
6. 黄色砂質土(大石・礫混り)



挿図5 B区土層断面図

農業構造改善事業に伴う、中島平遺跡では縄文時代早・前期、弥生時代後期、古墳時代の遺構が調査され、扇状地端の小さな舌状台地の遺跡の在り方が注目された。

伊賀良地区内の古墳は52基(注14)が数えられているが、現存するものは数基である。古墳分布は飯田松川に面する扇端部、新川両岸の台地端部などに並ぶ。その他散在する古墳がわずかに見られる。

奈良時代に入って、古代東山道に「育良駅」の名前が見える。県内に入つて「阿知駅」の次に位置する駅であるが、その所在は確認されておらず、位置については諸説があり、共に中央自動車道から、南東側の扇状地端部にかけて設定されている。(注15)。

中世に入ると伊賀良庄の記録(注16)がある。鎌倉時代初期伊那郡伊賀良庄の地頭が北条時政で、江馬氏が司り北条氏滅亡後は、小笠原氏の所領となり小笠原氏繁栄の基盤の一つとなった地区である。又、当遺跡の西方約500mには、桜山城跡があり、戦国期においても何等かの意味を持った地としての位置付けもなされる。

この様に伊賀良地区を歴史的に概観したが、広大で肥沃な地であり、原始より古代そして現代まで大いに栄えた地ということができる。

こうした歴史背景のある伊賀良地区における、大原遺跡は、それら伊賀良地区全域を見下ろす地であり、地区内で展開された各時代の様々な人々の生活を見続けてきた場所である。

遺構の確認された縄文時代、弥生～古墳開代において、かような高所まで、居住域を求めた当時の生活や、当時の人々の旺盛な生き様が偲ばれる。

注

- 1 飯田市教育委員会 1987 『飯田垣外・火振原・梅ヶ久保遺跡』
- 2 飯田市教育委員会 1990 『細田北遺跡』
- 3 飯田市教育委員会 1990 4月調査 調査報告書年度内刊行
- 4 伴信夫・宮沢垣之 1967 「長野県飯田市伊賀良西ノ原遺跡調査報告」「信濃」
- 5 神村 透 1968・69「立野式土器の編年的位置について(1)～(7)」「信濃」20巻10号～21巻7号
神村 透 1982「立野式土器の編年的位置について(完)」「信濃」34巻2号
- 6 岡田 正彦 他 1972 「中央道調査報告一飯田市内その2ー」長野県教育委員会
- 7 飯田市教育委員会 1977 『伊賀良中島平』
- 8 飯田市教育委員会 1978 『伊賀良宮ノ先』
- 9 飯田市教育委員会 1983 『酒屋前遺跡』
- 10 飯田市教育委員会 1983 『鳥屋平』
- 11 飯田市教育委員会 1987 『殿原遺跡』
- 12 飯田市教育委員会 1988 『小垣外・八幡面遺跡』
- 13 飯田市教育委員会 1989 『下原遺跡』
- 14 市村 咸人 1955 『下伊那史』第2巻 下伊那史編纂委員会
- 15 市村 咸人 1961 『下伊那史』第4巻 下伊那史編纂委員会
- 16 宮下 操 1967 『下伊那史』第5巻 下伊那史編纂委員会

III 調査結果

1. 繩文時代

1) 住居址

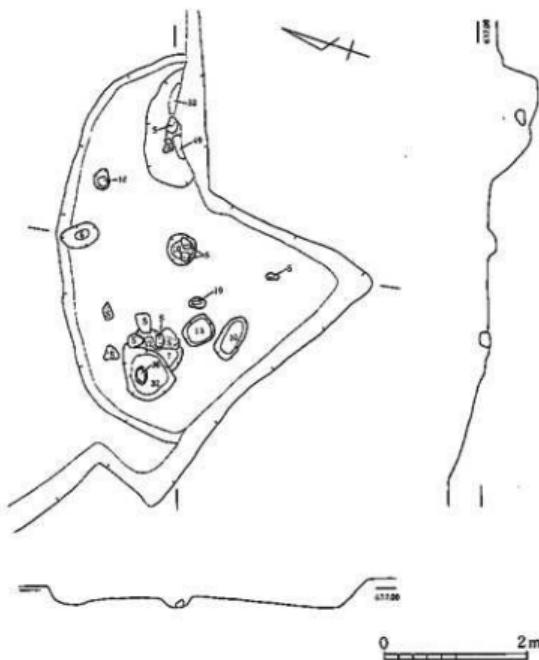
① 1号住居址（挿図6、第1図）

C区の西端で、市道と用地外にかかる検出し、ほぼ $\frac{1}{4}$ 調査した。主軸方向は炉が確認できなかつたので、不明であるが、斜面上方が奥壁と推測される。推定直径5.5mの不整円形竪穴住居址であり、検出面から床面まで50~10cmを測り、斜面下方が浅い。壁は垂直に近いが、緩い凹凸がある。床面は軟らかく凹凸があり、基盤の大石が露出している。主柱穴は、西側と用地外に半分かかった穴と想定される。深さは

西側が床から36cm、東側の半分のものは50cmを測る。炉は確認できなかつたが、南西側の市道下に位置していると考えられる。

遺物は少なく小片が15点出土している。ほとんどが無文であるが、施文された土器片には縄文・半截竹管による条痕・押し引きがある。

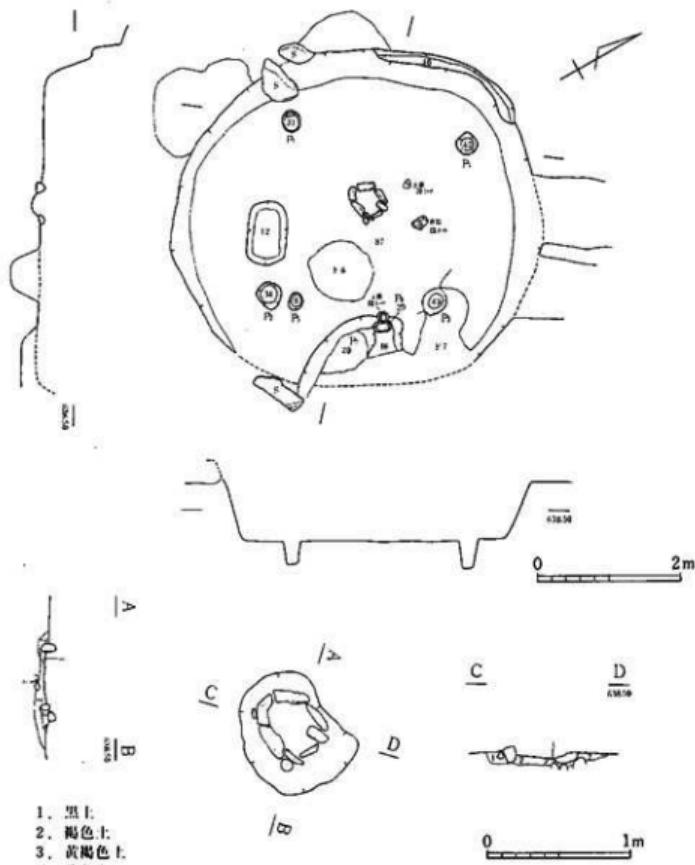
時期は出土土器から、中期中葉である。



挿図6 1号住居址

②2号住居址（挿図7 第1・2・3図）

B区中央からやや東寄りで検出し、土坑2・5・6・7、ロームマウンド、耕作の擾乱に切られる。褐色土面に、漆黒色土と黒色土が円形に入る部分を確認、掘り下げ調査に入った。直径5mのほぼ円形の竪穴住居址であり、斜面に築かれている為、斜面上部では検出面から、床面まで1m余の深さがあり、下方ではほとんど確認できなかった。壁は垂直に近く、覆土はレンズ状に堆積していた。床面は堅く平坦であるが、斜面下方の東南方向にわずか傾いている。炉は自然石8個を使用した石囲炉で、床面中央のやや奥壁寄りに位置する。不整方形を呈し、50×40cmの範



挿図7 2号住居址

圓を石で囲んでおり、掘り方は20cm位ずつ広がる。焼土は基盤の黄色土が少し焼けただけで、床面から5cmと浅く、石もわずか埋めてあるだけである。主柱穴は4本で、40cm前後の深さを持ち、やや奥壁寄りに掘られている。P3は土坑に切られ、底部に基盤の石が出ている。P5～P7は、入り口施設と推測できる。

遺物は、比較的少なく完形に近いものは無い。7はP3の覆土中から出土した深鉢片であり、8・9は遺構図に出土位置を入れた。9はP6の横から、正位で出土した。10～12は深鉢の口縁片であり、13～23は半裁竹管による施文で、平出第III類Aに比定され、13～15は口縁片である。24図1～6は深鉢口縁、7～20は胴部片、21・22は浅鉢の口縁、23是有孔鉗付土器、24はミニチュアの底部、25は土製円板である。

2図26～29、3図1～4は打製石斧であるが、3は凹石の破片の可能性もある。5・6は横刃形石器、7は敲打器である。8は炉の北東50cmから床面密着で出土し、台石である。9は花崗岩製石皿の半欠品である。

時期は出土土器から、中期中葉である。

2) 壺 穴

直刀原遺跡調査区内で、壺穴としたものは1基である。規模2m以上で、遺物の出土したものを見ると壺穴とした。

① 壺 穴 (挿図13 第4図)

C区の中央付近に検出し、複数の穴と切り合っている。規模は2.8×2～1.5mで、不整形を呈し底部には段がある。壁の傾斜には緩急があり、深さは30～20cmであり、長軸方向はN30°Wを測る。扇状地上面の緩傾斜が、終束する位置にあり、褐色土面に掘られ黒色土が入っていた。

遺物の出土量は、比較的多く1～6の他は無文土器片である。

時期は土器から、中期中葉である。

3) 土 坑

直刀原遺跡調査区内で、土坑としたものは、86基である。長径がほぼ1m以上2m以内で掘り込みを明瞭に確認できたものおよび遺物の出土した穴を土坑とした。内1基は掘り下げ調査中ローマウンドと判明し、遺物は土坑59で取り上げ記録したが本報告書では欠番とした。土坑の分布状態は扇状地上部(調査区B)に多く斜面は少ない。土坑個々の性格付けは不可能に近いが、明らかに墓壙と推定できるものがある。

①土坑1（挿図10 第4図）

B区中央やや東寄りの、褐色土面に黒色土と土器の入る土坑を検出した。穴2個の切り台いの可能性が強いが、一括して土坑1とした。規模は1.3×0.6mで、瓢箪形を呈し、底部は2段になり浅い部分に土器の出土が多い。深さは斜面に掘られている為、17～9cmである。壁・底部に基盤の石が露出している。

遺物は比較的多く出土し、土器・石器がある。10は、底部を欠くが、実測部の%が現存しており、新道式に比定される。11の3片は接合しないが同一個体である。19は玻璃質安山岩製の剥片石器である。

②土坑2（挿図10）

B区土坑1の東側1mに検出、2号住居址を切っている。1.6×1.1mの不整梢円形を呈し、長軸方向はN49° Eを測る。深さは斜面に掘られている為、40～20cmである。底部は北東へ緩く傾しており、基盤の石が露出している。

遺物の出土量はわずかで、図化掲載したものはなく、詳細な時期は不明である。

③土坑3（挿図10第38図）

B区土坑1の東南1.8m、用地境近くに検出した。1×0.8mの不整円形を呈し、深さは50cm前後である。壁は垂直に近く、基盤の石が露出しており、長軸方向はN39° Wを測る。

遺物の出土量はごくわずかで、図化掲載したのは、2の石鎌1個であり、時期は不明である。

④土坑4（挿図10）

B区土坑3の北東1.5m、用地外に半分かかって検出した。直径1m弱の円形と推測でき、壁は緩い傾斜で、深さは20cm弱と浅い。

遺物の出土量はわずかで、図化したものはなく、時期は不明である。

⑤土坑5（挿図10 第5図）

B区2号住居址の東に位置し、2号住居址を切り、ロームマウンドに切られる。検出時はロームマウンドも同一遺構とし、掘り下げ調査の後半で判明、最終的には1.2×0.7mの範囲を、土坑5とした。検出面からは50cm余の深さがあるが、実測図での深さは10cm弱になった。

遺物の出土量は比較的多く、土器・石器がある。1は口縁部にブリッヂを持つ鉢形土器で、称名寺式に比定できる。2は胴下部～底部で、網代痕が残る。

今回の調査で唯一確認された縄文時代後期の遺構である。

⑥土坑6（挿図10 第5図）

B区2号住居址の床面を切っており、 $0.9 \times 0.8m$ の不整方形で、床面から40cmの深さがあり、壁は緩い傾斜である。

遺物の出土量は少なく、6の同一個体片のみであり、接合した一片は土坑7からも出土している。

時期は出土土器から、中期後葉である。

⑦土坑7（挿図10 第5図）

B区2号住居址のP3周囲に落込を検出、床面を切っており、ロームマウンドに切られる。 $(0.7) \times 0.6m$ の不整方形と推測でき、床面から20cm余の深さである。

遺物の出土はわずかで、石器7の他に土坑6に接合した中期後葉の深鉢片が出土している。

時期は土坑6と同じ、中期後葉である。

⑧土坑8（挿図10）

B区中央に検出し、 $1.4 \times 0.6m$ の不整長方形を呈する。長軸方向はN42°Eを測り、深さは30cm前後で、壁・底部に基盤の石が露出した。

遺物の出土量は、ごくわずかで、図化・掲載したものは無く、詳細時期は不明である。

⑨土坑9（挿図10 第5図）

B区中央からやや東寄りに検出した。 $1.1 \times 0.9m$ の不整円形で深さは20~15cmと浅い。壁はやや急な傾斜である。

遺物の出土量は、ごくわずかで9~11が土器拓影である。9は口縁部で、10が同一個体の胴部であり、半截竹管背面による連続押圧文が施される。11も口縁部である。

時期は出土土器から、中期中葉である。

⑩土坑10（挿図10 第5図）

B区中央からやや東寄りに検出し、土坑12・13と接している。 $1.6 \times 1.2m$ の不整三角形を呈し、壁は比較的急で、底部は平坦である。深さは斜面に掘られているので、40~20cmである。

遺物の出土量は比較的多く、土器・石器12~22で、他に数点ある。12~18は深鉢の胴部、19は胴下部底直上、20は浅鉢の口縁である。21は緑泥岩製の打製石斧で、使用痕が残る。

時期は出土土器から、中期中葉である。

⑪土坑11（挿図10 第6図）

B区中央からやや東寄り、土坑1の西側に検出し、褐色土面に黒土が入っていた。直径約1.4m

の不整円形で、比較的急な斜面に掘られている為、底部も傾斜が強い。基盤の黄色土層までは、掘り込まれていないが、底に基盤の大石が出た。

遺物の出土量は比較的多く、土器・石器1~6である。出土位置は、大石の南端の上に集中しており、黒土に混入していた。1は口縁部を部分的に欠くが、ほぼ完形であり、縦横の隆帯が施され、この脇にペン先状工具による連続刺突が施される。

時期は出土土器から、中期中葉である。

⑫土坑12（挿図10 第7図）

B区土坑10の、東側に接して検出した。直径1.4mの著しい不整円形を呈し、壁は緩く底部は段がつき、斜面に掘られており、深さは50~15cmである。覆土中に30×20cmの石が入っており、その下から遺物が出土した。

遺物の出土量は少なく、1~3が土器の拓影である。1・2は同一個体であり、1は口縁2は底部近くで無文である。

時期は出土土器から、中期中葉である。

⑬土坑13（挿図10 第7図）

B区土坑10・15に接して検出し、穴と切り合う。1.3×0.8mの不整椭円形を呈し、斜面に掘られている為、深さは35~15cmである。覆土中に40×25cmの石が入っており、石の下から遺物が出土した。

遺物の出土量は比較的多く、土器・石器がある。4は小形の深鉢で現存しており、石の下からほとんどが出土し、施文は半截竹管による縦の沈線で4ヶ所に施される。5は竹管背面による、連続押圧文が施される。

時期は出土土器から、中期中葉である。

⑭土坑14（挿図10 第7図）

B区土坑13の南西側に検出し、用地外にかかる。1.8×1mで不整椭円形を呈し、底部は段がつき、深さは30~10cmである。覆土中に30~20cm程の石4個が混入していた。底部に基盤の石が露出している。

遺物の出土量は少なく、土器・石器8~11である。8は深鉢の口縁片で半截竹管による沈線が施される。

時期は出土土器から、中期前~中葉である。

⑤土坑15（挿図10 第7図）

B区土坑13の東側に検出した。2×1.1mの不整精円形で、長軸方向はN65°Eを測る。掘り方は整っておらず、穴の切り合いの可能性もあるが、土坑で処理した。底部は著しい凹凸があり、北東側壁には基盤の石が、多数露出した。

遺物の出土量は少なく、土器・石器がある。12・13は同一個体で、半裁竹管腹面による沈線文が施される。

時期は出土土器から、中期前～中葉である。

⑥土坑16（挿図10）

B区2号住居址の西側1.5mに検出し、穴と切り合う。規模は推定の域を出ないが、1×0.8mの不整方形を呈する。斜面に掘られており、基盤の石が露出し、底部は小さく深さは20cm余りである。

遺物の出土量は、ごくわずかで図化したものではなく、詳細時期は不明である。

⑦土坑17（挿図9・16 第7図）

B区ほぼ中央に検出した土坑である。検出時に、浅鉢の底部が出土し周囲を下げて、掘り方を確認した。規模は1.5×1.3mで不整円形を成している。検出面から底部まで40cm以下で、覆土は3層確認した。覆土上層の漆黒色土中に、50×40cmの平らな石が入っており、その石の北西端に被せた状態で、浅鉢が出土した。石は底部から、ほぼ30cm浮いた状態であり、性格的には墓壙を推測できる。

遺物は、17の完型の浅鉢のみである。口縁部下に中央から片側に、3個の穴が残っており、後の穿孔である。穴の横3cmの位置の器壁は、3個共に欠失しているが、孔は対になっていたもので、亀裂を綴ったものであろう。

時期は、浅鉢が新道式に比定でき、中期中葉である。

⑧土坑18（挿図9 第8図）

B区中央からやや南西寄りに検出し、土坑36と切り合う。直径1mの円形と推測され、深さは30～10cmで、底部中央がわずか凹む。

遺物は深鉢1の他は、ごくわずかである。深鉢はほぼ完型で、底部中央につぶれた状態で出土した。口縁部はやや内湾気味に波状口縁となる。地文は胴上部に縄文を施し、半裁竹管の腹面による、波状・横・斜行の平行沈線と、背面による押圧を施す。内面には炭化物の付着がある。

時期は出土土器から、中期中葉である。

⑩土坑19（挿図9 第8図）

B区中央からやや西寄り、穴と切り合って検出した。1×0.8mの不整椭円形で、長軸方向はN99°Eを測る。深さは30～18cm、底部は平坦であり、覆土中に石が入っていた。

遺物の出土量は少なく、石器2～5と土器が数点であり、詳細時期は不明である。

⑪土坑20（挿図9）

B区中央からやや西寄り、土坑29と切り合って検出した。直径0.9mの不整円形で、深さは40cm前後、壁はやや緩い傾斜で底部は平坦である。

遺物の出土量はわずかで、時期は不明である。

⑫土坑21（挿図9）

B区中央からやや南西寄り、土坑集中部に検出した。0.8×0.6mの不整椭円形を呈し、長軸方向はN113°Eを測る。底部は2段で凹凸があり、深さは30～18cmである。

遺物の出土量は少なく、詳細時期は不明である。

⑬土坑22（挿図9 第8・9図）

B区土坑21の南東側に検出、土坑23と切り合う。0.8mの不整方形を呈し、深さは20cm前後で、底部には凹凸がある。壁は急な傾斜を成す。

遺物の出土量は比較的多く、土器第8図6・7、石器第9図1～4がある。6・7は同一固体で直接接合はしないが、4の石皿に載せた状態で出土した。1はキャリバー状を呈する深体の口縁部破片であり、縞文が施される。2は横刃形石器で硬砂岩製、3は使用痕が残り緑泥岩製である。

時期は出土土器から、中期中葉である。

⑭土坑23（挿図9 第9・10図）

B区土坑集中部で、土坑22と切り合って検出した。1.3×0.9mの不整椭円形を呈し、深さは50cm弱あるが、形は整っておらず、底部も凹凸が著しい。

遺物の出土量は少なく、土器第9図5～8、石器第10図1・2がある。1は玻璃質安山岩の剥片石器である。

時期は出土土器から、中期中葉である。

⑮土坑24（挿図9 第10・38図）

B区中央からやや南西よりの、土坑集中部で、土坑23・25・28と接して検出した。0.7mの不整円形で、底部は緩く凹み、深さは30cm弱である。覆土中に石が混入していた。

遺物の出土量は少なく、土器・石器（第10図3～6）がある。3は無文の浅鉢口縁、4は綠泥岩の打製石斧片、6は敲打器である。第38図3は黒曜石製石錐の先端部片である。土器は無文であり、詳細時期は不明である。

④土坑25（挿図9）

B区中央からやや南西寄りの、土坑集中部で土坑24と切り合って検出した。0.9mの不整円形を呈し、深さ20cm前後、壁は緩い傾斜で、底部が小さく円錐形にちかい。覆土中には大きな石の混入があった。

遺物の出土量はわずかで、図化掲載したものはなく、詳細時期は不明である。

⑤土坑26（挿図9 第10図）

B区中央からやや南西寄りに検出、1×0.7mの不整三角形を呈す。底部に凹凸があり、深さは30cm前後で、東隅に深さ10cmの穴状の落込みがある。覆土中に大小の石が混入していた。

遺物の出土量は、比較的多く土器・石器がある。7は覆土中全体から出土し、現存している。口縁部に2条の角押文があり、胴部は縄文の地文のみである。

時期は出土土器から、中期中葉である。

⑥土坑27（挿図9 第10図）

B区中央からやや南西寄り、用地境際に検出した。0.7mの不整円形を呈し、深さは20cm前後で底部は平坦である。覆土中に石が混入していた。

遺物の出土量はわずかで、図化掲載したのは、9の石錐だけであり、詳細時期は不明である。

⑦土坑28（挿図9 第11・38図）

B区中央から南西寄り、土坑集中部南隅で、漆黒土中に深鉢の出土があり深鉢をそのままに、周囲を下げ土坑を確認した。土坑24と切り合い、1×0.6mの不整精円形で、土坑確認部の深さは15cm前後、深鉢から底部までは40cmである。底部は平坦で、壁は垂直にちかい。

遺物の出土量は比較的多く、深鉢1は図化部の1/4復元でき、他に第38図の4の、玻璃質安山岩製剥片石器がある。

時期は出土土器から、中期中葉である。

⑧土坑29（挿図9 第11図）

B区中央からやや南西寄りの、土坑集中部に検出し、土坑20と切り合う。80×75cmで不整円形を呈し、底部は2段になる。覆土中に石が入っていた。

遺物の出土量は少なく、石器と土器の小片が、数点ある。3は玻璃質安山岩の剥片で、一面に

敲打痕が残っている。

土器は小片で、詳細時期は不明である。

⑩土坑30（挿図9 第11・38図）

B区中央からやや南西寄りで、用地外にかかって検出した。1.2×(0.4)mの不整長楕円形で、深さは25cm前後である。長軸方向はN25°Eを測り、覆土中に石が混入していた。

遺物の出土量は比較的多く、土器・石器がある。4は半截竹管による施文を口縁部に持ち、5は有孔鉗付土器で、隆蒂による文様が施される。38図5は珪岩の剥片石器である。

時期は出土土器から、中期中葉である。

⑪土坑31（挿図9 第12図）

B区中央やや南西寄りで、ピット11と切り合って検出した。1.2×0.8mの不整長楕円形を呈し、長軸方向はN25°Eを測る。深さは10cm前後と浅い。覆土中に大石3個が混入しており、2個は石皿であった。

遺物は、2個の石皿他、少量の土器が出土している。本書に掲載したのは石皿の1個1であり、2個共に花崗岩製で、使用痕が残っている。詳細時期は不明である。

⑫土坑32（挿図9）

B区中央で基盤中大石の南西50cmに検出、直径0.8mの円形を呈し、深さは20cm前後である。底部は平坦で比較的整っている。

遺物の出土量はごくわずかで、図化掲載したものはなく、時期は不明である。

⑬土坑33（挿図9 第12・13図）

B区中央付近で、土坑36と切り合って検出した。1.2×0.8mの不整楕円形を呈し、長軸方向はN64°Eを測る。深さは20cm以下と浅く、底部は平坦である。検出時、50×30cmの平らな石の周囲に落込みを確認し、調査掘り下げ中、石器が多数出土した。

遺物は石器第12図2～6・第13図1～3の他は、土器の小片が数点出土している。打製石斧1～4には、いづれも使用痕が残っている。石錐6・1・2は硬砂岩製である。3は敲打痕と擦痕が残り、各種の併用石器と推測でき、硬砂岩である。詳細時期は不明である。

⑭土坑34（挿図9 第38図）

B区中央付近、基盤大石の北西端に検出した。0.8×0.4mの不整合形で、石と反対側に柱穴状の凹みがあり、深さは穴の所が30cm、他が10cm前後である。覆土中に石が混入していた。

遺物は6の黒曜石が1点であり、時期は不明である。

⑤土坑35（挿図9 第13図）

B区中央付近、基盤大石の東側で、用地外にかかって検出した。不整橢円形を呈するが、穴2個の切り合いの可能性もある。 $1.4 \times (1) m$ の規模で、長軸方向はN45° Eを測る。底部は2段になり、深い方は50cm、浅い方は20cmであり、基盤の石が露出している。

遺物の出土量は少なく、土器・石器4~8だけで、打製石斧6~8には使用痕が残っている。時期は出土土器から、中期前~中葉である。

⑥土坑36（挿図9 第13図）

B区中央付近、土坑18・19の中間で、切り合って検出した。 $1.1 \times (0.8) m$ の不整橢円形で、深さは20cm余と浅く、長軸方向はN24° Wを測る。覆土中に石が混入し、内最大の石は伏っていたが、石皿であった。壁・底に基盤の石が露出している。

遺物の出土量は少なく、石皿9の他は土器が数点であり、詳細時期は不明である。

⑦土坑37（挿図9 第14図）

B区西端近く、比較的急な斜面で、用地外にかかって検出、約1%調査した。径1.2mの不整円形と推測でき、深さは40cm前後を測る。壁は緩い傾斜で、底に基盤の石が露出し、北に緩やかに傾斜している。

遺物の出土量はわずかで、1点には爪型文数個が認められる繊維土器の小片である。

時期は出土土器から、早期末である。

⑧土坑38（挿図14）

C区ほぼ中央に検出した、不整円形の土坑である。直径約1.2mで、深さは20cm前後と浅く、壁はやや緩い傾斜である。底部に密着して大小の石5個が入っていた。

遺物の出土量はわずかで、図化したものはなく詳細時期は不明である。

⑨土坑39（挿図14 第14図）

C区ほぼ中央に検出した、不整長方形の土坑である。規模は $1.4 \times 0.7 m$ で、長軸方向はN65° Eを測る。深さは40~30cmで、底部中央に段差がつき、基盤の傾斜と逆にわずか傾く。覆土中に底部から約7cm浮いた状態で、 $30 \times 20 cm$ の石が入っていた。形態から墓壙と推測できる。

遺物の出土量は多く、土器・石器第14図2~13の他に数点ある。2~5は深鉢の口縁で、2・3は同一の施文だが、別個体である。12は乳棒状石斧の半欠品であり、敲打痕が著しく残っている。

時期は出土土器から、中期前葉である。

④土坑40（押図14 第14・38図）

C区ほぼ中央に検出した不整長方形の土坑である。規模は $1.4 \times 0.6m$ で、長軸方向はN15°Wを測る。深さは20cm弱と浅く、南端近くにやや凹む所がある。形態から墓壙と推測できる。

遺物の出土量は多く、土器・石器第14図14~20、第38図9・10である。14は深鉢形土器の口縁片で、15は胴下部の底部直上、16は底部で種子の痕跡が残っている。19は凹石・磨石の両用石器であろう。第38図9・10は黒曜石の剥片石器である。

時期は出土土器から、中期中葉と推測されるが詳細時期は不明である。

⑤土坑41（押図14 第15図）

C区溝址3の南側に検出した、不整梢円形の土坑である。規模は $1.3 \times 1.2m$ で、長軸方向はN65°Wを測る。壁は急傾斜で、底部は段が付き、基盤の斜面と逆に下がっている。深さは70~60cmと比較的深い。

遺物の出土量は少なく、土器1が拓影で他に3点が出土している。

時期は出土土器から、中期中葉である。

⑥土坑42（押図14 第15図）

C区土坑41の南東側に検出し、穴と切り合っている。直径1mで、ほぼ円形を成し、深さは50cm余りである。壁は急傾斜、底は平坦である。

遺物の出土量は比較的多く、土器2~4の拓影であり、他に土器8点・石器1点が出土している。

時期は出土土器から、中期中葉である。

⑦土坑43（押図14 第15図）

B区土坑42の東側に検出し、掘り下げ調査中に、穴の連続と確認したが、造構・遺物は土坑43で処理した。穴3個の切り合いと推測でき、全体形は不整長梢円形を成す。底部は各々の穴で異なり、中央が一番深く30cm余りである。

遺物の出土量は少なく、土器・石器がある。

時期は出土土器から、中期前~中葉である。

⑧土坑44（押図14 第15図）

C区ほぼ中央に検出した。不整円形で直径はほぼ1mを測り、深さは30~20cmである。壁底に基盤の石が露出している。

遺物の出土量は少なく、土器・石器がある。7は土器拓影で半裁竹管で施文されている。8は打製石斧で綠泥岩製である。

時期は出土土器から中期前葉である。

⑩土坑46（挿図14 第15図）

C区ほぼ中央で、用地外にかかり、溝址2に切られて検出した。推定直径1.2mで、不整椭円形を成すと考えられる。傾斜面に掘られている為、深さには差があり、上部60cm下部40cmである。覆土中には、直徑50cmの三角形の大石が入っていた。壁はやや緩く、中間で傾斜がかかる。

遺物の出土量は比較的多く、土器・石器11~14がある。

時期は出土土器から中期前～中葉である。

⑪土坑47（挿図14 第15図）

C区ほぼ中央に検出、遺物の出土しなかった穴と切り合っている。直徑90cm余りの推定円形で、深さは傾斜面に掘られている為、34~14cmを測るが、底部はほぼ平らである。壁・底部に基盤の石が露出している。

遺物の出土量は少なく、15・16が拓影で、他は底部片などである。15は浅鉢の口縁部内側である。

時期は出土土器から、中期中葉である。

⑫土坑48（挿図14 第15図）

C区ほぼ中央で検出、直徑1mの円形を呈す土坑である。深さは40cm前後あり、壁はやや急な傾斜である。壁・床に基盤の石が露出している。

遺物の出土量はわずかで小片の土器であり、詳細時期も不明である。

⑬土坑49（挿図14 第15図）

C区ほぼ中央、溝址2に切られて検出した。直徑1.5m前後の不整円形を成し、底部は小さく西に寄っており、深さは50cmを測る。壁は緩く、傾斜は2段になる。覆土の中間に25×20cmの石が入っていた。

遺物の出土量は少なく、土器・石器がある。18は直徑18cmの小型浅鉢で、角のつく円形を呈するものと推測され、内面口唇部に連続角押文が施される。19の石器は硬砂岩で、小型の剥片である。

時期は出土土器から、中期中葉である。

⑭土坑50（挿図14 第15図）

C区ほぼ中央、溝址2・3に切られて検出した。規模は1.2×0.8mの不整椭円形で、長軸方向はN52°Wを測る。深さは30cm前後で、壁は急傾斜を成し、底部は緩い凸凹がある。

遺物の出土量は少なく、土器20~23の他に数点ある。20・21は底部片で、前者は深鉢、後者は浅鉢である。22・23は口縁部片で、共に浅鉢である。

時期は出土土器から、中期中葉である。

⑤土坑51（挿図14 第15図）

C区中央に検出、不整円形を呈する土坑である。直径はほぼ80cmで、傾斜面に掘られている為深さは30~15cmを測る。底部には、基盤の石が露出しており、やや凹凸がある。

遺物の出土量は比較的多く、土器・石器がある。土器は繩文が全面に施されている。

時期は出土土器から、前期末~中期前葉である。

⑥土坑52（挿図14 第15図）

C区ほぼ中央、南側用地外壁にかかって検出した。調査部分は少ないが、竪穴の造構になる可能性もある。2.3×0.5mを調査し、深さは10cm以下と浅い。底部は平坦であるが、斜面と同方向へ10cm余傾斜し、深さ20cm余の穴もある。

遺物は、深鉢の底部26と、黒曜石が出土している。底部は無文で詳細時期は不明である。

⑦土坑53（挿図8 第16図）

B区南西端近くに検出した1m弱の円形で整った土坑である。壁は緩い傾斜で、深さは50cmあり底部は緩く凹む。

遺物はやや多く出土し、1~4である。

時期は出土土器から、中期前~中葉である。

⑧土坑54（挿図8 第16図）

B区南西端近くに検出し、土坑55と接している。規模は1.8×1.6mの不整方形で、長軸方向はN55° Eを測る。深さは20cm前後で、底部は緩い凹凸があり、中央に基盤の大石が露出している。

遺物は土器3点の出土である。5は底部で木葉痕が残っているが、詳細時期は不明である。

⑨土坑55（挿図8 第16図）

B区土坑54の西に接して、検出した。規模は1.4×1.3mの不整円形で、深さは30~25cmあり、壁は緩く傾斜する。底部は中央がやや凹んでいる。

遺物は土器3点が出土しており、6・7が拓影である。

時期は出土土器から、中期中葉である。

⑥土坑56（挿図8 第16図）

B区南西端近く、土坑57・穴と切り合って検出した。（1.5×1.2m）の不整三角形を呈し、深さは10cm以下と浅い。検出面に基盤の石が露出し、その間を掘った土坑である。

遺物はやや多く出土しており、土器・石器8~10である。

時期は出土土器から、中期中葉である。

⑦土坑57（挿図8 第16図）

B区土坑56の西に切り合って検出した。直径1.3mのほぼ円形で深さは20cmである。壁は緩い傾斜で、基盤の石が露出しており、底部は凹凸がある。

遺物はわずかの出土で、土器2点、石器1点である。土器片は無文で詳細時期は不明である。

⑧土坑58（挿図8 第16図）

B区南西端近くで、用地外にわずかにかかり、穴と切り合って検出した。1.2×(1)mの不整円形で、長軸方向はN48°Eを測る。底部は2段に掘り下げられており、壁は緩い傾斜であり、深さは40~30cmである。底部に基盤の石が露出し、覆土中に石（45×30cm）が1個入っていた。

遺物の量は少なく、土器7点、石器1点が出土しているが、詳細時期は不明である。

⑨土坑60（挿図8 第16・17図）

A区西端近くの斜面に検出した。不整円形を呈し、規模は1.7×1.3mで深さは20cmと浅く、底部は斜面と同方向の、北東に傾斜している。斜面には、基盤の石が多数露出しており、この土坑の壁・底部にも多數露出している。

遺物の出土量は多く、土器・石器第16図15~22・第17図1~6である。15は深鉢の頭部で、半裁竹管の連続押し引きで施文されており、洛沢式に比定できる。17・19~21は平出第Ⅲ類Aに比定される土器で、17は口縁部片である。打製石斧1~6の内1・2は使用痕が著しい。

⑩土坑61（挿図8 第17図）

C区土坑60の南西に検出した。0.9×0.7mの不整長方形で、長軸方向はN85°Wを測る。深さは20~14cmと浅く、壁は緩い傾斜で、底部は斜面と同方向に、やや傾斜し基盤の石が露出している。

遺物の出土量はわずかで、7が拓影である。

時期は出土土器から中期中葉である。

⑪土坑62（挿図8 第17・18図）

B区南西端に検出した。直径1.3mの円形を成す土坑である。深さは75~70cmあり、壁は下部20

cmが、わずか袋状を呈している。覆土は黒色土の一層であり、底部は平坦であった。土器は底部近くから出土した。

遺物は多く出土しており、土器第17図8～11・第18図1～3である。拓影8～11・1・2は織維土器で、表裏に条痕の施されたものもある。

時期は出土土器から、早期末から前期初頭である。

⑩土坑63（挿図8 第18図）

B区南西端で、土坑62の北50cmに検出した。長楕円形に褐色土が入っており、掘り下げ調査中に、2個の穴が並んでいる事を確認したが、土坑63で処理した。不整円形の穴、2個が並び、全体的には不整楕円を呈する。壁は垂直に近く、深さは50cm余りで、東側が約5cm低い。

遺物は比較的多く、土器・石器が出土している。4～10は織維土器が主体であるが、7はやや磨滅しているが、格子目押型文が施されている。

時期は出土土器から早期末である。

⑪土坑64（挿図8 第18図）

B区南西端近くで、用地外にかかり穴と切り合って検出し、ほぼ全調査した。規模は不明であるが、不整方形を成すものと推定される。壁は緩い傾斜で、深さは60～50cmある。

遺物はわずか出土しており、拓影11～13の他に3点のみである。

時期は出土土器から、中期中葉である。

⑫土坑65（挿図8 第18図）

C区土坑60の北西側、1.5mに検出した。1.1×0.8mの不整楕円形で長軸方向は、N49°Eを割る。深さは20cm弱と浅く、底部は斜面と逆方向にやや傾く。

遺物の出土量は、比較的多く、土器・石器14～20である。

時期は出土土器から、中期中葉である。

⑬土坑66（挿図11）

B区北隅に検出した土坑である。規模はほぼ1mの隅丸不整方形で、基盤の検出面が東南へ傾斜しているので、壁高は55～30cmである。壁は緩く基盤中の石が露出している。覆土は黒色土のほぼ一層であった。

遺物は少なく土器3点が出ており、内の一点は、半截竹管で施文されている。

時期は出土土器から、中期前～中葉である。

⑭土坑67（挿図11 第18図）

B区北東端近くに検出した、 $2 \times 1.1\text{m}$ の不整梢円形の土坑であり、長軸方向はN42°Wを測る。壁は緩い傾斜で高さは、上方が40cmで下方が20cm余りであり、底部は基盤と逆にわずか傾斜している。壁下部と底に基盤の石が露出しており、覆土は漆黒色土の一層であった。

遺物は土器・石器で、21～23がある。他に土器小片4点が出土している。石器は横刃形石器である。

時期は出土土器から中期中葉である。

⑦土坑68（挿図11 第18図）

B区北東端市道にかかる、半分調査した。覆土は黑色土の一層であり、不整梢円形を呈する。規模は $1.2 \times (0.8)\text{ m}$ で、深さは50cm余りあり、壁は垂直に近い掘り込みであり、底部は平坦である。

遺物は土器・石器が出土しており、24～31である。24～30は土器の拓影であり、半裁竹管文が施される。31は石鍤である。

時期は出土土器から、中期中葉である。

⑧土坑69（挿図11 第18図）

B区土坑68の西 1 m の所に検出した。 $1.2 \times 0.7\text{ m}$ の不整長梢円形であり、基盤の石が露出し、長軸はN162°Eを測る。深さは20cm以下と浅く、覆土は暗褐色土であった。

遺物は少量であり、32が拓影で半裁竹管による施文である。

時期は、出土土器から中期中葉である。

⑨土坑70（挿図11 第19図）

B区北東の市道際に検出し、穴と切り合っている。 $(1.8 \times 1.2)\text{ m}$ の不整梢円形で、長軸方向はN108°Eを測る。覆土は暗褐色土の一層であった。底部に段が付き低くなる部分があり、そこには基盤の石が出た。

遺物は少ないが、実測可能な猪沢式の深鉢片1と石器2・3が出土している。2は砥石である。

時期は、出土土器から中期中葉である。

⑩土坑71（挿図11 第19図）

B区土坑76の南西に、切り合って検出した。 1.2 m のほぼ円形を呈し、深さは40cmで、壁はやや緩い傾斜である。底部は土坑76の底部から、1.5cm前後低い。

遺物の出土量は少なく、土器・黒曜石第19図4・5、第38図16である。土器は他に1点で、すべて半裁竹管文が施されている。

時期は、中期前～中葉である。

①土坑72（挿図11 第19図）

B区土坑70の南西1.5mに検出し、 $1.2 \times 1\text{ m}$ で不整円形を成している。長軸方向はN51° Eを測り、覆土は黒色土の一層であった。深さは検出面から50cmあり、壁は緩く掘られている。壁・底に基盤の石が露出した。

遺物は少なく、6がその内の1点の拓影である。

時期は出土土器から中期中葉である。

②土坑73（挿図11 第19図）

B区東隅近くに検出し、土坑78を切っている。 $1.9 \times 1\text{ m}$ の不整長方形で、漆黒色土が入っていた。形態から2個の土坑が並んでいた可能性もある。深さは30~18cmで、壁は垂直に近い。底部は段が付き、基盤の石が露出している。深い方の中央に、柱痕らしい凹みがある。

遺物はやや多く出土し、7~14である。8・9は、南西側の覆土中間から集中して出土した。土器は新道~猪沢式に比定でき、浅鉢片が多く中期中葉である。

③土坑74（挿図11 第19図）

B区東隅に検出し、わずか市道にかかった。規模は $1.5 \times 0.9\text{ m}$ の不整梢円形で、長軸方向はN17° Wを測る。壁は垂直に掘られているが、20cm以下と浅い。覆土は暗褐色土が入っており、部分的に黒色土が混入していた。底部にはわずかの段が付き、西端近くに25cm四方の石が入っていた。

遺物は少量で土器・石器15~17である。半截竹管文の拓影以外に、3点の無文土器が出土している。

時期は、出土土器から中期中葉である。

④土坑75（挿図11 第19図）

B区東隅端近く検出し、直径約 0.9 m の円形を成し、壁はやや急な傾斜であり、基盤の石が出ている。深さは30cm余りで、底部は中央が緩く凹む。

遺物の出土量は少なく、土器・石器18~20である。土器は浅鉢の口縁である。

時期は出土土器から中期前~中葉である。

⑤土坑76（挿図11 第20図）

B区土坑69の南側に検出し、土坑71と切り合う。規模は $1.4 \times 1\text{ m}$ で隅丸長方形を呈し、深さは30~10cmである。底部はほぼ平坦であるが、壁と共に基盤の石が多数露出している。

遺物は、土器・石器が出土しており、1~4である。土器拓影1~3はいずれも半截竹管によつて施文されており、平出第Ⅲ類Aに比定される。

⑩土坑77（挿図11 第20・38図）

B区東端近くに検出した、不整長方形の土坑である。規模は $1 \times 0.7m$ で、長軸方向はN130°Wを測る。深さは30~20cmであり、壁は緩い傾斜で底部は小さい。覆土は黒色土の一層であった。遺物の出土はわずかで第20図5、第38図18である。5は半裁竹管で施文されている。時期は出土土器から、中期中葉である。

⑪土坑78（挿図11）

B区土坑73に切られて検出した。覆土は暗褐色土が入っており、 $1.4 \times 1.2m$ の不整方形で、長軸方向はN109°Wを測る。深さは20cm以下で浅く、部分的に凹む所がある。覆土中に石2個が入っていた。

遺物は黒曜石1点のみであり、詳細時期は不明である。

⑫土坑79（挿図11 第20・21図）

B区東隅近く市道際に検出し、土坑80を切っている。規模は $1 \times 0.9m$ の不整方形で、長軸方向はN61°Wを測る。覆土は漆黒色土のほぼ一層で深さは60cm余りあり、壁はほぼ垂直を成している。底部は平坦で、中央に $30 \times 20cm$ の石が入っており、石の30cm上から土器が集中して出土した。性格は規模がやや小さいが、形態から墓壙と想定した。

遺物は比較的多く出土し、土器・石器であり、第20図6~13、第21図1~3が実測図と拓影である。土器には無文で器壁の薄い個体も出土した。石器の内横刃型石器の2は、玻璃質安山岩製である。

時期は、出土土器から中期中葉である。

⑬土坑80（挿図11 第21図）

B区土坑79に切られ、穴と切り合って検出した。 $0.7 \times 0.65m$ と不整方形で長軸方向はN135°Wを測る。覆土は南西側の穴と同じ暗褐色土が入っており、掘り下げ調査は同時に行なったが、底部に高低差があり、別造構と確認した。壁は垂直に近く、深さは50cm余りで土坑79と同レベルであるが間の基盤が10cm弱高くなる。底部に基盤の石が露出する。

遺物は比較的多く出土し、土器・石器4~13である。土器は平出第Ⅲ類A系の出土が多い。10は磨製石斧である。

時期は出土土器から中期中葉である。

⑭土坑81（挿図11 第21図）

B区北東端近くに検出し、用地外にかかった。やや大形で不整円形を呈し、2m前後と推定できる。壁は緩い傾斜で、深さは20cm余りを測り、凹凸がある。

遺物は少量で、土器・石器が出土している。14は網代痕の残る底部で、他に半裁竹管で施文された小片が2点ある。他に花崗岩製の石皿が1点出土している。

時期は網代痕の残る土器がある事から、後期の可能性がある。

④土坑82（挿図11）

B区東端近くに検出した。覆土は暗褐色土が入り、中央に漆黒色土を円形に認めたが、掘り下げ調査中にこの部分は木の根痕である事を確認した。底部の穴状の落込みが、根痕である。不整長椭円形を成しているが、根痕の影響が考えられ、深さは30～10cmである。

遺物はわずかの土器片が出土しただけで、詳細時期は不明である。

⑤土坑83（挿図11）

B区土坑82の北側に、切り合って検出した。直径約1mの不整円形を呈し、深さは50～40cmで壁は比較的急傾斜である。底・壁に基盤の石が露出している。

遺物はごく少量の土器片が出土しているが、詳細時期は不明である。

⑥土坑84（挿図11 第21図）

B区センターライン近くに検出した、不整椭円形の土坑であり、土坑85と切り合う。規模は1.2×0.7mで、長軸方向はN95°Wを測る。掘り込みは緩く、深さは30cm弱で底部も凹む。

遺物は少なく5の土器が出土している。半裁竹管文が施される。

時期は出土土器から、中期前葉～中葉である。

⑦土坑85（挿図11 第21図）

B区東隅近くに、土坑84と切り合って検出した。規模は1.5×(1)mの不整椭円形を成し、長軸方向はN128°Wを測る。覆土は褐色土の一層で底部は小さく、壁は緩く2段の傾斜になる部分もあり、深さは30cm余りである。

遺物は石斧1点16が出土している。

詳細時期は不明である。

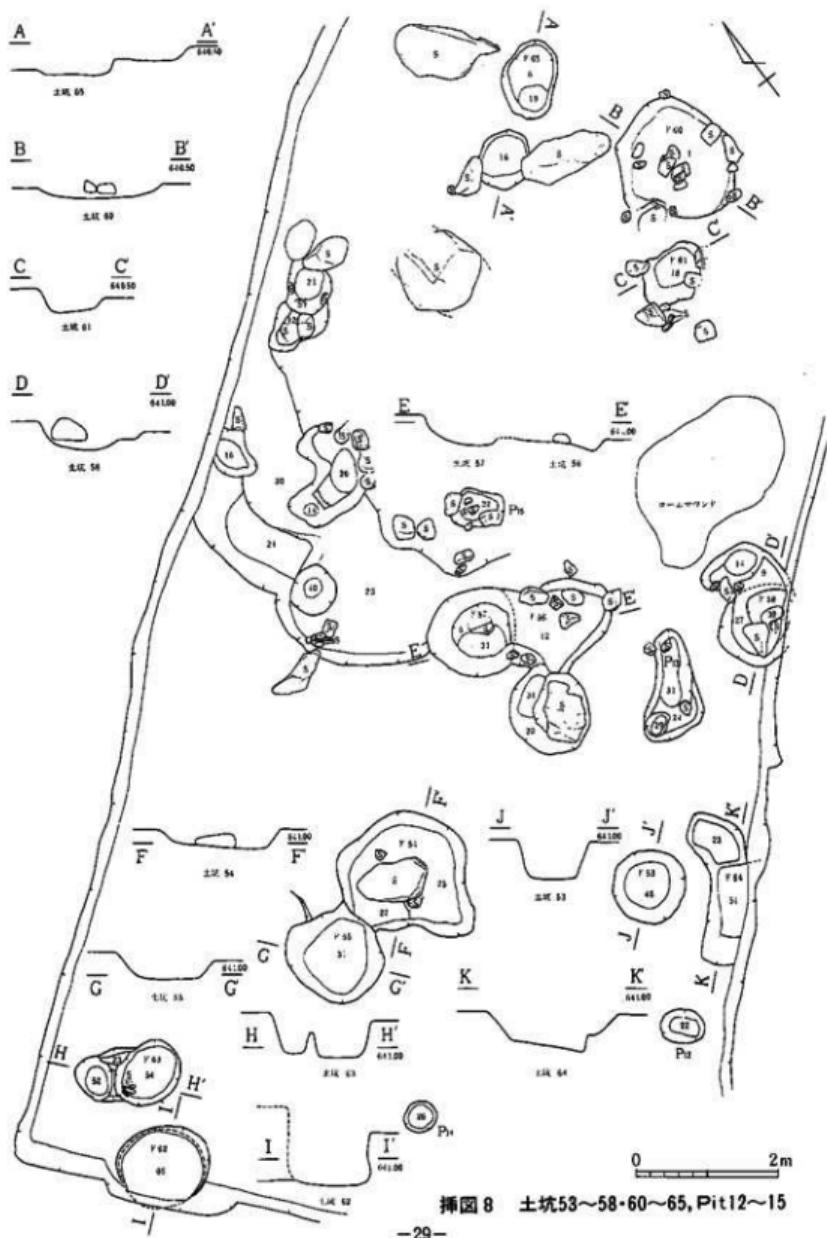
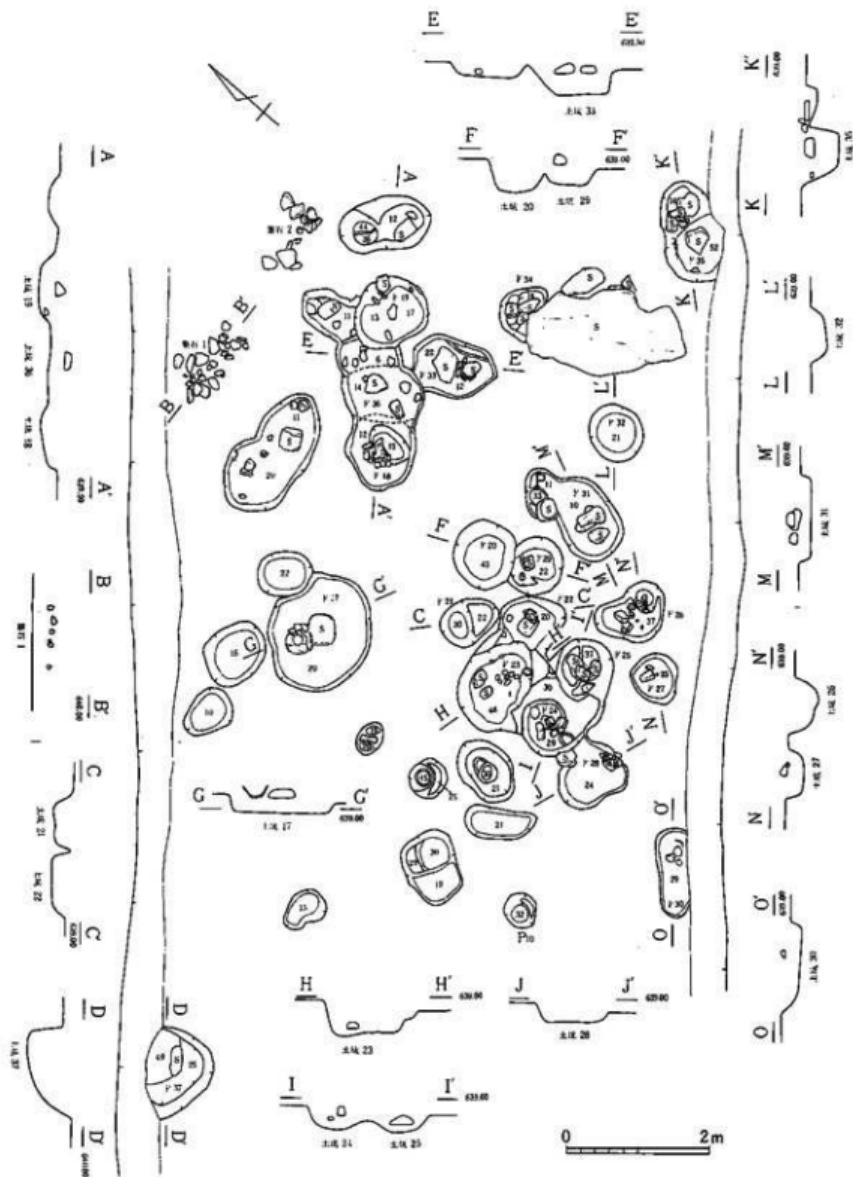
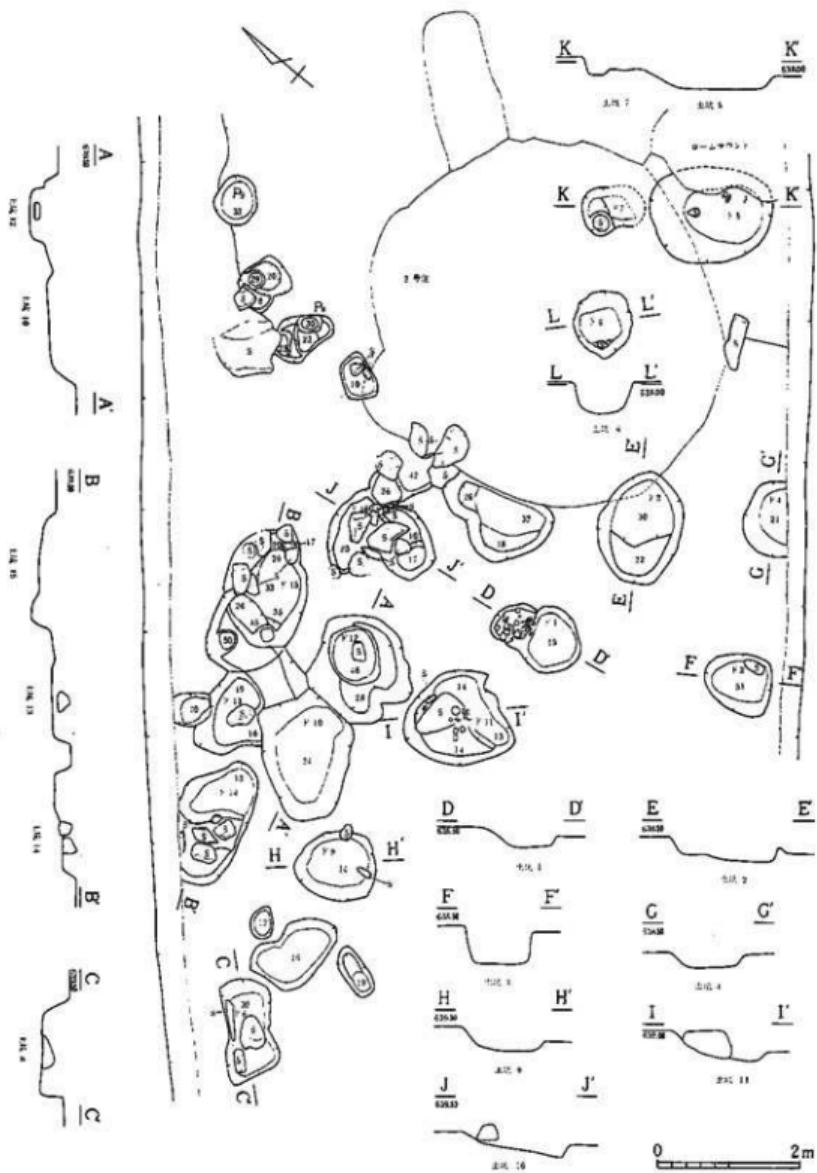


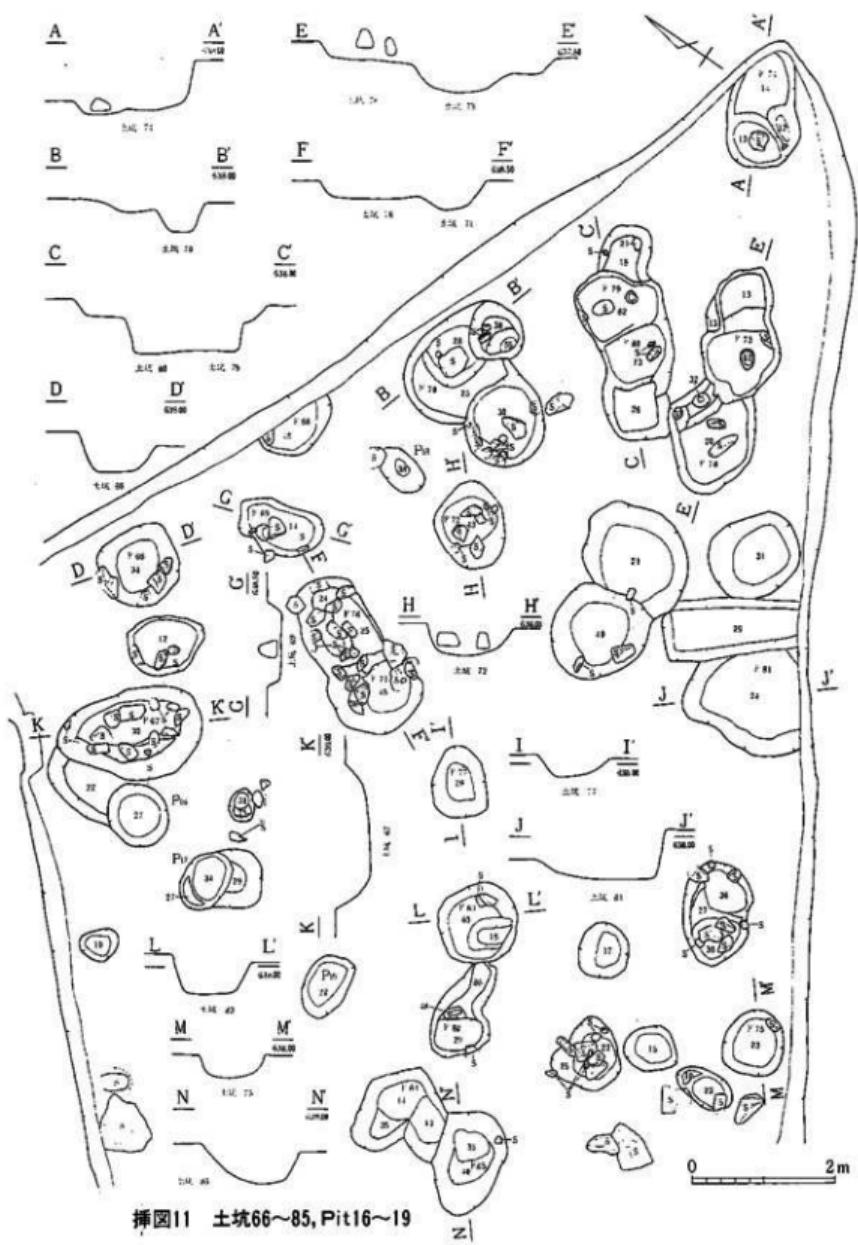
插圖 8 土坑53~58-60~65, Pit12~15



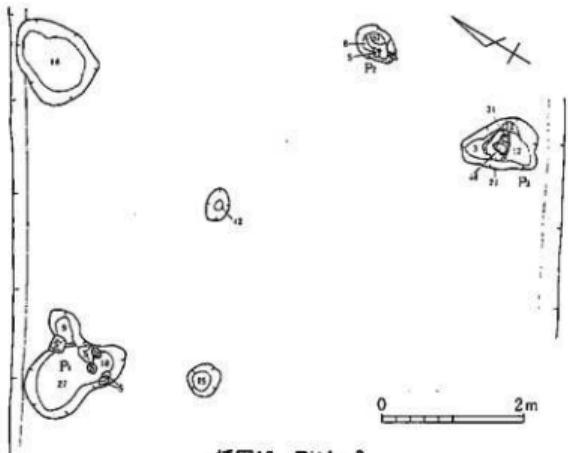
插図9 土坑17~37,集石1・2, Pit 10-11



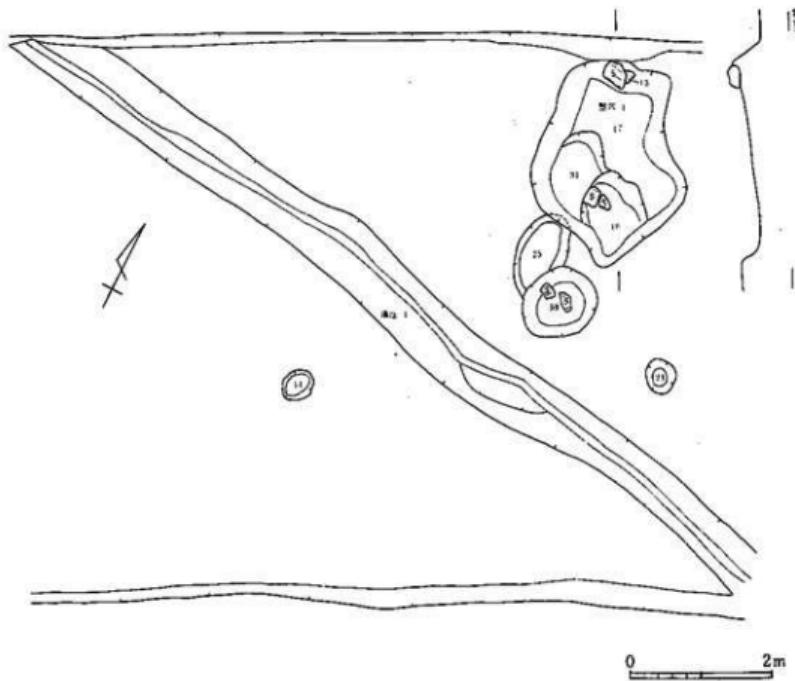
插図10 土坑1~16, Pit 8・9



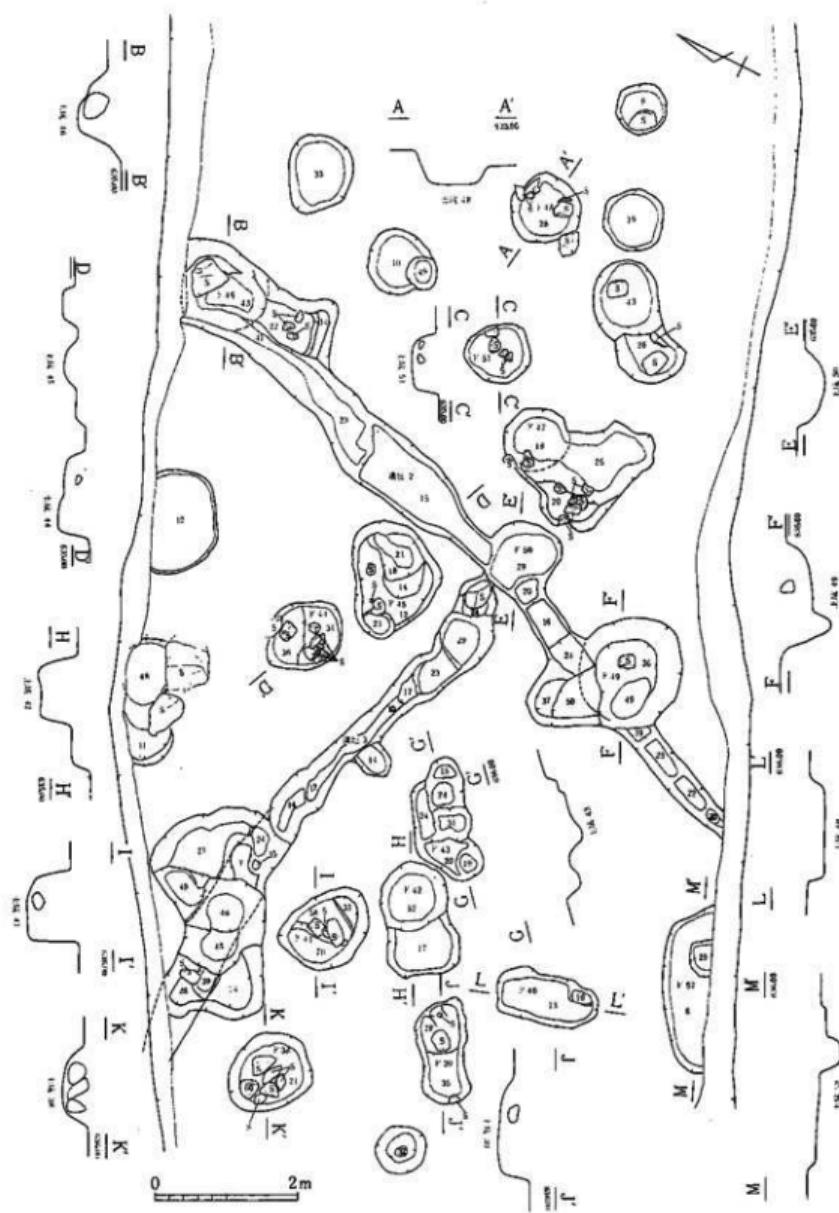
挿図11 土坑66~85, Pit16~19



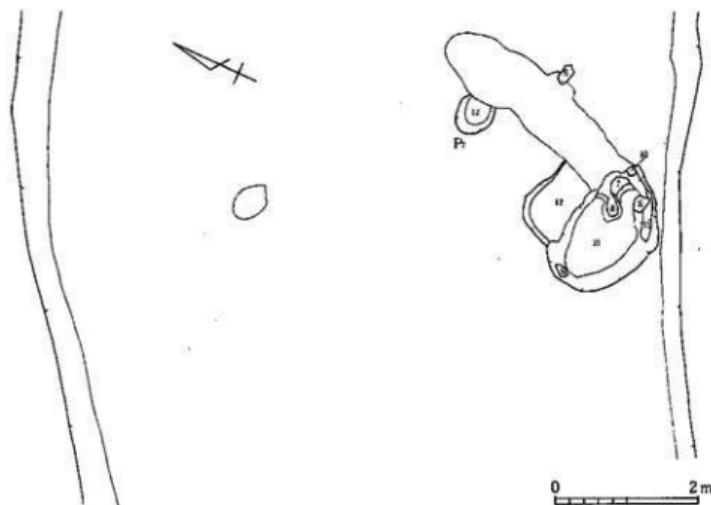
插図12 Pit1~3



插図13 溝址1, 積穴1



插図14 土坑38~52, 溝址2-3



挿図15 Pit 7

4) 集石

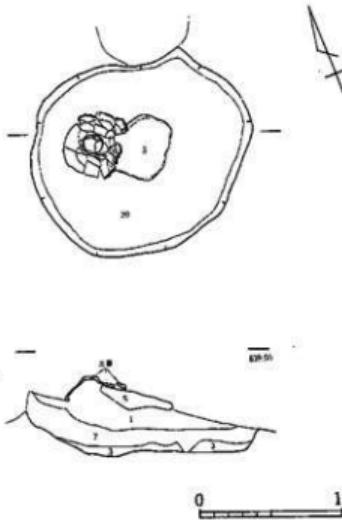
①集石1（挿図9 第21図）

B区中央に、 $1.4 \times 0.9\text{m}$ の範囲で、黒褐色土中に石が集中する所があり、掘り方の確認ができない。集石としたが、土坑である可能性が高い。

遺物は確実に本址に伴うものはないが、17の磨製石斧が、上部から出土している。乳白色で硬く、翡翠系の石と考えられる。

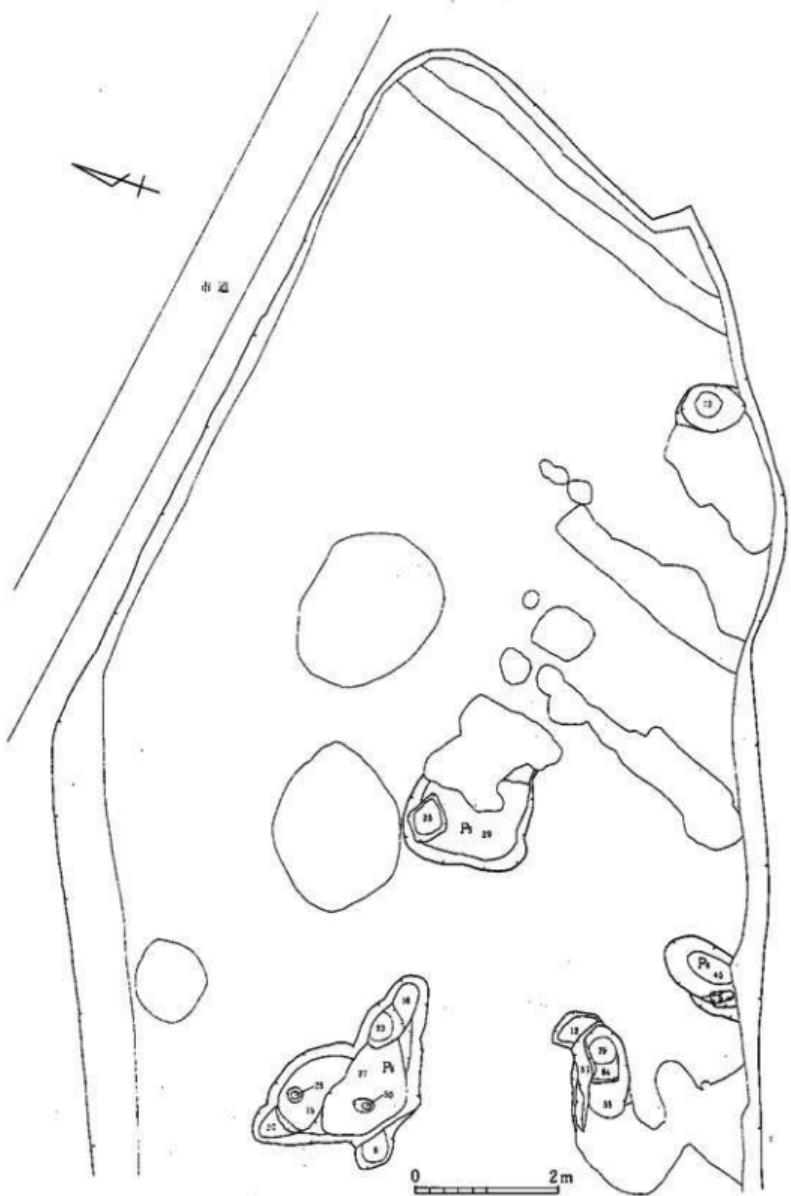
②集石2（挿図9 第21図）

B区中央に検出した。黒褐色土中の基盤直上に直径1mの範囲に石が集中して検出された。掘り方の確認はできず、遺物も確実に集石中と認められるものは無く、時期・性格は不明である。



1. 漆黒土
2. 喰褐色土(漆黒土と黄色土の混入したもの)
3. 黄色土

挿図16 土坑17



插図17 Pit4~6

5) 穴 等 (挿図 8・9・10・11・12・15・17)

- Pit 1 C区 $1 \times 0.9m$ 、深さ20cm前後の不整形で基盤の石が露出して、石器片1が出土した。
- Pit 2 C区 $0.6 \times 0.4m$ 、深さ10cmの不整円形で、基盤の石が露出している。
- Pit 3 C区 $1 \times 0.6m$ の不整三角形で底は3段になっており、中央に20cm弱の長椭円形で深さ40cmの穴がある。
- Pit 4 C区 用地外にかかったが、全体形は把握できた。 $1 \times 0.7m$ の長椭円形で緩く凹み、深さは検出面から45cmを測る。土器は2点出ており内1点は、22図1の拓影であり時期は土器から中期中葉である。
- Pit 5 C区 $1.8 \times (1.6)m$ の隅丸不整形で浅い穴であるが、調査時の覆土の状態から、穴の重複したものと判断した。遺物は土器2点・石器1点が出土している。22図2の拓影は口縁部片である。3の石器は横刃形石器で緑泥岩製である。
- Pit 6 C区 Pit 6としたが浅い穴の重複で、4～5個の切り合いと推測できる。深さは20cm以下であり、土器片が3点出土している。土器は無文で時期は不明である。
- Pit 7 C区 耕作の擾乱に切られた、深さ10cm前後の浅い穴で、直径50cmのほぼ円形である。土器3点が出土した。
- Pit 8 B区 2号住居址の北西1mに検出した不整形の穴で、最深部は35cmある。遺物は土器の小片が、数点出土したのみである。
- Pit 9 B区 2号住居址の北2mに検出した不整円形の穴で、深さは25～15cmである。
- Pit 10 B区 中央からやや南西よりの、土坑集中区から約3m南に検出した穴で、直径0.5m深さ35cmの円形の穴である。
- Pit 11 B区 中央からやや南西より、土坑31と切り合っている。検出時石皿第22図5が出土し、穴の上部に入っているのを確認した。70×50cmで深さは15cm前後である。
- Pit 12 B区 南西端近くに検出、小さな穴である。横刃型石器1点が出土している。
- Pit 13 B区 南西端近くに検出、 $1.5 \times 0.6m$ 、深さは20cm前後の不整形の穴である。
- Pit 14 B区 南西端近くに検出、直径40cm、深さは26cmである。
- Pit 15 B区 南西端近くで遺構検出作業中、基盤の石が露出した所で確認した。
- Pit 16 B区、北東端近く、土坑67の南西に検出した。径80cm余で、検出面から30cm弱の深さの円形の穴で、底は基盤大石の面である。遺物は土器、石器が出土しており第23図1～5であり土器は深鉢片である。4は打製石斧、5は横刃型石器である。時期は土期から中期中葉である。
- Pit 17 B区 Pit 16の南1.5mに検出し、2個の切り合った穴である。長椭円形と不正方形の穴が重複しており、規模は $1.1 \times 0.8m$ 、検出面から30～10cmの深さで段がつく。遺物は第23図6の土器があり、半截竹管文が施され。平出等Ⅲ類A系である。時期は、土器から中期中葉である。
- Pit 18 B区 北東端近くに検出、 $0.8 \times 0.5m$ の楕円形を呈し、断面は円錐形に近い。壁に基盤の石が露出しており、遺物は第23図7・8であり、時期は土器の施文から、中期中葉である。

Pit19 B区 土坑84の北2mに検出、不整精円形の穴で、深さは15cm以下と浅い。
遺物は9の拓影があり、縄文が施されるが、詳細時期は不明である。

6) 遺構外出土遺物

縄文時代

縄文時代に該当する遺構外出土遺物は、遺構のほとんどが該期という事から、出土量は非常に多く、時期の確認できた内から特徴的なものを図化掲載した。

①早期（第23図）

早期の遺構と確認したのは、土坑37・62・63で、B区中央から南西側に分布する。土器はB区全体から出土しているが、主体は前述の遺構周辺である。

出土遺物は、10～35の他に数点あり、繊維の入るものと、入らないものがある。

10は竪ナデ後、竪状工具で条痕文と口唇部に刻目を施し、繊維を多量に混入する。

11・12は格子目の押型文が施され繊維の混入はない。

13～18は爪形文で14～17は竪状工具を用いて施文している。13の口唇部には刻目が施され、18とともに小さな爪形文である。15・16は繊維が多く、18は入っていない。

19～21は条痕文土器で、21は内側にも条痕が残る。20は繊維の混入が少なく、19・21は多い。

22～24は縄文が施され、22には繊維が入っておらず、23・24にはわずか混入している。

25・26は櫛状工具による刷毛目状の細かな痕跡が残り、25は繊維が多く26は少ない。

27～35は無文であり、33の内側には竪ナデによる、条痕状痕跡が残る。35を除いて繊維の混入が認められる。

②前期～中期初頭（第23・24図）

この時期に比定した遺構は、土坑51の1基であり、前期終末から中期初頭に位置づく。

遺構外遺物で、該期と確認できるものは少なく、第23図36～47で、すべて半裁竹管による施文である。

36～39・41は口縁片であり、他は胴部片である。36～40は平行沈線文、41～44は刺突文、45～47は腹面による連続押し引き文である。第24図1～4は深鉢の胴・胴下部で半裁竹管による平行沈線のみの施文である。

③中期（第24・25・26・27・28図）

中期に比定した遺構は、住居址2軒・竪穴1基・土坑50基余・集石2基で、調査した遺構の大部分である。遺構外遺物もほとんどが中期に属し、調査範囲全体から出土した。

第24図5はB区中央、土坑集中部分の黒土中から出土した人面把手で、深鉢口縁に内向きに付いていたものである。調査時に口から顎にかけてわずか欠失したが、右耳部分を除いて完存しており、表面は窓でていねいに磨かれている。顔はハート型に削り出し、目・口を竪状工具により刺突し表現する。鼻は顔面中央を高める事で表わしている。頭頂部は粘土紐をとぐろ状に、後頭

部は環状の粘土を貼付しているが、髪の状態を表わしたものかは把握できない。両肩にあたる部分には、竹管による円形刺突が5列並んでいる。

第25図の拓影は、9～12を除いて口縁部片である。6～12は同一個体でB区東端の市道ぎわから出土しており、新道式に比定される。

1・13～15・20～28は平出第III類A系である。

第26図は1～9が口縁部で他はすべて胴部片である。1～5・11・15・18・28～48は平出第III類A系で6・49～63は、新道式に比定され、第27図は胴部の小片である。

第28図35～41は浅鉢で36は復元実測、35はごく薄手の小型浅鉢である。37～41は口縁部の拓影である。

④後・晩期（第29図）

後期に比定した遺構は、土坑5・81の他には無く、遺構外遺物も少ない。

1は深鉢の底部で、網代痕が残っている。2～4は深鉢の口縁部、5～24は胴部片であり、25～27は浅鉢の口縁である。

28は晩期に比定され、地文は細かな繩文を施した後、鏽状工具で雜になでている。施文は細い竹管による沈線である。

⑤石器（第29・30・31・32・33・34・35・36・37・39・40図）

石器は、重機による表土剥ぎから、検出時にかけて多量の出土があり、詳細な時期は不明であるので、一括して掲載した。掲載した石器は、特殊な物以外ほぼ%以上現存している物とし、それ以下の破損品は、倍量出土している。

29図29・30は磨製石斧、30は太形蛤刃石斧の破片である。

31は硬砂岩製の打製石斧で、表面に黒褐色をした化石が付着している。硬砂岩中に化石が発見されるのは、稀な事であり、地質学的に貴重な資料である。32～35の打製石斧には、使用痕が残っている。30～33図はすべて打製石斧である。34～36図9までは横刃型石器であり、使用痕の残るものもある。

第36図10は砥石、同じく11は磨石の破片で、周縁は敲打して形を整えてあり、石皿とセットになるものであろう。

第36図12・13は大小の敲打器である。37図1～5は石錐、同じく6は凹石の半欠品、7は海浜石と推測した自然石である。

2 弥生時代以降

1) 溝 址

直刀原遺跡調査区内で、確認した溝址は3本である。3本共にC区の東向緩斜面に検出した。

①溝址 1（挿図13）

C区平坦部から東向斜面の上部にかけて、検出した。用地内を斜めに走っており、ほぼ斜面と同方向で東西に延びている。長さは約12m確認した。V字型の比較的整った溝址で方向はN101°Eを測る。深さは40～30cmで底は狭いが、水の流れた痕跡は把握できなかった。畠境の、溝ないしは通路であろう。

遺物の出土は無かった。

時期は遺物の出土が無く、確認は出来ないが、溝址2が中世以降であり、本溝址も同様中世以降と考えられる。

②溝址 2（挿図14 第37図）

C区ほぼ中央、土坑・溝址の集中する場所に検出した。用地内を斜めに走り、土坑46・49・50を切り、溝址3と交差し、両端は用地外に続く。東向緩斜面をN23°Eに向く。形は整っておらず巾は広狭があり、90～35cmで、深さは40～15cmである。底部は段のつく所などあるが、水の流れた痕跡は無い。覆土は黒土と黄色土が入っており、埋められたものと推測した。畠境の溝ないしは、山林と畠の間の根切り溝であろう。

遺物はわずか出土しており、縄文時代土器片と、11の有孔砥石でやや粗い砂岩製である。

時期は中世もしくは近世と推測される。

③溝址 3（挿図14 第37図）

C区ほぼ中央に検出し、溝址2と交差するが、そこで検出面から消滅する。西側用地外際は、連続する穴を切っており、確認には至らなかった。方向は溝址1と同じく東西に走っている。形は整っておらず、広狭がある。底部も緩やかな凹凸があるが、水の流れた痕跡は把握できず、遺物の出土もなかった。

性格・時期は溝址1・2と同様と推測できる。

2) 遺構外出土遺物（第37図）

弥生時代以降で、確認された遺構は、中～近世と推定した。溝址3本のみであり、遺構外遺物も図化掲載した3点と、他に小片が数点である。出土したのはB区中央の、東南用地境ぎわで5m前後の範囲である。8・9は高坏であり、8の坏部は細い脚部から、ラッパ状に開いている。9は2孔が残っており、位置的には段が付くが、4孔と推測でき太い脚部で、器台の可能性もある。10は小型丸底壺の胴下部で、削り状の籠ナデ痕が残っている。この3点は弥生時代終末から古墳時代前期の遺物である。

IV まとめ

今回発掘調査が実施された地区は、中央アルプス前山の笠松山麓から発達する扇状地の上面北東端に位置し、B区は上面で天竜川へ向いた緩傾斜、C区は東向斜面で市道を挟んで、今年度5月に調査を実施した大原遺跡である。道路用地内の現道路部分を除いてすべて調査し、前記の縄文時代早期～中・近世の遺構・遺物を確認したので、扇状地のごく一部の実態に過ぎないが、それらのいくつかを整理しまとめとする。また、調査区の微地形と遺構との関連も考えてみたい。

B区の微地形は、現地表の緩傾斜とは相当に異なっており、（挿図5参照）道路方向の傾斜と、直交する傾斜がある。B区南西端から10mはほぼ平坦であり、土坑56の北東から10mは急傾斜で比高差1mを測る。南西端から20～25m付近が凹み、北東へ緩く高まり、2号住居址を過ぎて、緩く下り始める。道路方向と直交する傾斜は、南西端から凹みまでは、わずかであるが、そこから傾斜が強くなり、土坑集中部で比高差1m、北東の市道ぎわで2mを測る。

C区は道路方向の傾斜が主で、直交する傾斜はわずかである。南西端と北東端の比高差は約6mで、緩急があり、中央の土坑集中部分が急である。この石混り黄色土の基盤の上に褐色土・暗褐色土・漆黒色土・耕土と堆積している。

B区の凹地から2号住居址間は、漆黒色土の堆積が2層あり、地表面まで1.2mを測る。C区の基盤からの堆積は斜面の為少なく50cm前後であり、暗褐色土と耕土の2層であった。

縄文時代早期の遺構としては、早期末の土坑がB区南西端と凹地に確認されたのみであるが、遺物は、押形文土器・繊維土器が調査範囲内全体より出土している。

遺構及び遺物の検出状況から、当該期における遺跡の中心部からは縁辺部分にあたると考えられ、その中心は南西側のA区及び西方の山寄り一帯が考えられる。

出土遺物の総量はあまり多くはないが、繊維土器を主体とする末期の土器群は良好な資料といえる。

伊賀良地区における早期の遺跡は、著名な立野遺跡のほか何遺跡かがあるが、そのほとんどが押形文土器を主体とするものであり、後半にあたることは、三日市場中島平遺跡程度である。また、当地区内において今までに知られた該期遺跡の多くは、山麓に接する部分、扇状地が河川の浸食谷に臨む崖上等地形変化の顕著な箇所に存在し、本遺跡例のように扇状地中央部にあたる箇所からは初見といえる。本遺跡について微地形を観察すると、特徴的に捉えられる面もあり、今後扇状地上における遺跡分布を把握するに大きな意味を持つといえる。

また、時代的な背景として、広大な扇状地形全体を活用して当時の人々の活躍の場があったといえ、その時代復元に当地区が重要な意味を持つといえる。

縄文時代前期終末から中期初頭の状況は、早期と共に通じる。今回の調査においては、C区中央で土坑1基を確認したのみで、遺物も若干量の出土を見たのみであり、集落の縁辺部的な様相を成している。

しかし、次代の中期中葉には、調査地点を含む一帯にかなり規模の大きな集落が形成された可能性が強く、その前段階的な位置づけができる。なお、該期集落の規模等が不明であるが、その中心は付近のいずれかに存在すると推測されるが、今次調査によりそれを具体的に示すことはできないといえる。

縄文時代中期の遺構は、2軒の堅穴住居址と堅穴・土坑・集石などを検出した。2軒の住居址は約30m離れており、その周辺を中心として調査範囲内全体に諸遺構の分布が確認された。特に2号住居址の周囲からB・C区に集中する傾向がある。住居址の数2に対し、土坑の数が多いことが今回の調査地点における大きな特徴といえる。

地形及び土坑数の多さ等勘案したとき、本遺跡における中期集落はかなり大規模なものと推測可能であり、住居址の数も2軒にとどまるものではない。その数は最低でも10軒は越えると判断される。諸状況を検討すれば、その主体的に分布する箇所は、西方の斜面上部の山麓寄りにあると考えられる。

なお、2号住居址は斜面に構築されたものであるが、遺構の残存状態は比較的良好であった。それにもかかわらず、遺物出土量は少なく、住居廃棄時に持ち出したものと考えられ、この時期における離村の姿も推測される。

集中して検出された土坑については、遺物の出土状態などから、墓としての性格付け可能なものが何例かあり、同時期の墓制研究の好材料といえる。

その代表的なものをいくつか挙げると、浅鉢を伏せた土坑17、深鉢を埋納したと考えられる土坑11・18、完形品はないが土器の出土量が多い土坑28・79・80、石器の出土量が多い土坑33などがある。これらは、いずれも出土遺物及びその出土状態に特徴があり。土壙墓の代表的な方ともいえる。

また、土坑のほかに掘り方が確認できず、集石と捉えた遺構があり、土坑内に石を入れ込んだものと推測でき、これもまた墓制の1形態と推測される。なお、集石1の検出時に翡翠系石質の玉斧ともいえる磨製石斧が出土しており、墓に埋納された可能性があり、これも集石の墓としての位置付けを推測する一材料といえる。

なお、土坑18付近の上部から出土した人面把手も、いずれかの土坑に伴う可能性がある。

以上、特徴的な土坑の姿から、それらが土壙墓として位置付けられると判断されるが、それ以外に検出されたこの一帯にある多数の土坑の大半が墓壙である可能性が極めて高いといえる。

次に、中期における時期的な様相は、住居址のある中葉段階が主体となるが、それに先行する前葉段階の土坑もかなりある。遺物の出土量からも、前葉段階に安定した集落の形成後、中葉段

階において頂点に達した集落といえ、後葉段階では集落の姿さえ残さない場所であったと判断される。

いずれにしても、今回の調査結果は、当地方においてその具体的な状況の不明な点が多い縄文時代中期前葉から中葉における集落の一画を捉えたものであり、また、その出土遺物の中には当地方を代表するものもあり、今後の該期研究に大きな意味を有するものといえる。

縄文時代後期の遺構は、土坑2基とわずかであり、土坑5からは称名寺式に比定できる小形浅鉢が出土し、遺構外からは網代痕の残る深鉢底部が出土している。該期集落の様相等を判断するに至らない状況であるが、当地方の山間部の何ヶ所かに小規模な遺跡の存在が知られており、下方にある中心的な集落遺跡と山間部とを結ぶ中間的な、短期的な集落の存在が予想される。

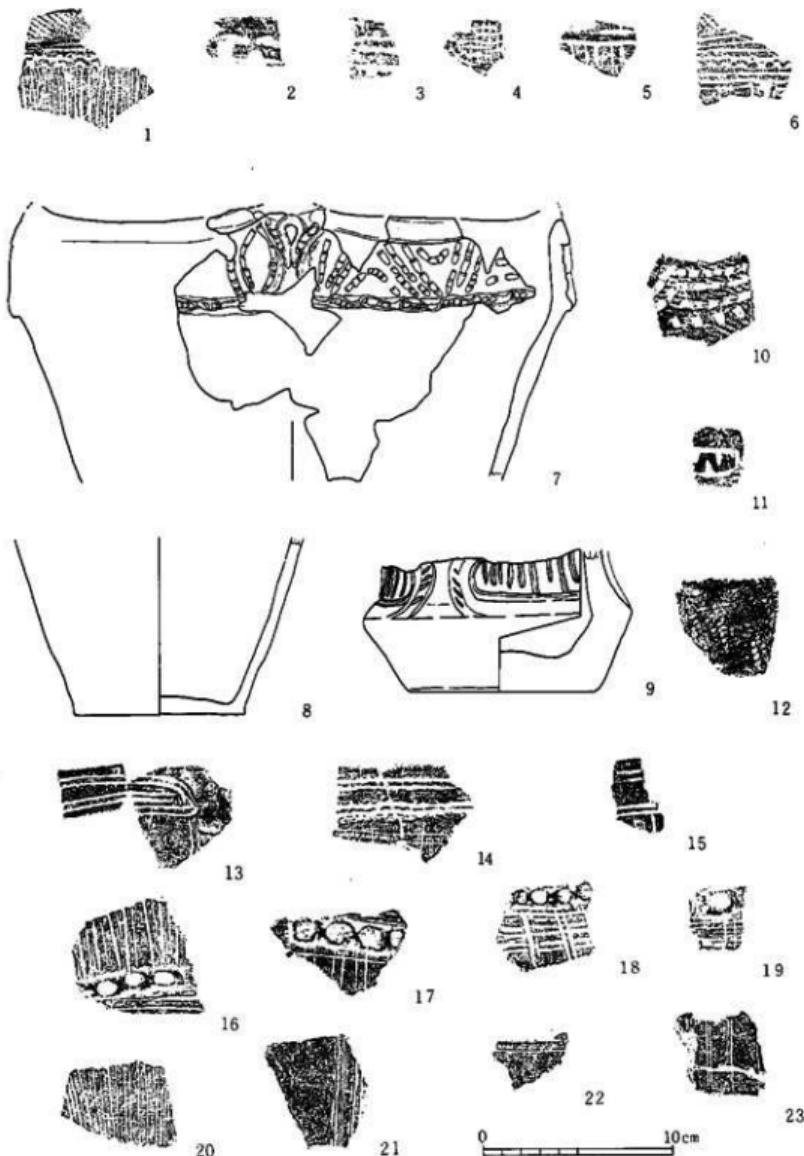
弥生～古墳時代の遺物は、ごく少量であったが、平成元年度に調査した、直刀原遺跡の西南650mの細田北遺跡で弥生時代の住居址2軒が出土しており、細田北遺跡より諸条件の良好なこの遺跡の範囲内に、住居址の存在する事は確実である。

古墳時代以降は、中～近世に比定した溝址3本があり、道路ないしは畑の区画と推定され、調査区は生産域となっていたものであろう。

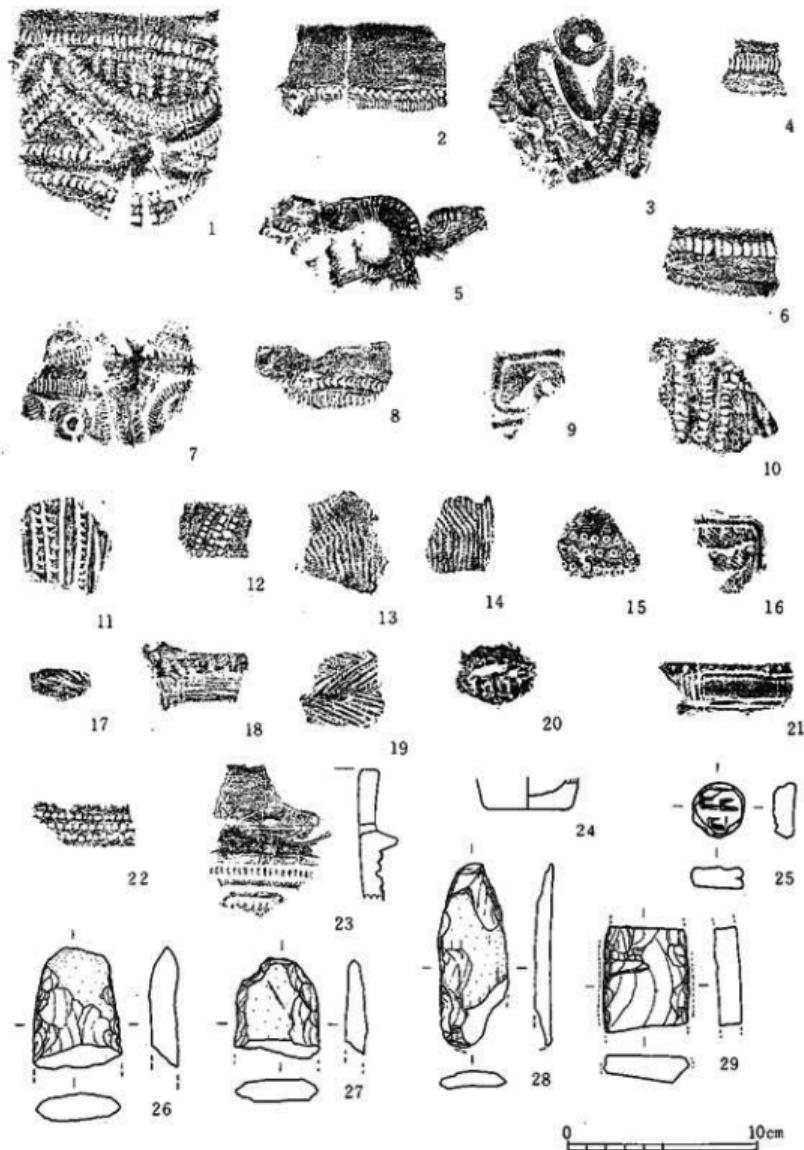
以上、今回の調査結果から、時代別に若干のまとめをしたが、大扇状地のごく一部分であり、縄文時代集落の広がりを確認するまでには至らなかったが、重要遺跡の位置付けができた事は、今後地域の原始古代の姿を検討する上で、大きな役割を果すものといえる。

図 版

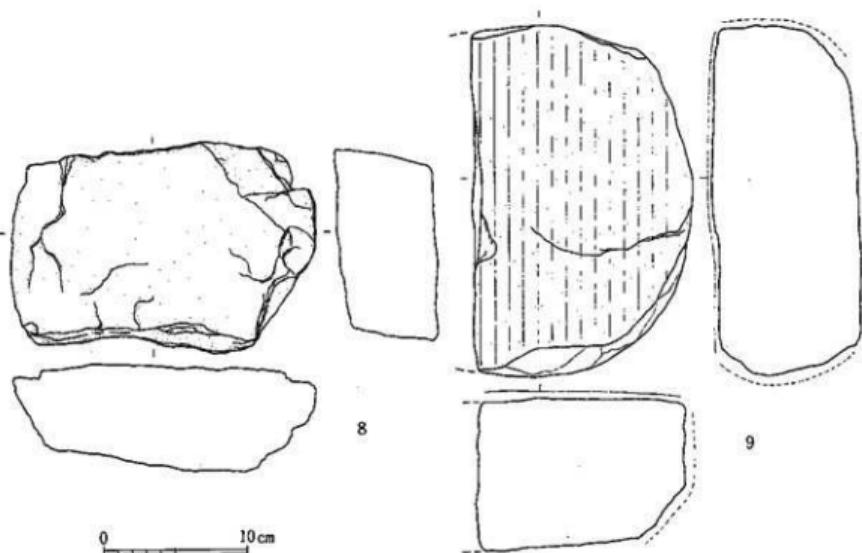
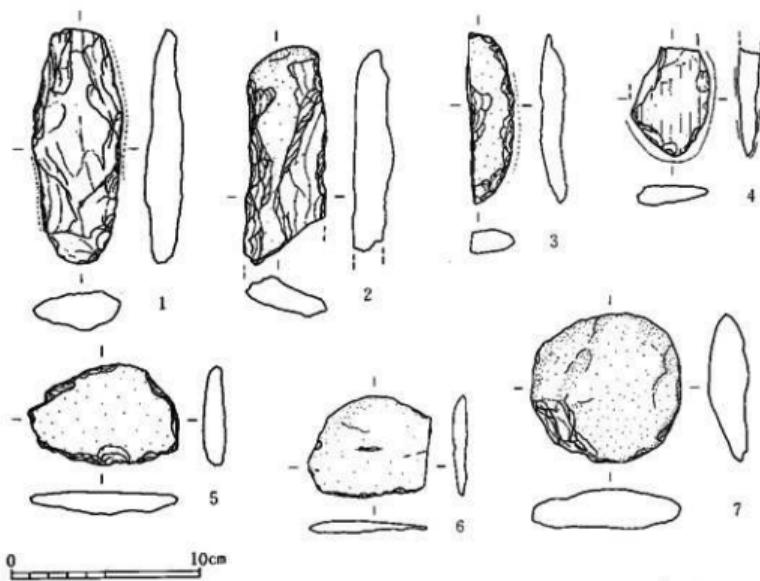




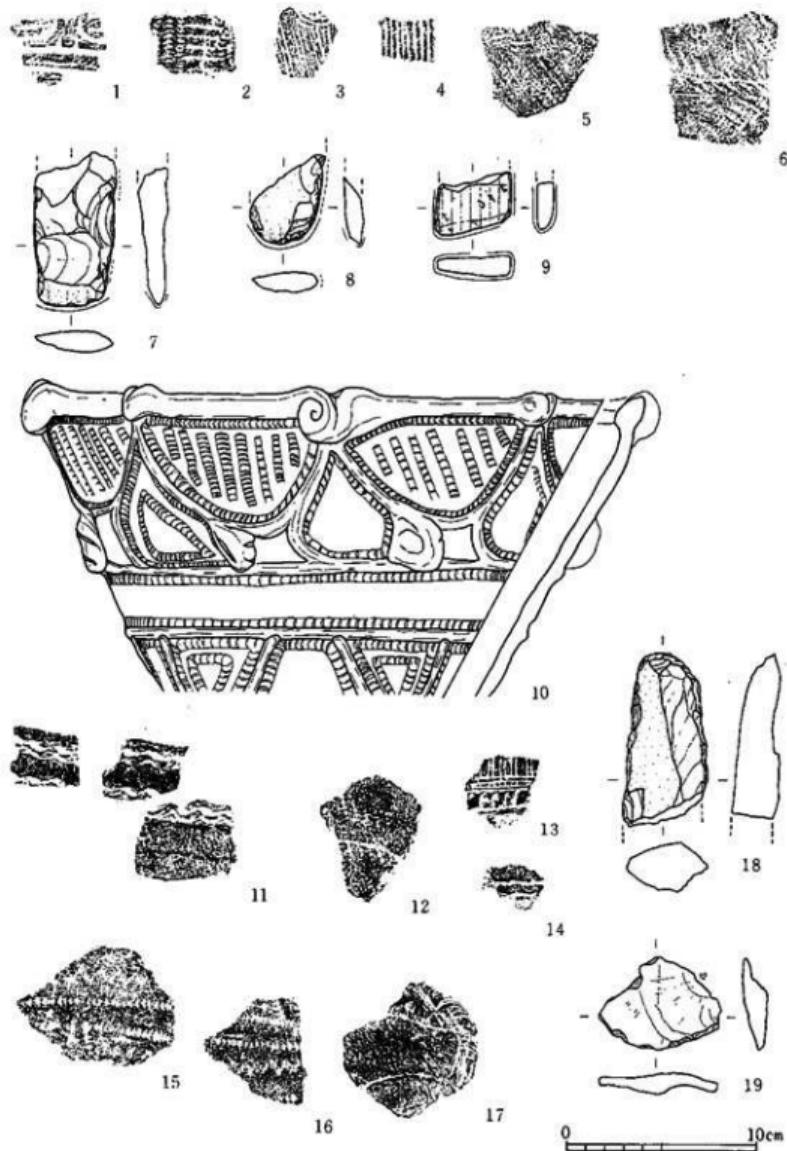
第1図 1号住居址(1~6)・2号住居址(7~23)出土土器



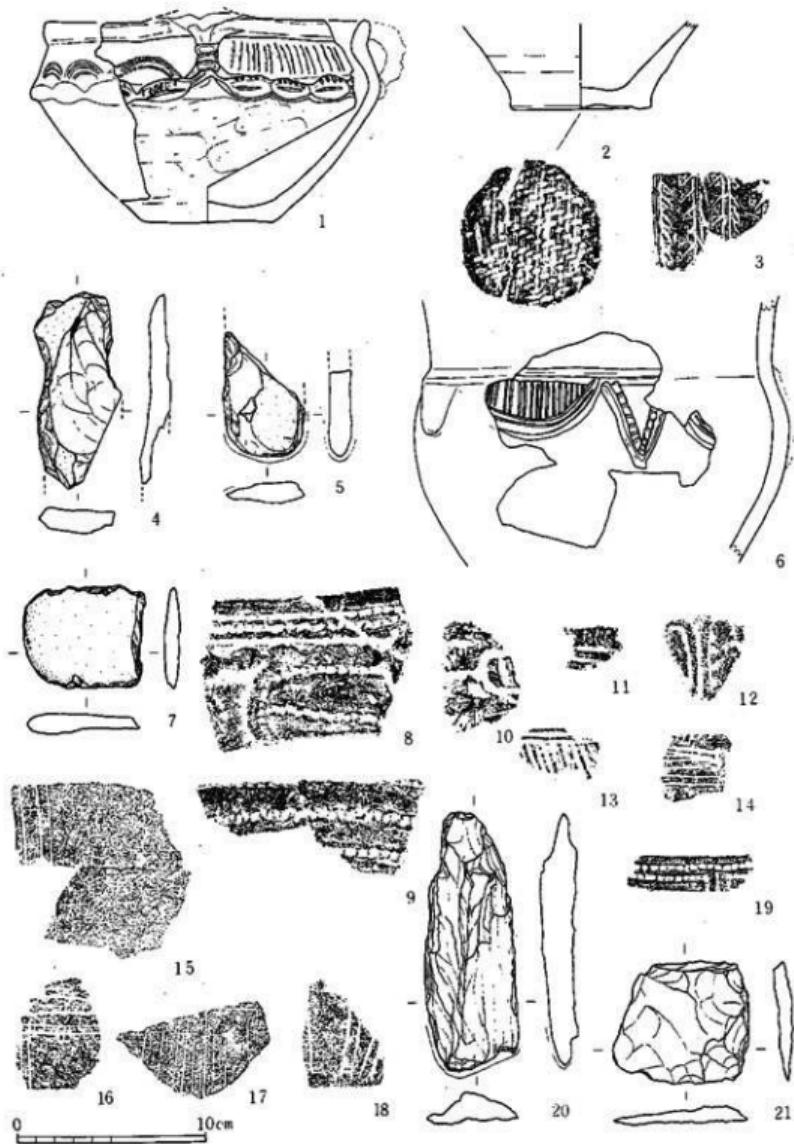
第2図 2号住居址出土土器・石器



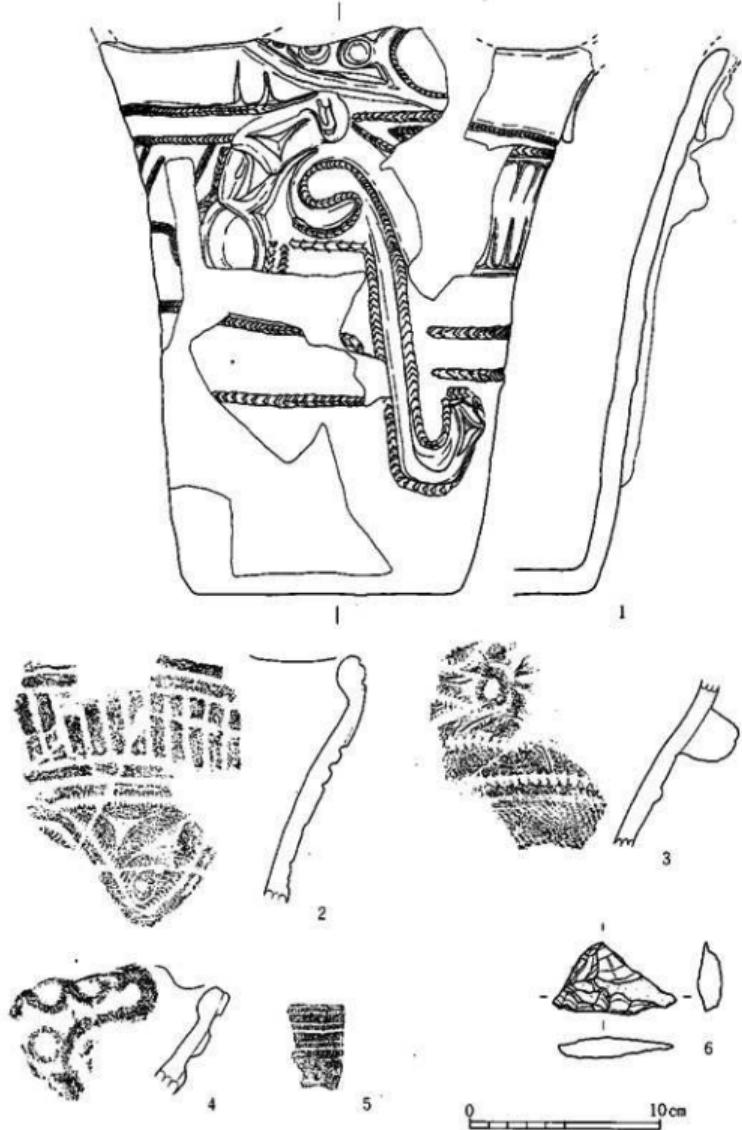
第3図 2号住居址出土石器



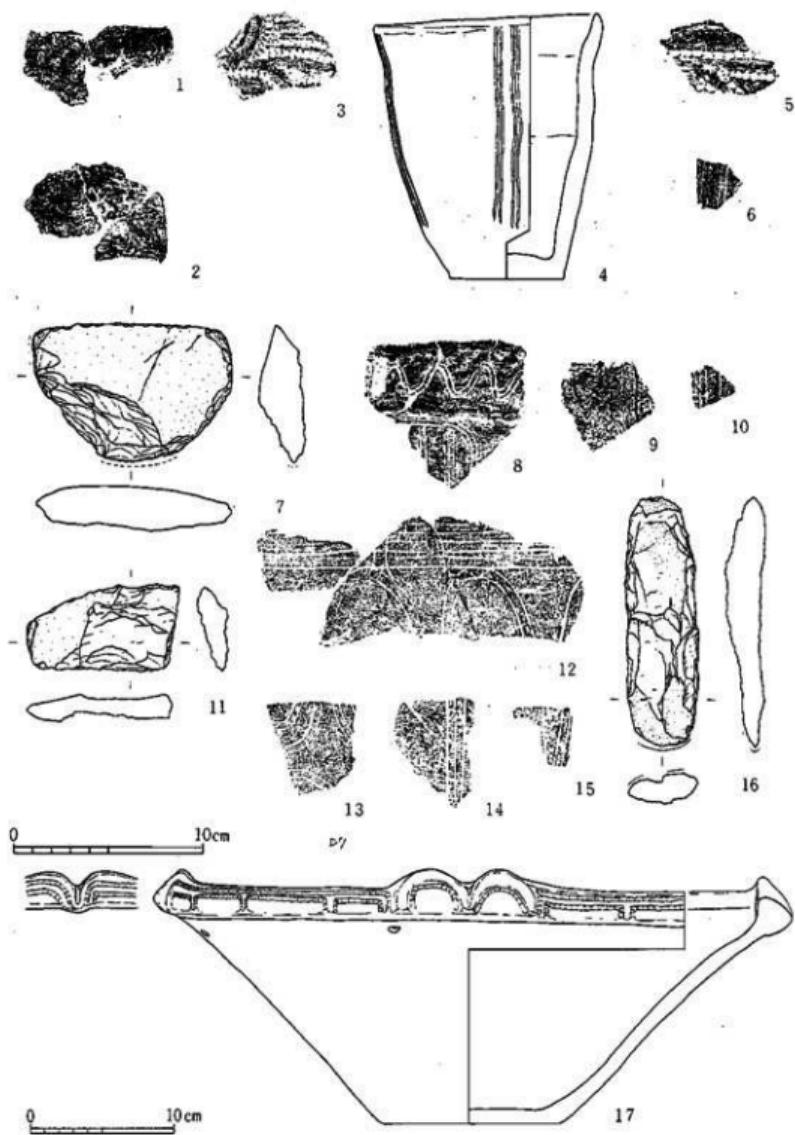
第4図 壺穴1(1~9)・土坑1(10~19)出土土器・石器



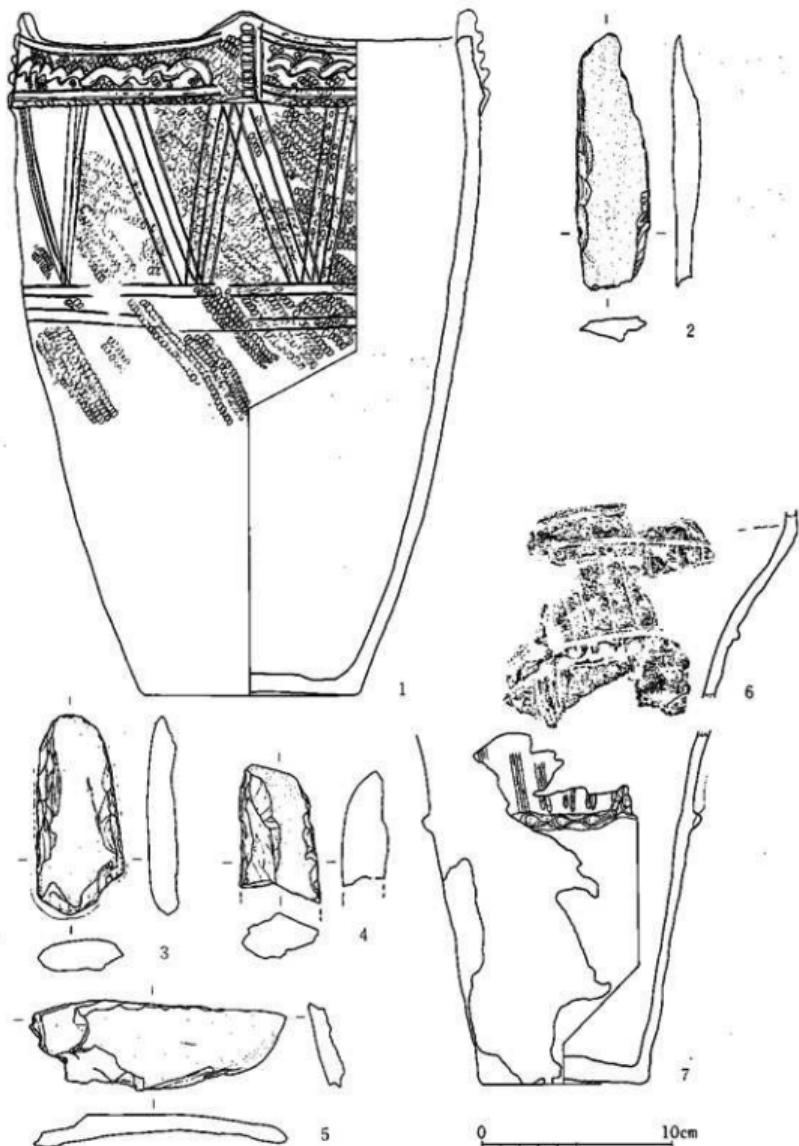
第5図 土坑5(1~5)・土坑6(6)・土坑7(7)・土坑9(8~10)・土坑10(11~21)出土土器・石器



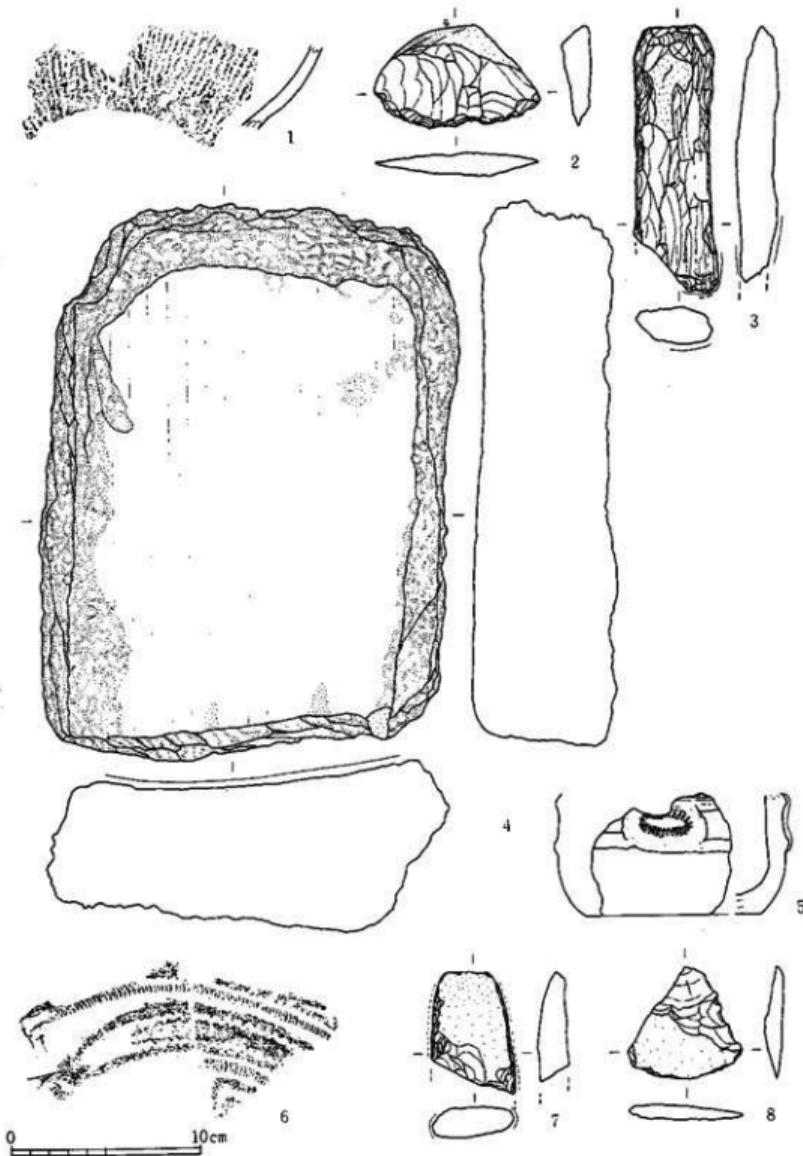
第6図 土坑11出土土器・石器



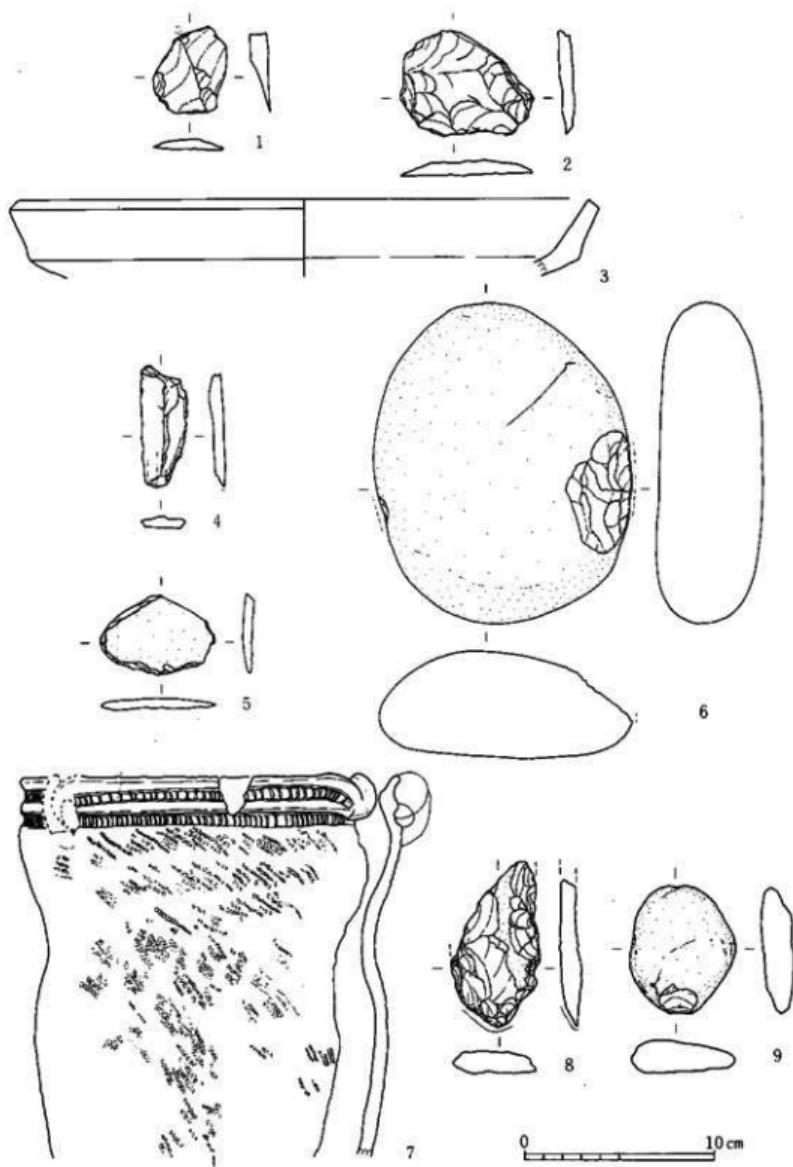
第7図 土坑12(1~3)・土坑13(4~7)・土坑14(8~11)・土坑15(12~16)・土坑17(17)
出土土器・石器



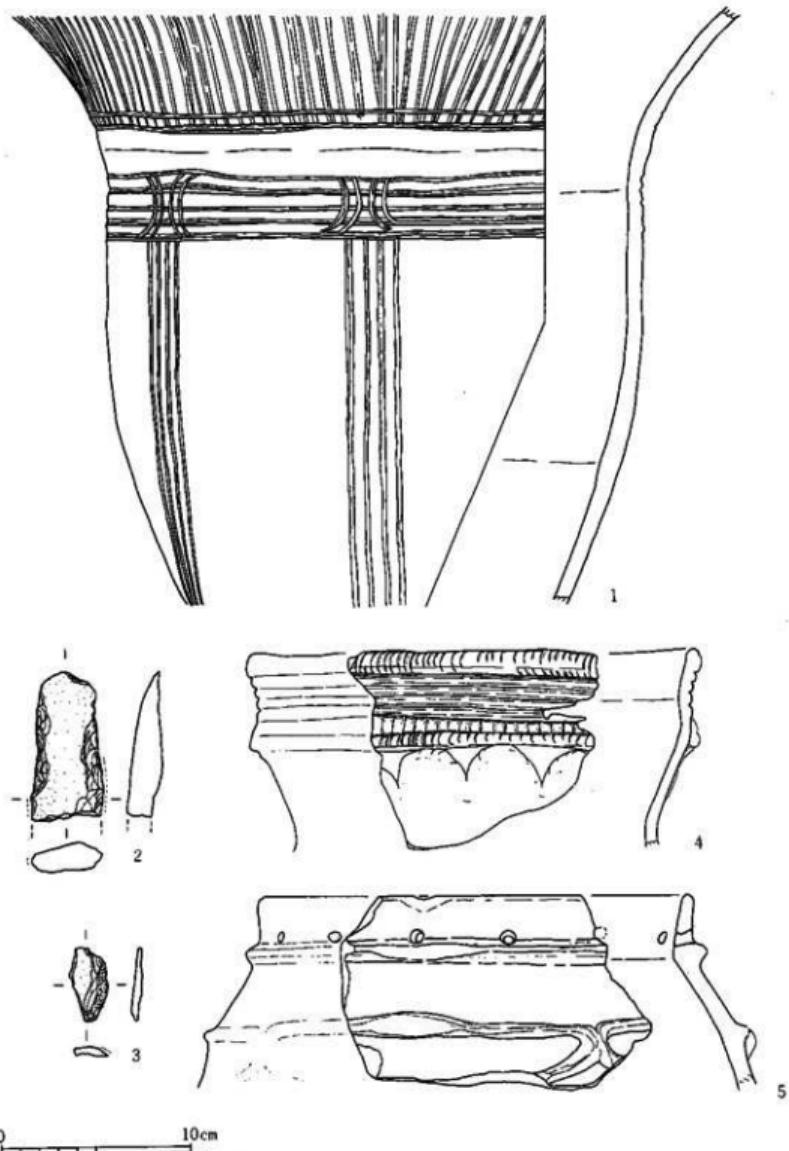
第8図 土坑18(1)・土坑19(2~5)・土坑22(6~7)出土土器・石器



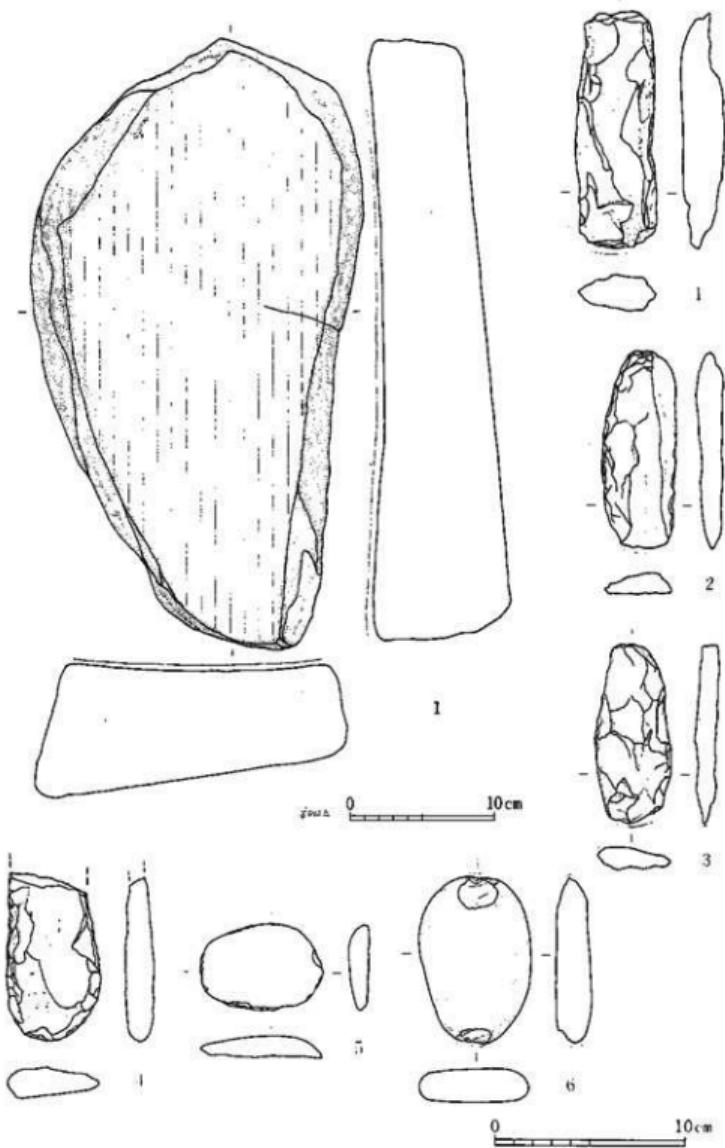
第9図 土坑22(1~4)・土坑23(5~8)出土土器・石器



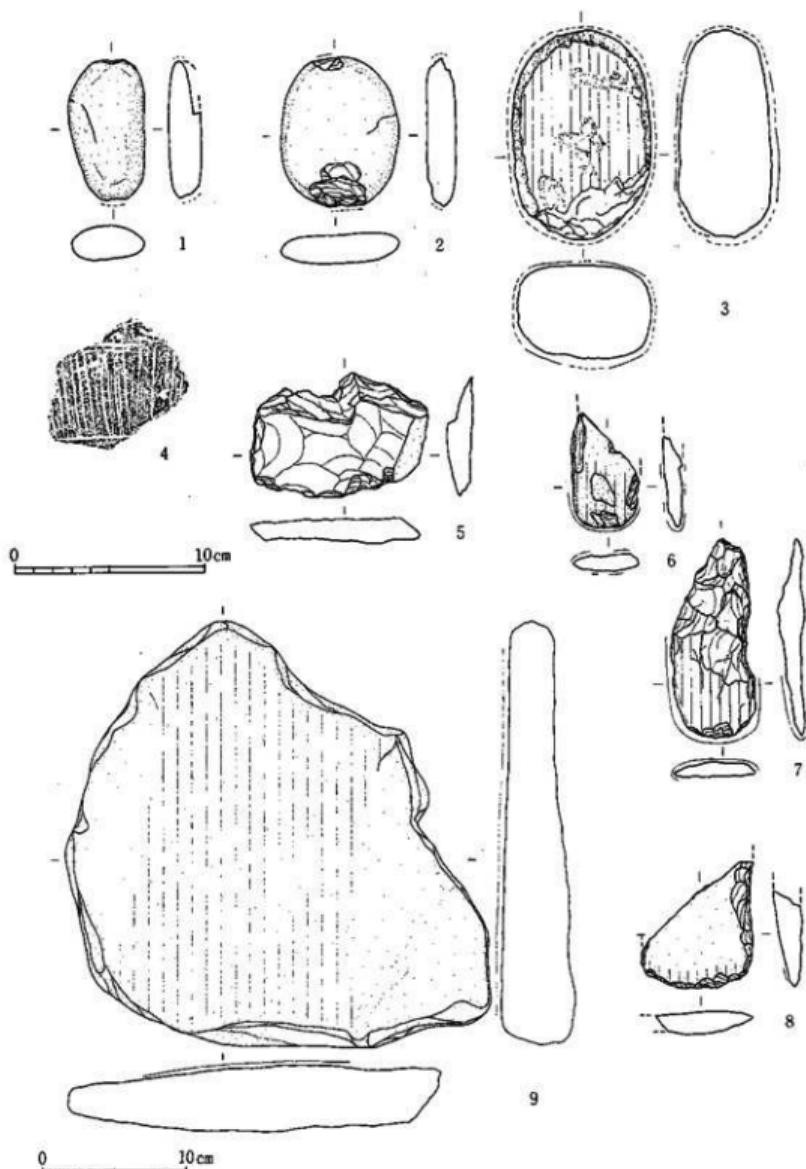
第10図 土坑23(1・2)・土坑24(3~6)・土坑26(7・8)・土坑27(9)出土土器・石器



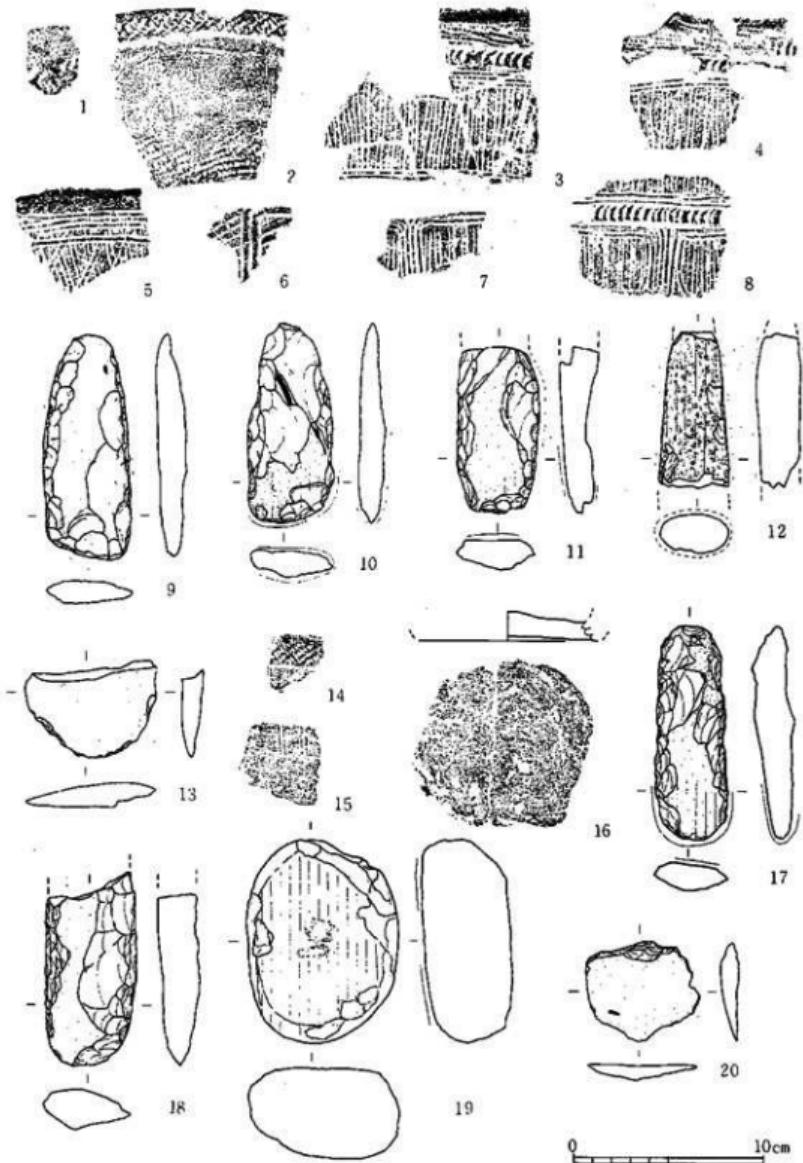
第11図 土坑28(1)・土坑29(2・3)・土坑30(4・5)出土土器・石器



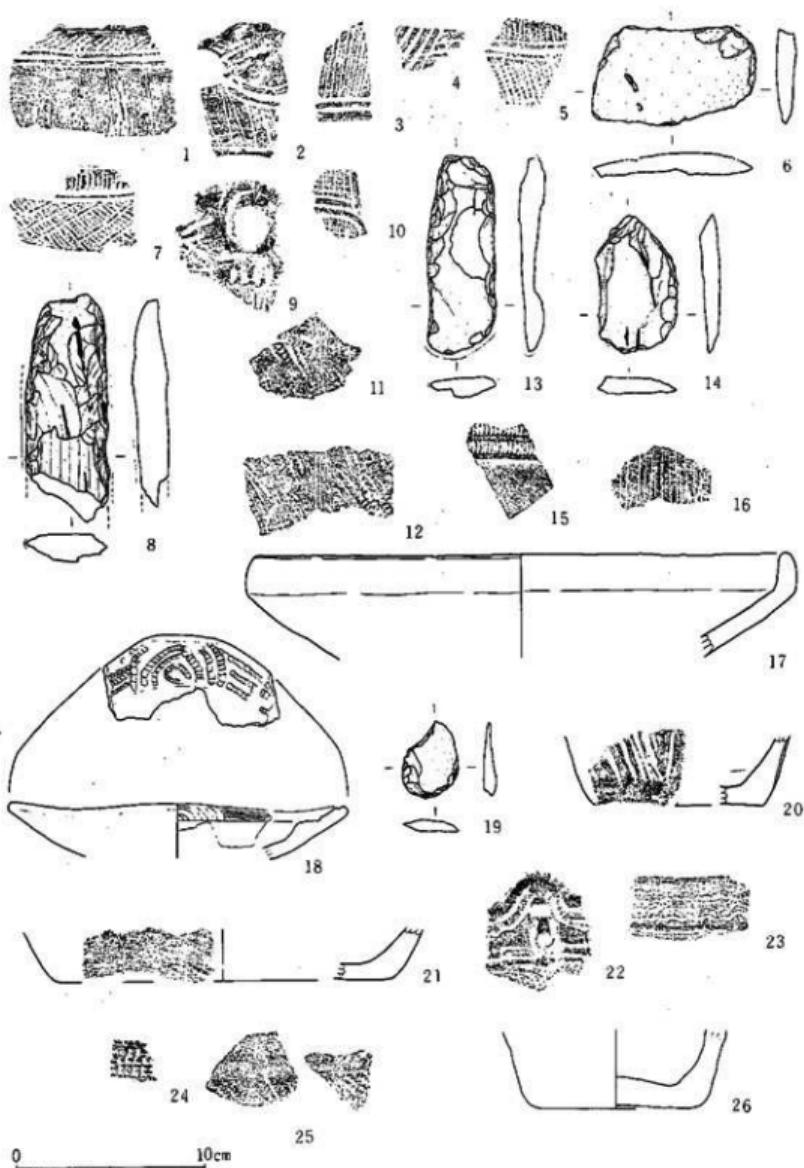
第12図 土坑31(1)・土坑33(2~6)出土石器



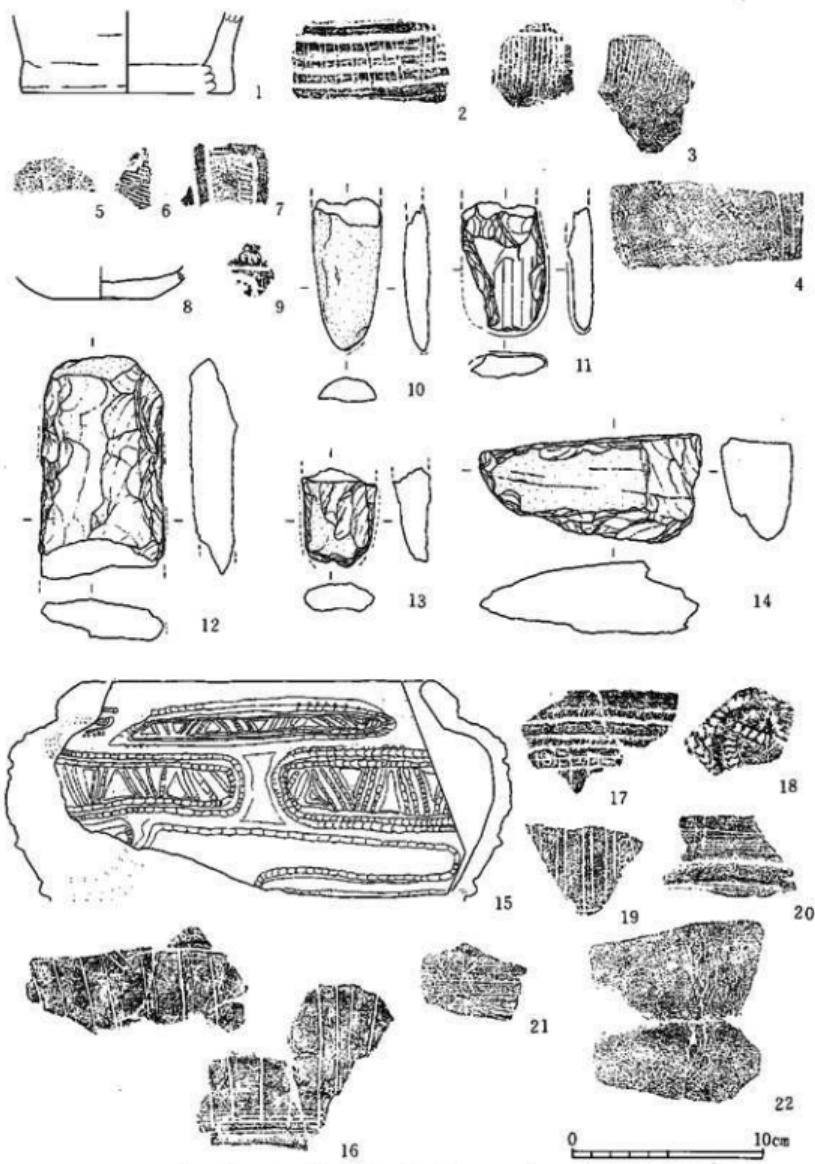
第13図 土坑33(1~3)・土坑35(4~8)・土坑36(9)出土土器・石器



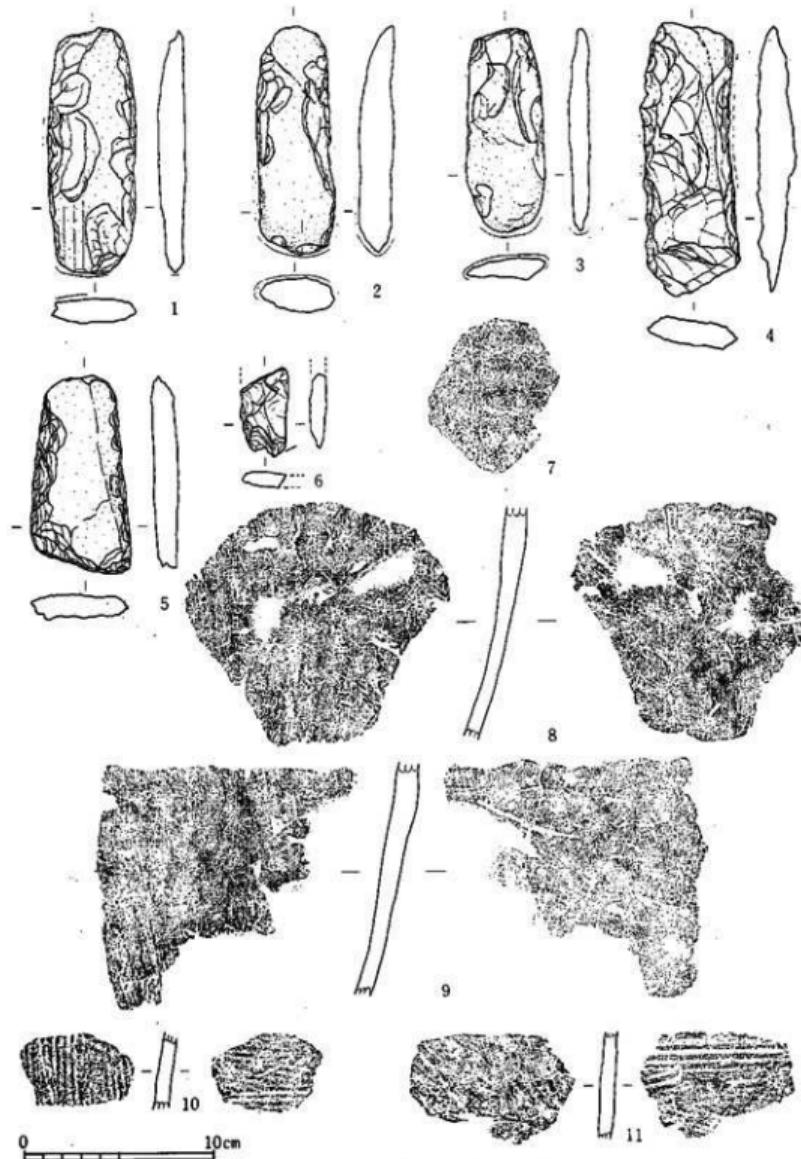
第14図 土坑37(1)・土坑39(2~13)・土坑40(4~20)出土土器・石器



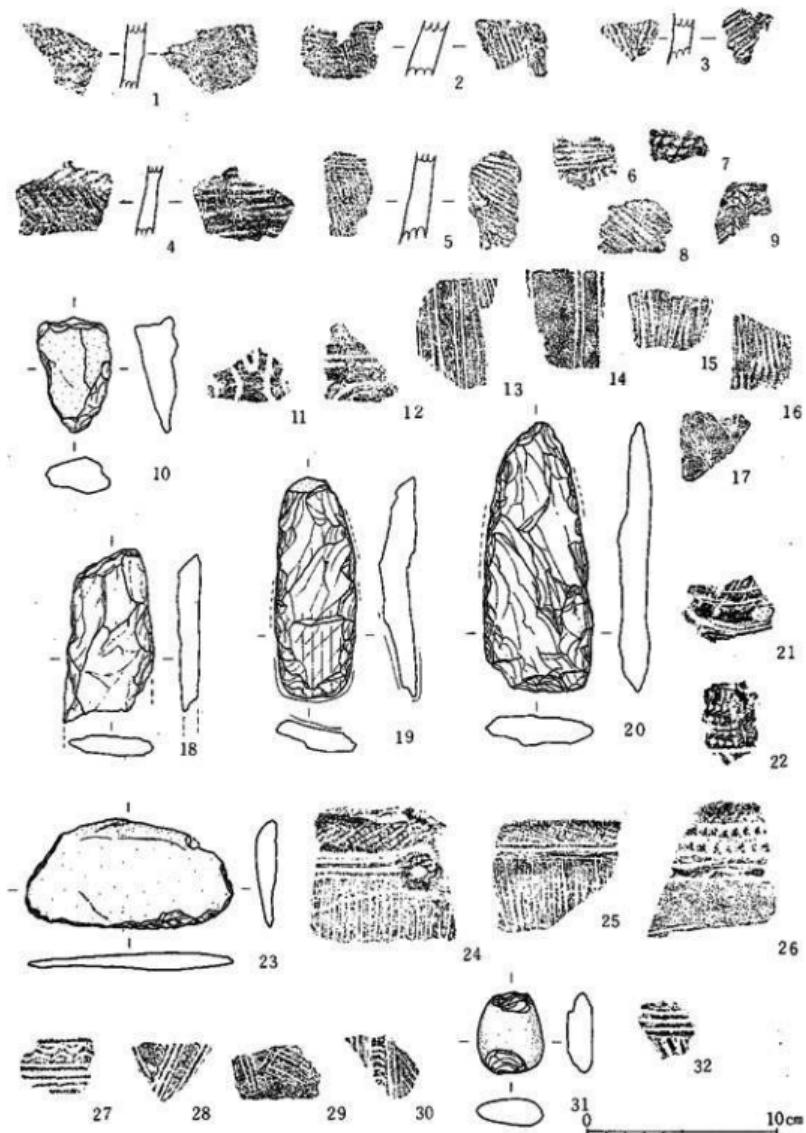
第15図 土坑41(1)・土坑42(2~4)・土坑43(5・6)・土坑44(7・8)・土坑45(9・10)・土坑46(11~14)
・土坑47(15・16)・土坑48(17)・土坑49(18・19)・土坑50(20~23)・土坑51(24・25)・土坑
52(26)出土土器・石器



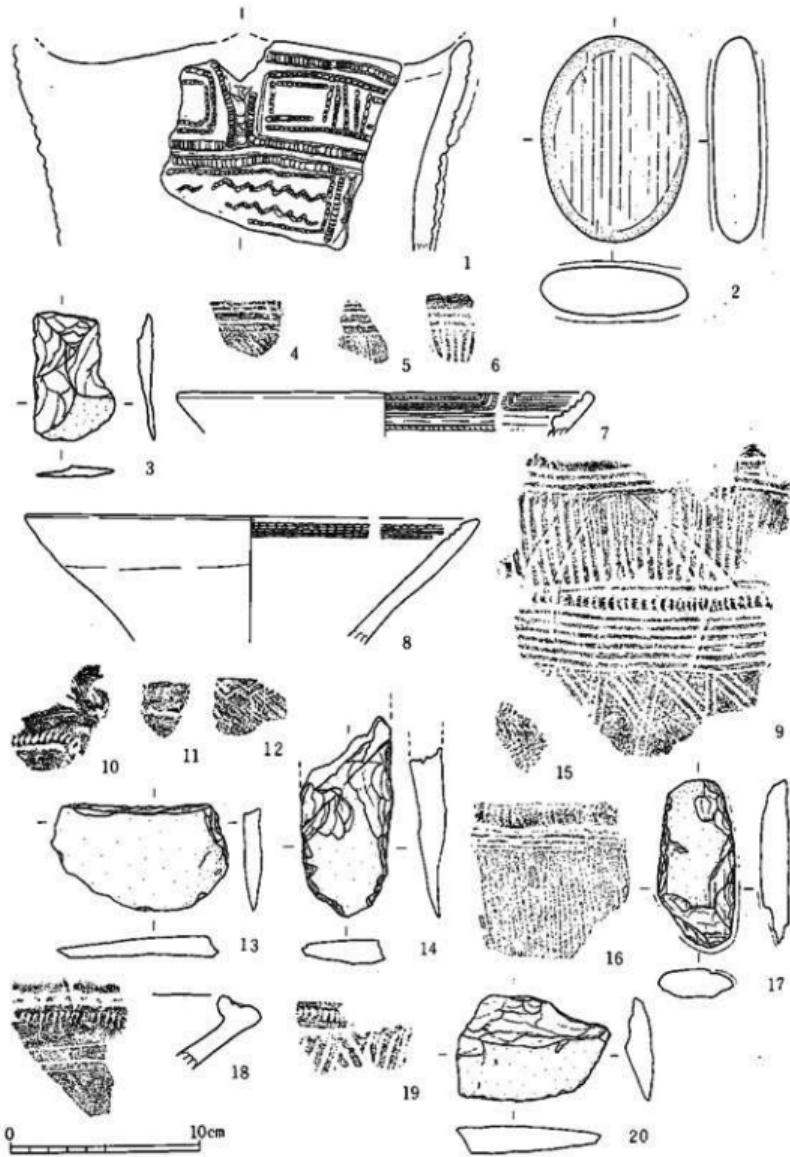
第16図 土坑53(1~4)・土坑54(5)・土坑55(6~7)・土坑56(8~10)・土坑57(11)・土坑58(12~14)・土坑60(15~22)出土土器・石器



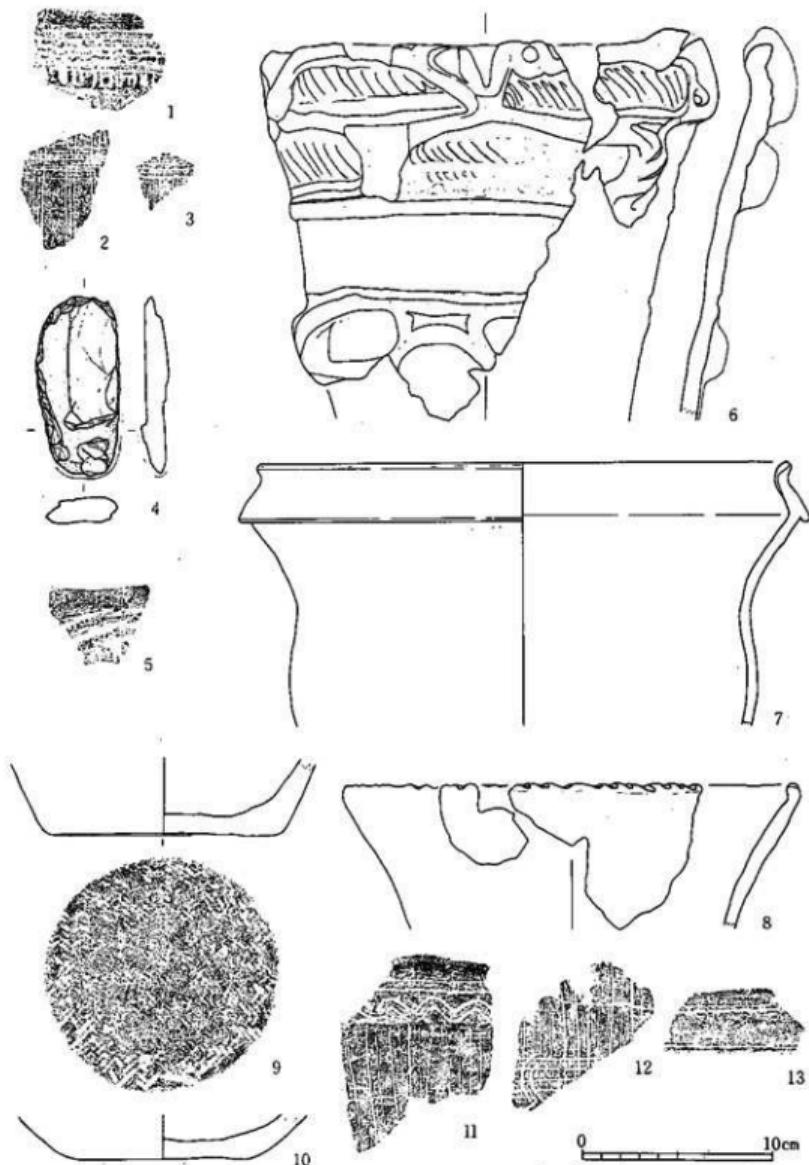
第17図 土坑60(1~6)・土坑61(7)・土坑62(8~11)出土土器・石器



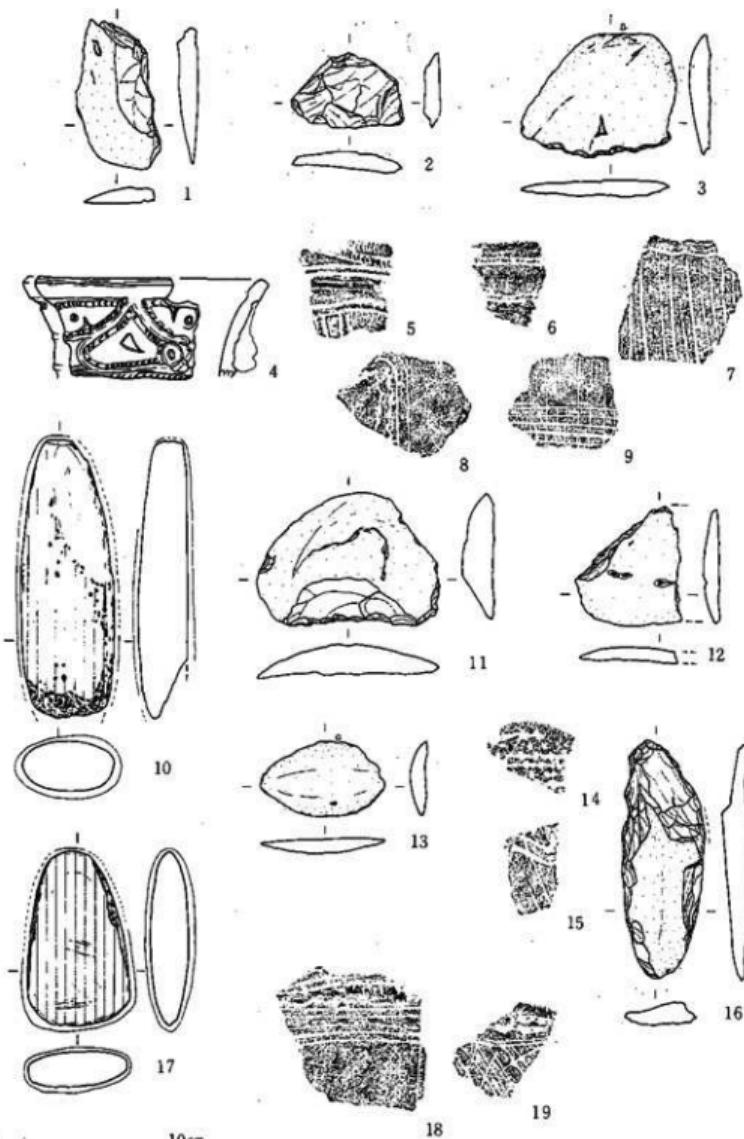
第18図 土坑62(1~3)・土坑63(4~10)・土坑64(11~13)・土坑65(14~20)・土坑67(21~23)
・土坑68(24~31)・土坑69(32)出土土器・石器



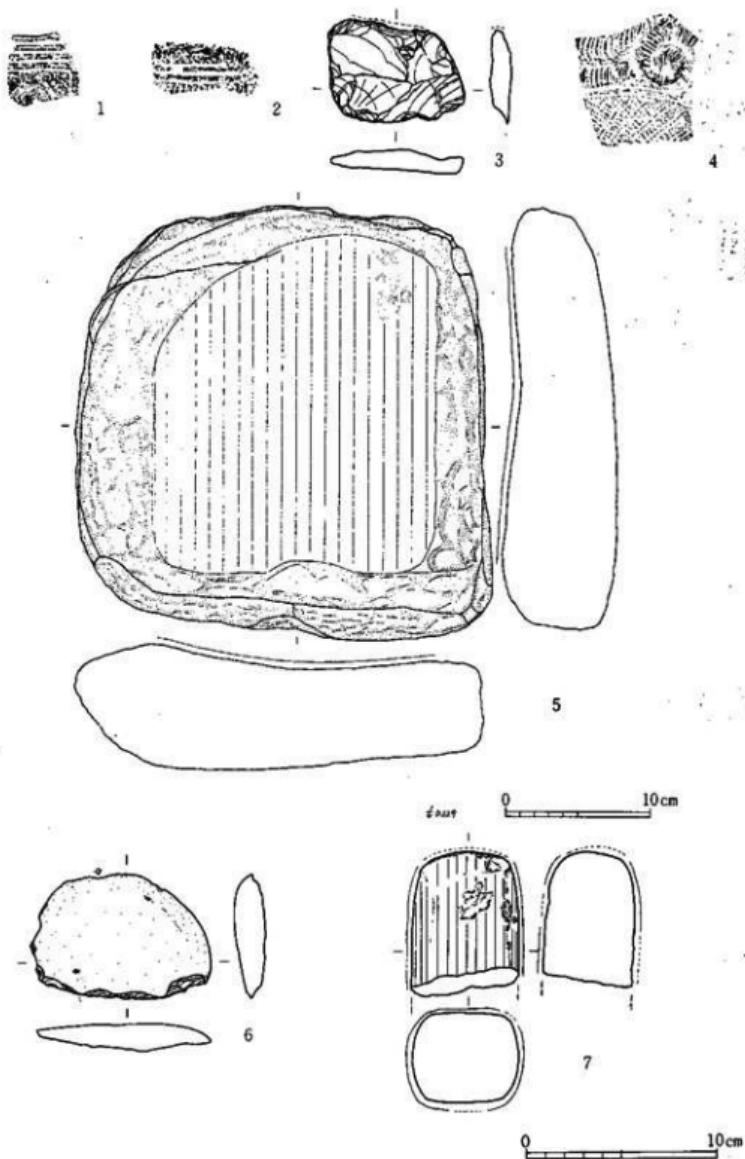
第19図 土坑70(1~3)・土坑71(4~5)・土坑72(6)・土坑73(7~14)・土坑74(15~17)
・土坑75(18~20)出土土器・石器



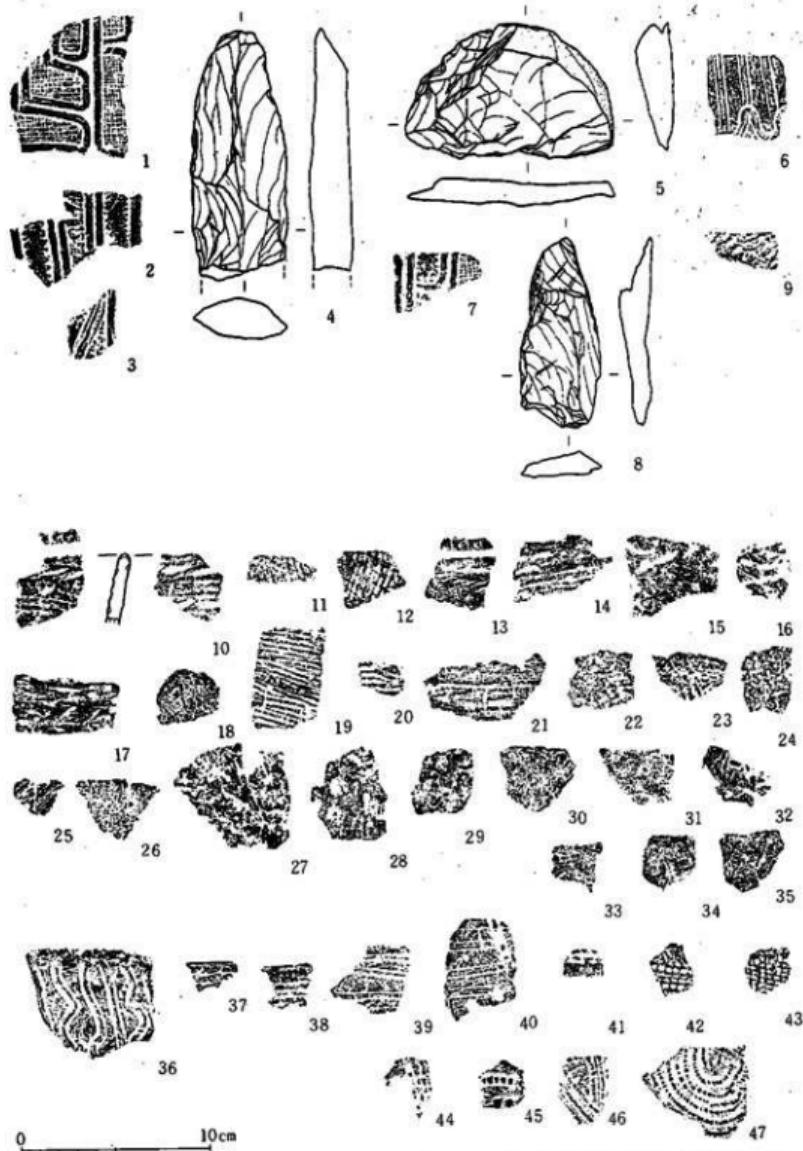
第20図 土坑76(1~4)・土坑77(5)・土坑79(6~13)出土土器・石器



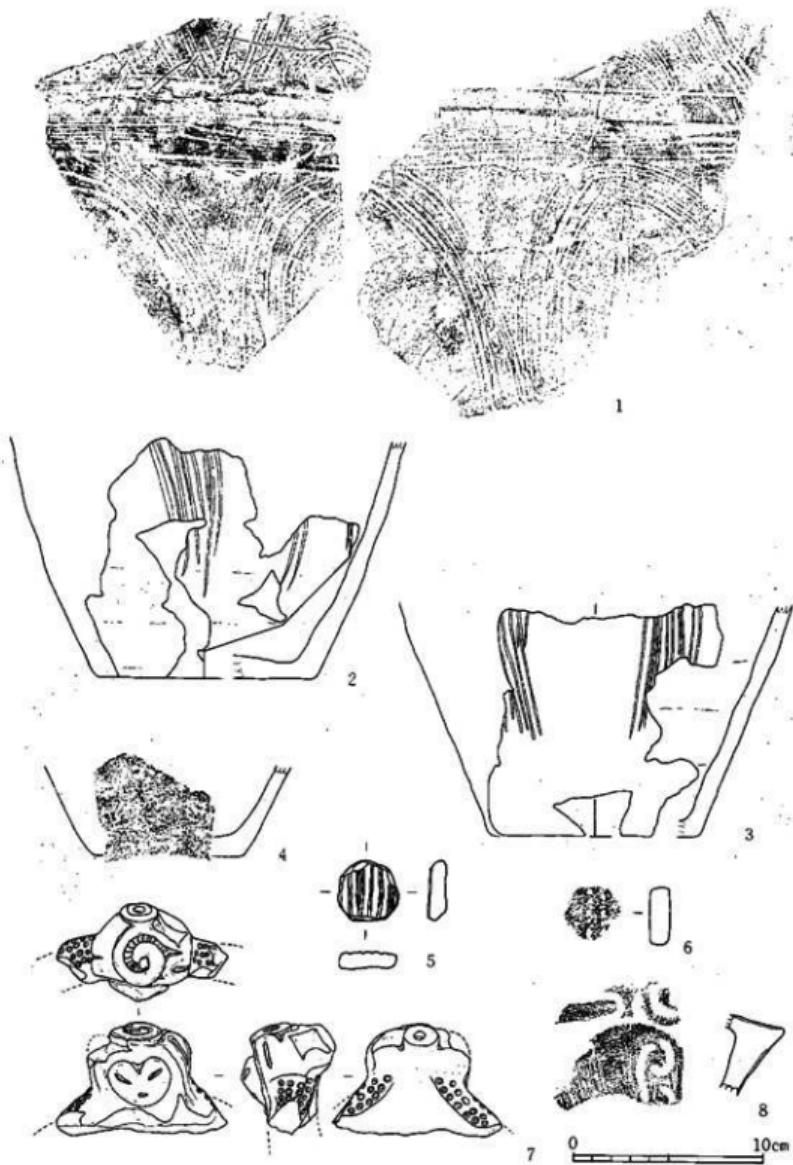
第21図 土坑79(1~3)・土坑80(4~13)・土坑81(14)・土坑84(15)・土坑85(16)・集石1(17)
・集石2(18・19)出土土器・石器



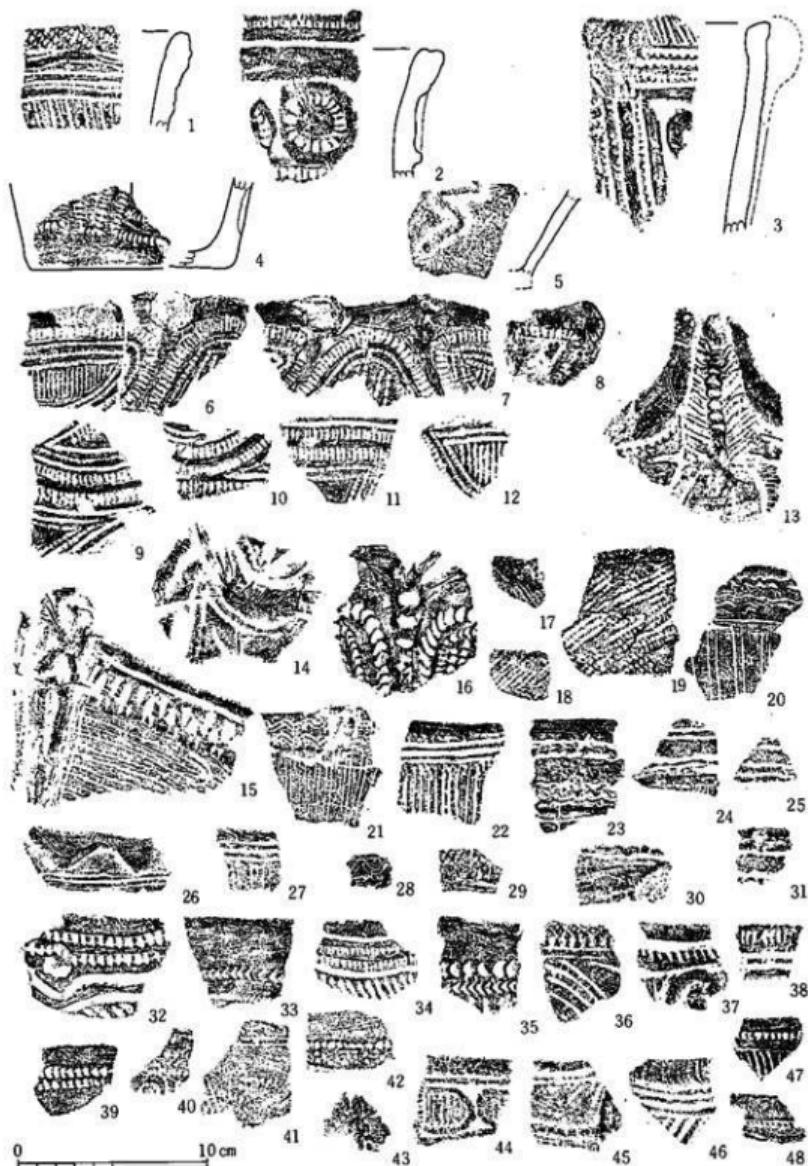
第22図 Pit4(1)・Pit5(2・3)・Pit7(4)・Pit11(5)・Pit12(6)・Pit13(7)出土土器・石器



第23図 Pit16(1~5)・Pit17(6)・Pit18(7~8)・Pit19(9)・遺構外(縄文時代早期10~35・前期36~47)出土土器・石器



第24図 造構外(前期終末～中期初頭1～4・中期中葉5～8)出土土器



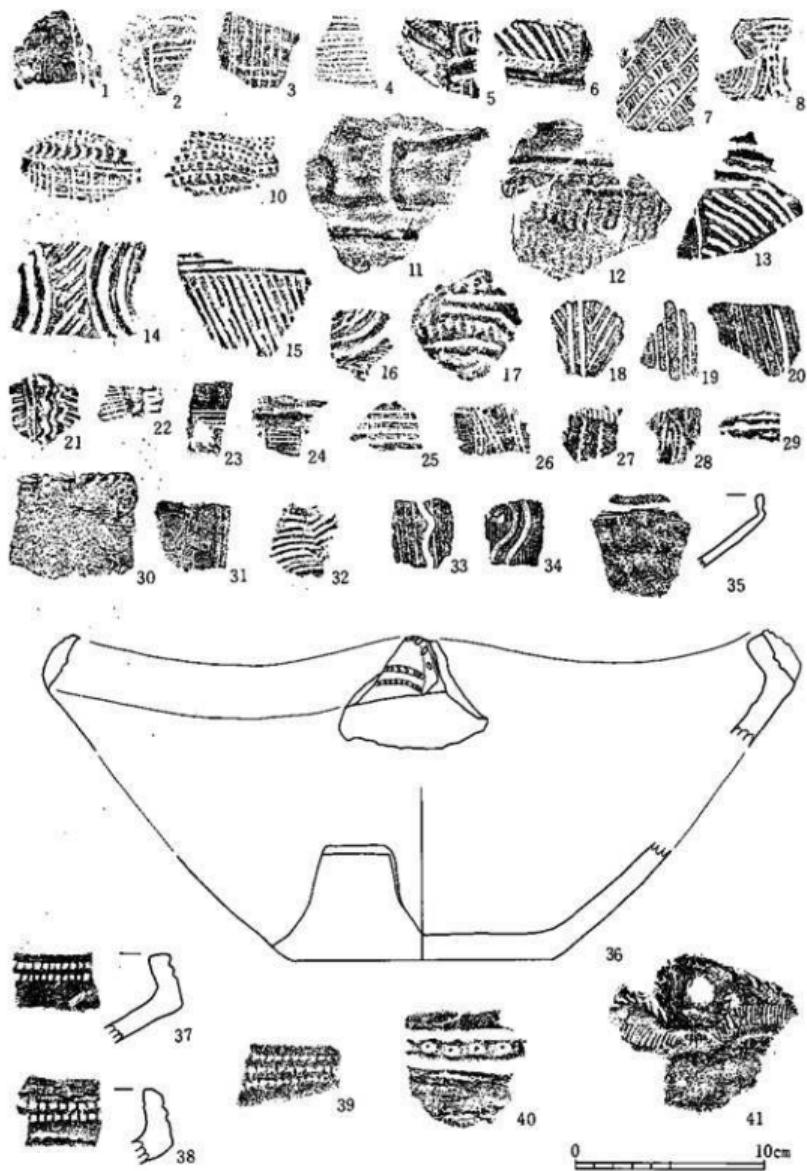
第25図 造構外(中期中葉)出土土器



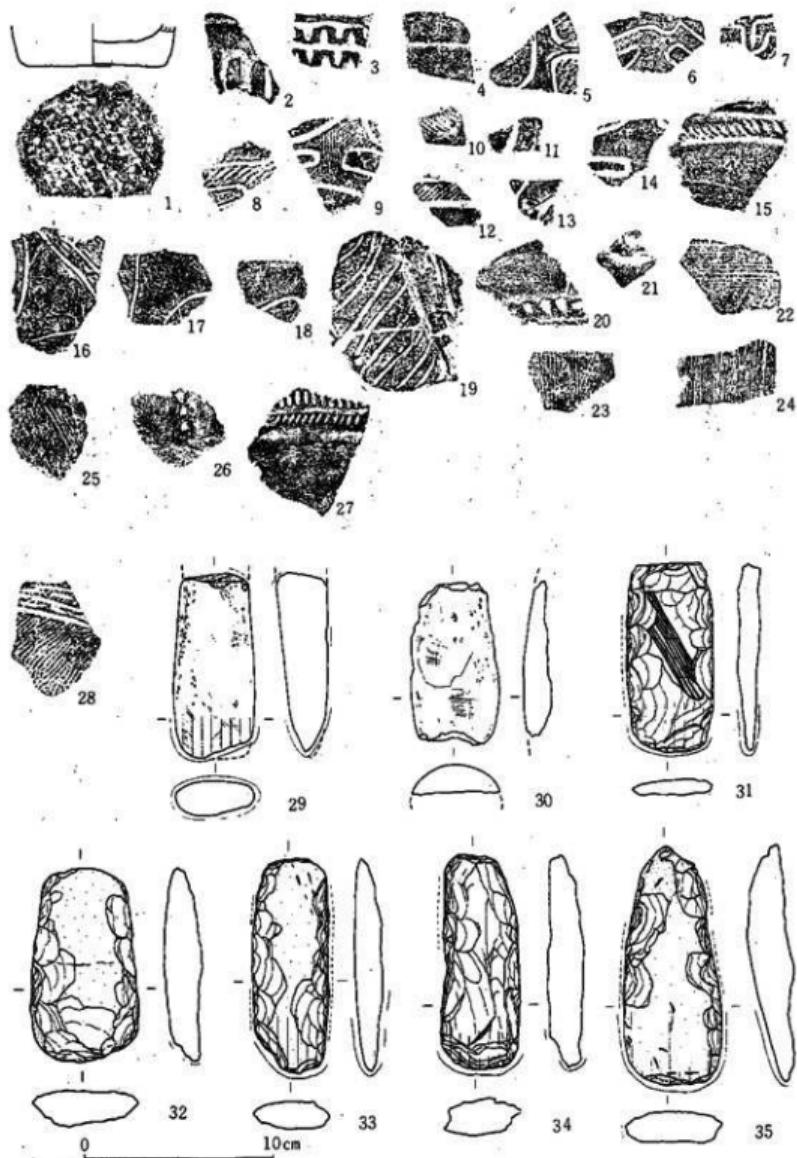
第26図 造構外(中期中葉)出土土器



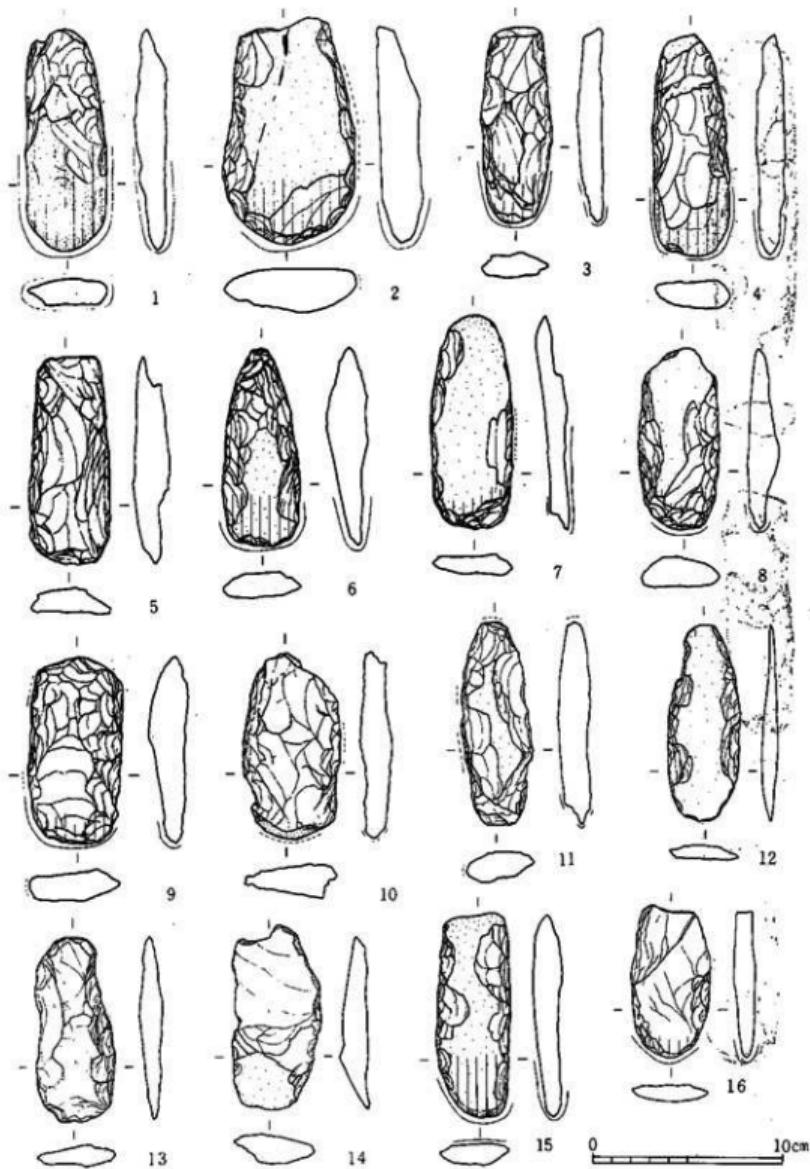
第27図 造構外(中期中葉)出土土器



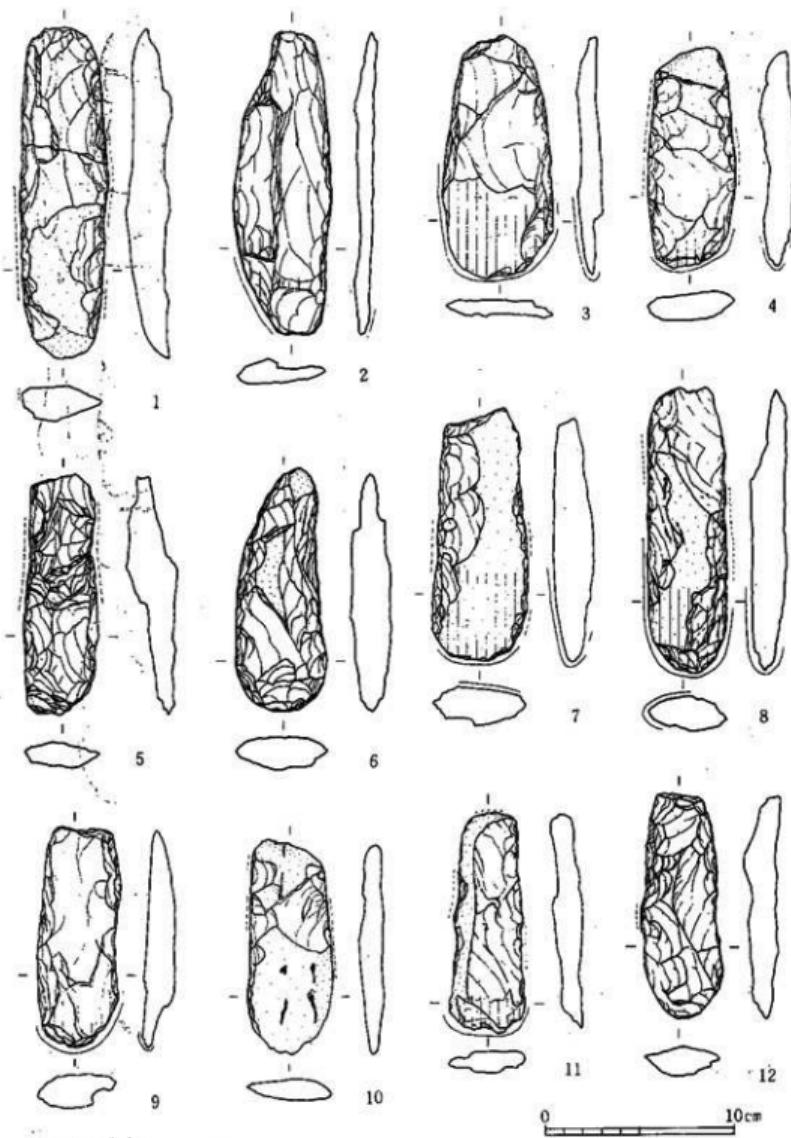
第28図 造構外(中期中葉)出土土器



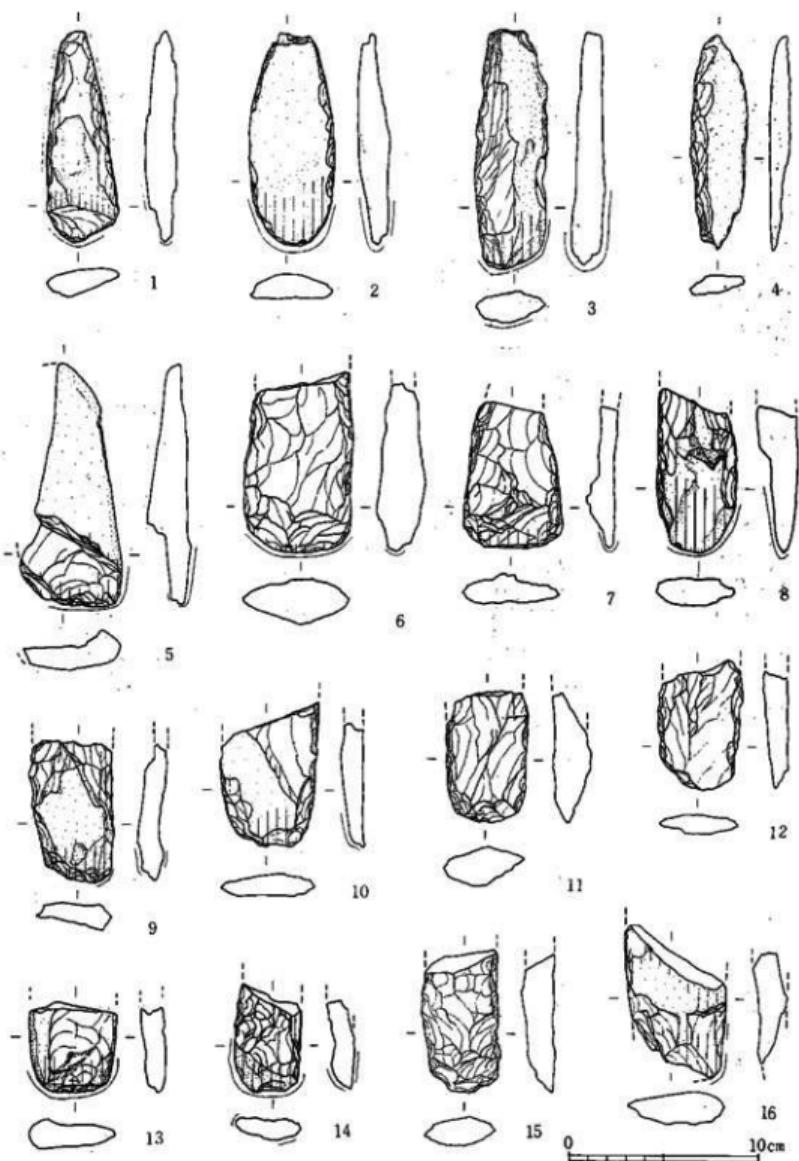
第29図 造構外(後期1~27・晩期28)出土土器・石器(磨石斧29・30, 化石付着31)



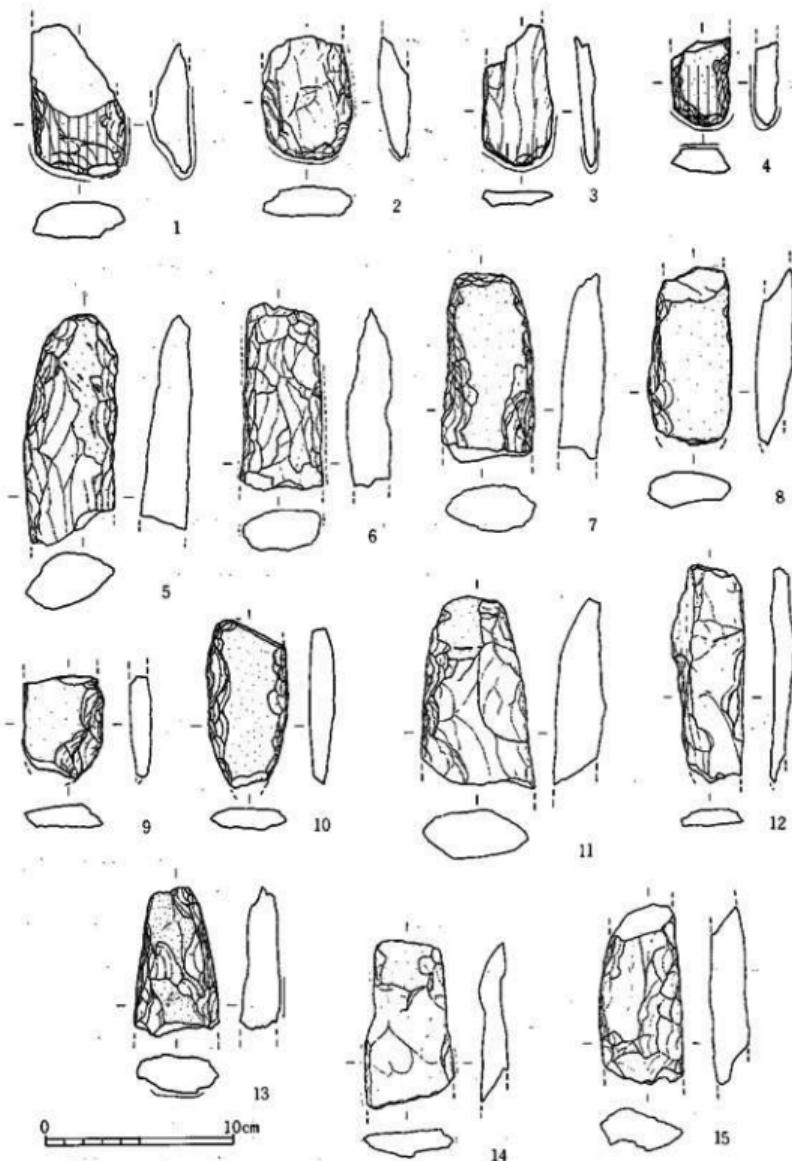
第30図 造構外出土石器



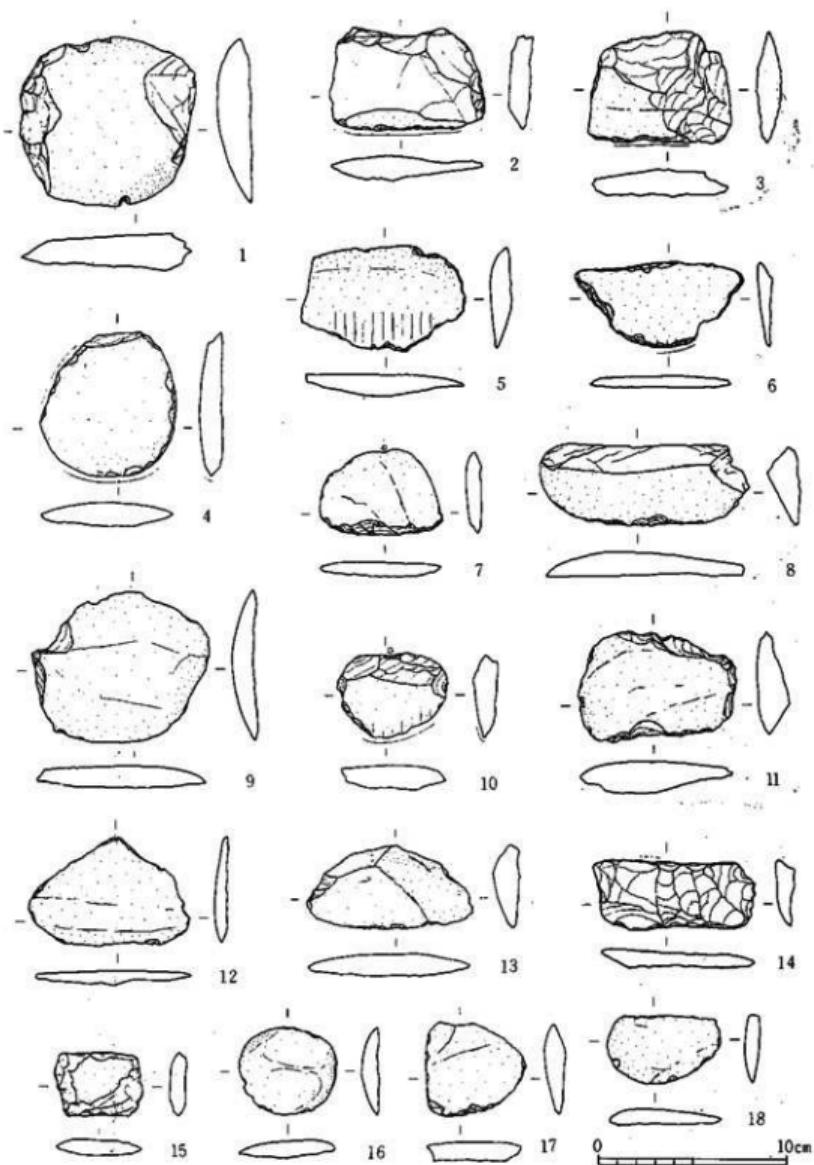
第31図 造構外出土石器



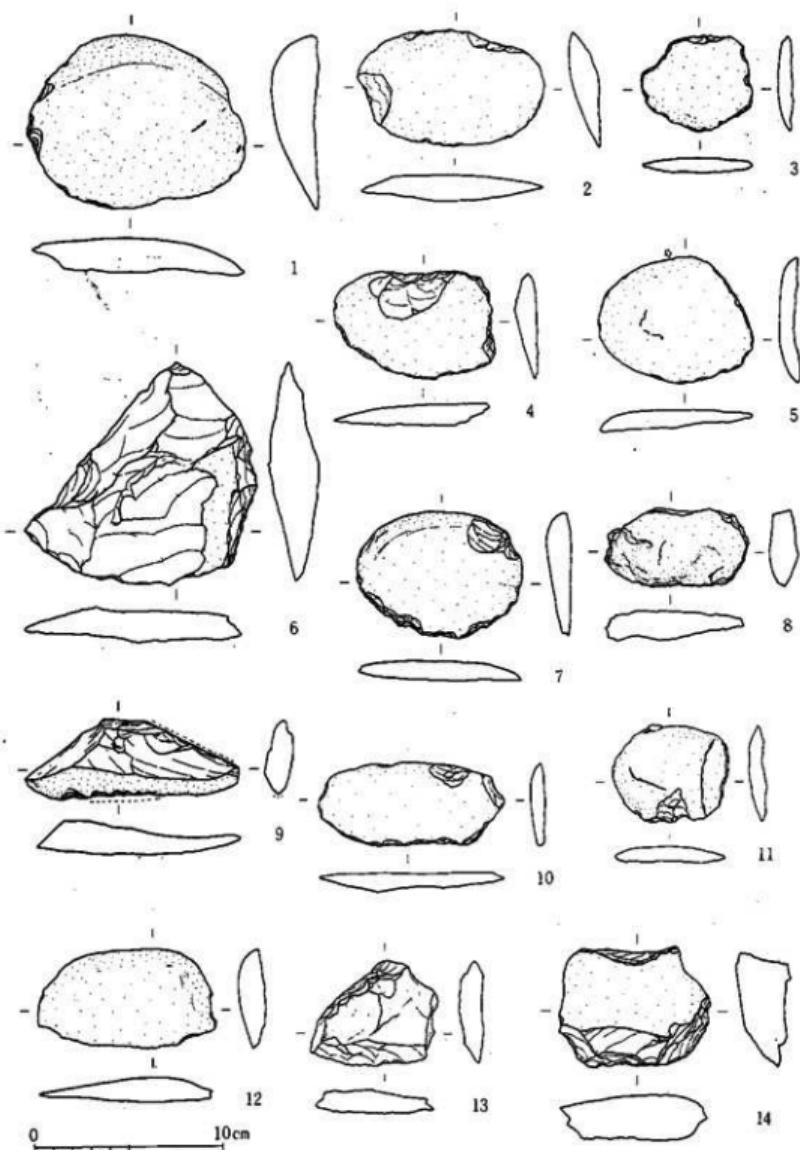
第32図 造構外出土石器



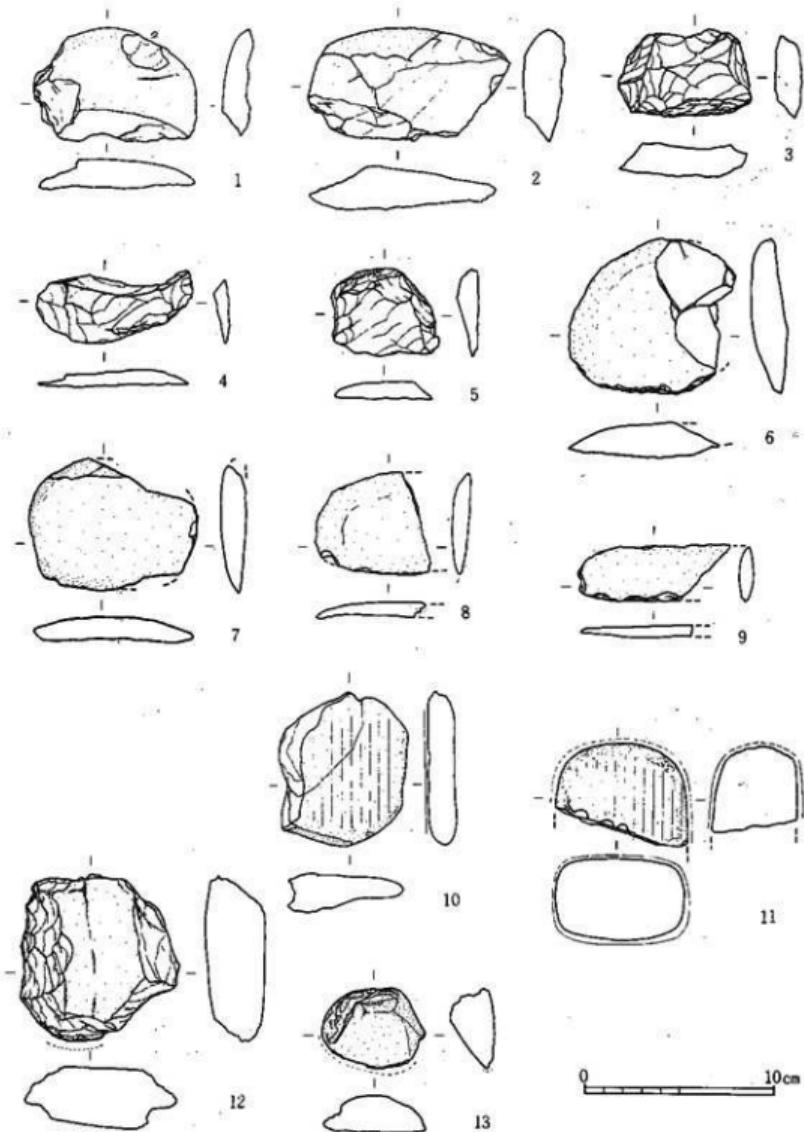
第33図 造構外出土石器



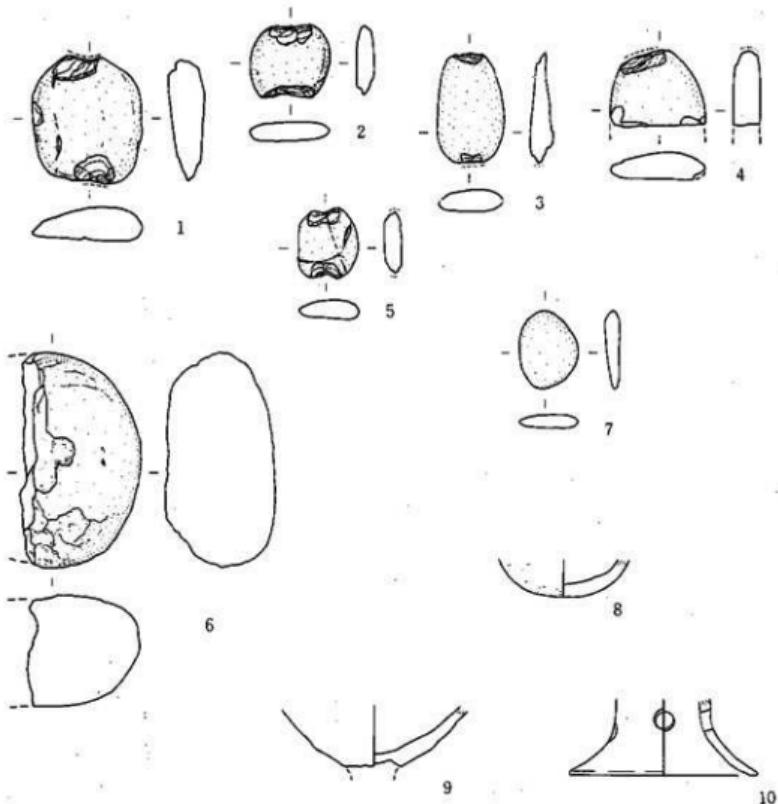
第34図 遺構外出土石器



第35図 遺構外出土石器

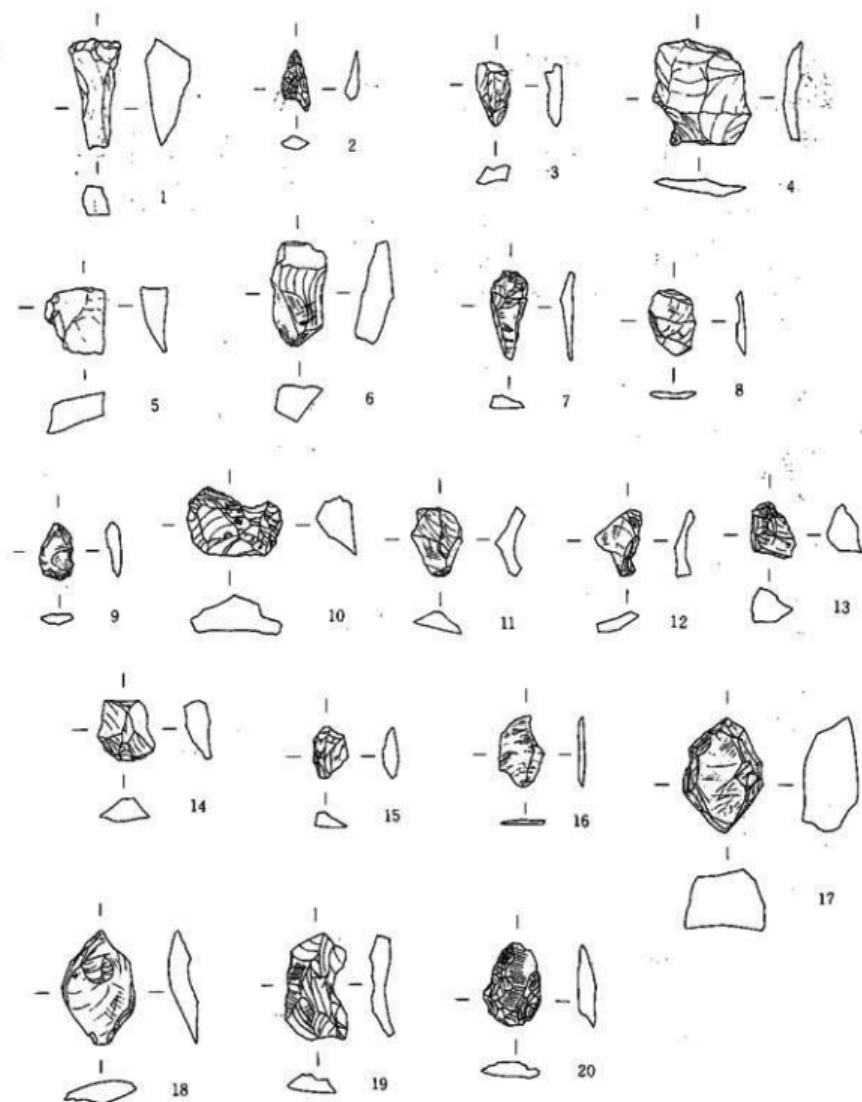


第36図 造構外出土石器

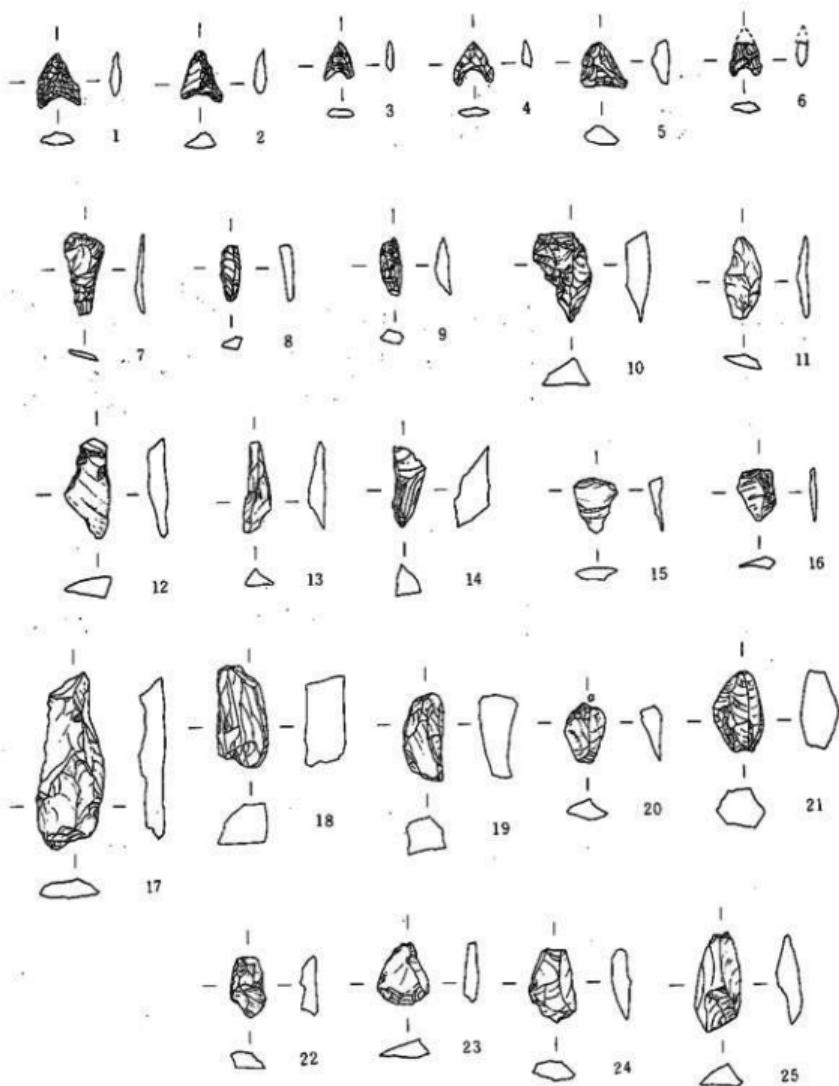


0 10cm

第37図 造構外(石器1~7・弥生後期~古墳前期8~10)・溝址2(11)・溝址3(12)出土土器・石器



第38図 2号住居址(1)・土坑3(2)・土坑24(3)・土坑28(4)・土坑30(5)・土坑34(6)・土坑39(7・8)
・土坑40(9・10)・土坑51(11)・土坑52(12)・土坑56(13)・土坑60(14)・土坑62(15)・土坑
71(16)・土坑74(17)・土坑77(18)・土坑79(19・20)出土石器



第39図 造構外出土小型石器



0 10cm

第40図 遺構外出土小型石器

写 真 図 版

図版 1



B区調査前 西から



C区調査前 東から



B区南西遺構 全体



B区中央付近遺構全体

図版 3



B区中央付近遺構全体



B区北東遺構全体



C区中央付近遺構全体

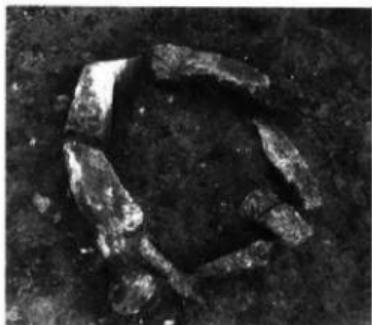


1号住居址全体

图版 5



全 体



炉 平 面



土 器 出 土 状 态



同 上 断 面

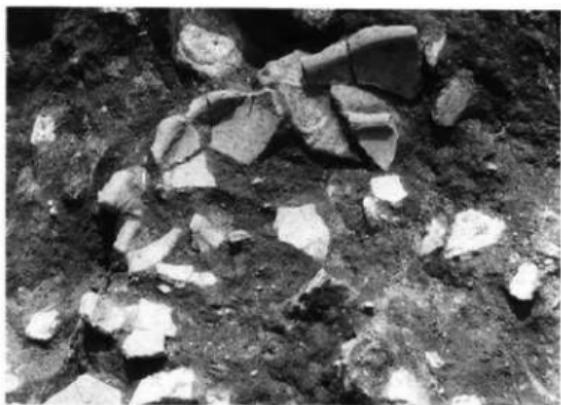


豊穴 1 全体



土坑1~7, ロームマウンド 南西から

圖版 7

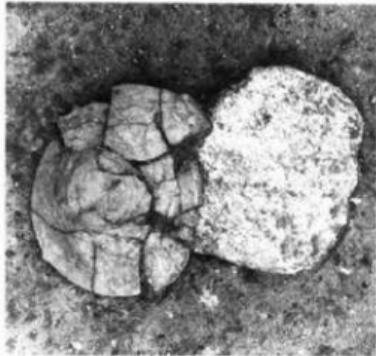


土坑 1



土坑 11

土坑
遺物出土狀態



土坑 17

土坑遺物出土状態

土坑17断面



土坑18



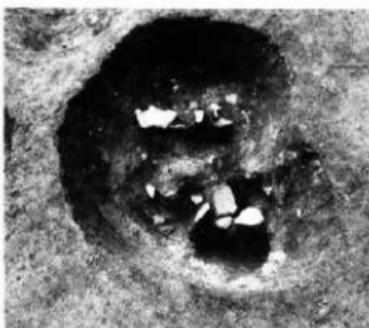
土坑22



図版 9



土坑23



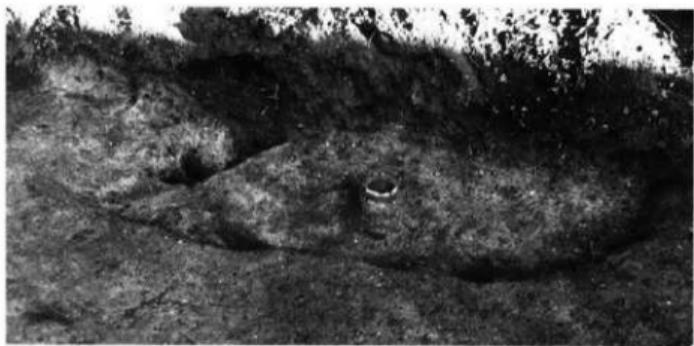
土坑26



土坑28



土坑33



土坑52

土坑遺物出土状態



土坑
62



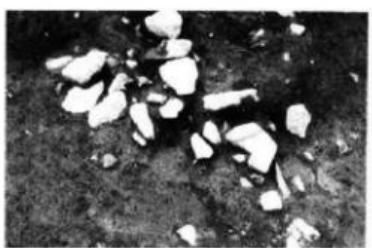
土坑
70



土坑
79・
80(右
79)

土坑全体及び遺物出土状態

図版II



集石 1 全体



溝址 1



溝址 2



溝址 3



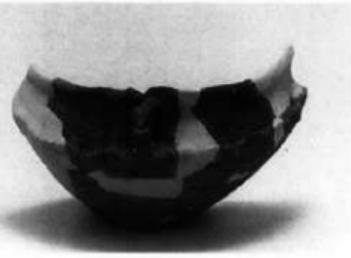
2号住居址出土遺物



竖穴 1



土坑 1



土坑 5



土坑 6



土坑 9



土坑 11



土坑 11



土坑13



土坑14



土坑
17



土坑
22



土坑23

图版15



土坑26



土坑30



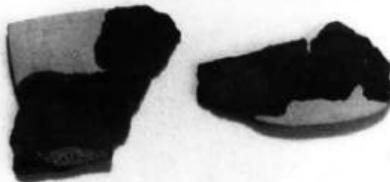
土坑39



土坑49



土坑52



土坑60



土坑60



土坑61

图版16



土坑70



土坑
73



土坑73



土坑81

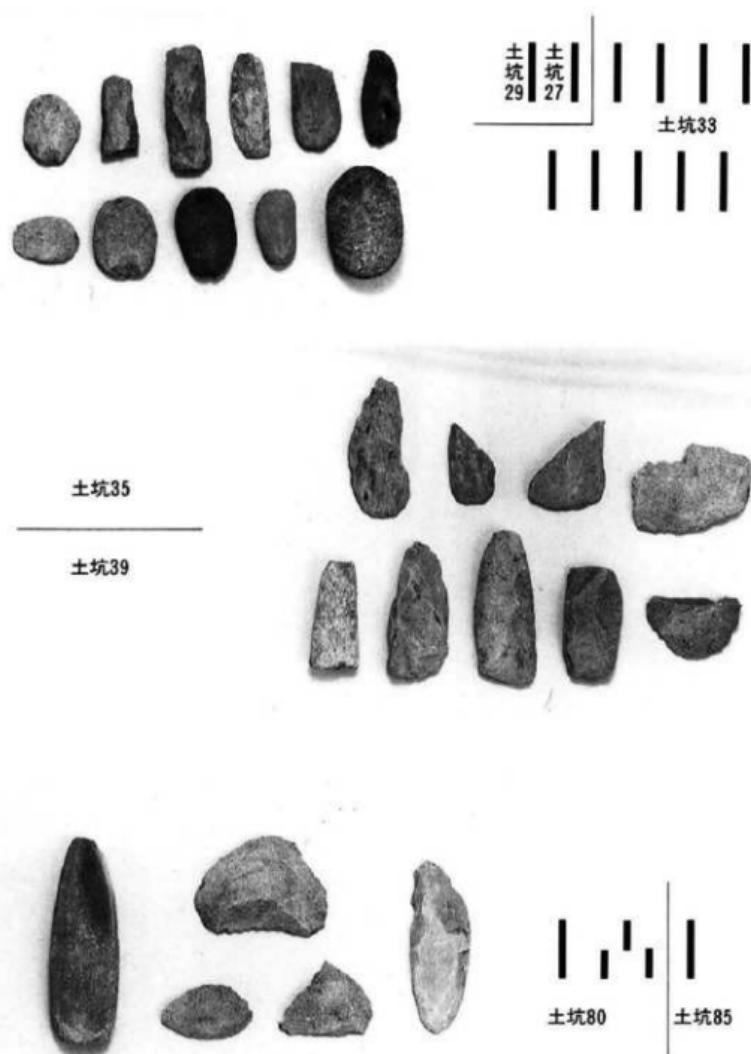


土坑79

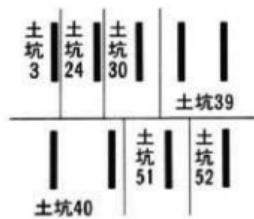


土坑79

图版17

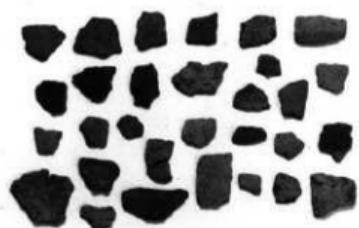


図版18



集石 1付近

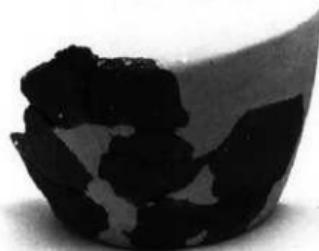
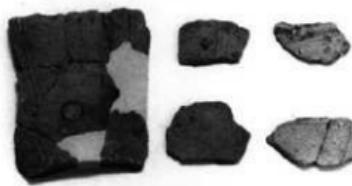
図版19



早期



前期



前期末～中期初頭

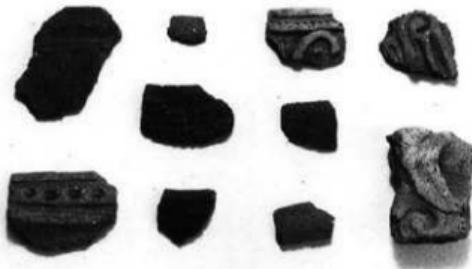
縄文時代遺構外出土遺物



B区中央土坑集中部出土顔面取手

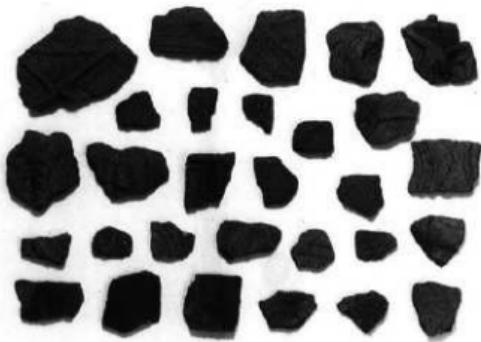
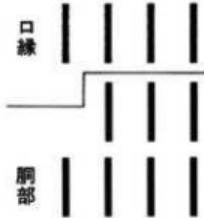
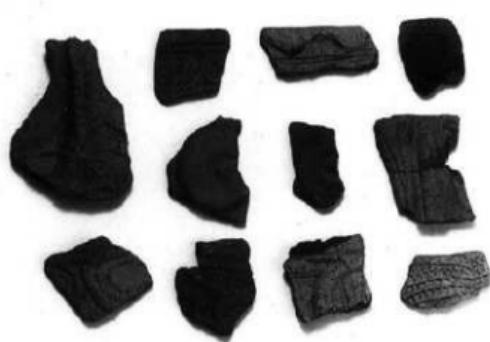


同一個体



口縁片

縄文時代中期遺構外出土遺物



肩部



肩部

縄文時代中期遺構外出土遺物



底部

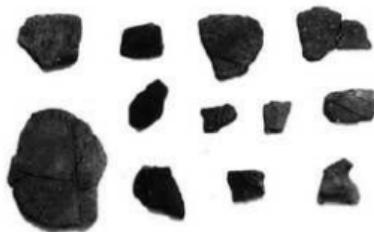


同左網代痕

口縁部



脚部

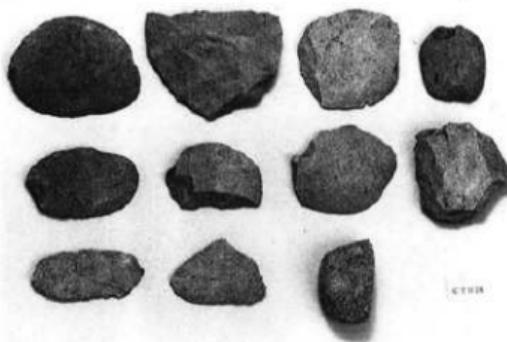


縄文時代後期遺構外出土遺物



縄文時代遺構外出土遺物

遺構外出土
各種石器



弥生時代～古墳時代遺構外出土遺物



溝址 2 研石

調査スナップ

B区
北東から



2号住居址



C区
南西から



農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（西部山麓地区）
道路建設に関する埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

直刀原遺跡

1991年3月 印刷・発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地

飯田市教育委員会

印刷 飯田共同印刷株式会社

